
運命に振り回される人間の鎮魂歌

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命に振り回される人間の鎮魂歌

【Nコード】

N1547J

【作者名】

神戒

【あらすじ】

一度滅ばされた人類は、特殊な能力を備えて再び文明を築いた。その中で、再び発展する科学技術。相反する、科学では証明できない『異能の力』。

それらが仲良く同居する中で、人々は心だけが肥沃しきっていた。巻き起こる争い、それを防ぐ者たち。

その全ては、その全てをひっくり返すため『日常』であった。

その日常こそが、繰り返す人類の『運命』だとも知らずに――。

S K I L L は話数で、一話以外タイトルはその話の事件名 で記します。しかし、全ての話が事件関わるとも限りません。

一つの事件に一貫して、そこから枝分かれする他の事件を主としますが、息抜きにまったく違うことも書きますので悪しからず。話のタイトルが起になり、

1 , 2 , 3 がそれぞれ承転結部分になります。

プロローグ

この世界を創造したと言う噂がある神は、自身が作った天使によってその創造物を大破させられた。

それには行き過ぎた科学など正当な理由がある。というか主な理由が、発達しすぎた科学技術であるのだが。そしてそれは、世界の人間が半ば神の存在など信じずに神の領域へと土足で踏み込んだ代償であった。

その結果、世界の大半は焦土と化し砂漠になって——故に出来上がった過酷な状況を強制的に課せられた生き残りは、それ故に隠されていた力が発現した。

——最も、そんな空想的戯言をいかにも真実だと吐き捨てるのはこの世界には僅か一握りしか居らず、大半の人間は醜き争いの代償だと信じている。

世界の荒廃については誰も語らない上に、破滅が起こり、現在に到るまでの——人が人たる生活を得るまでの空白の期間も誰も知らぬように隠蔽されている。

謎が多いこの世界では——それでも、昔を気にする余裕を手に入れられない人間は、必死に前を見ながら突っ走っていた。

話は戻り、特殊能力の発現について。——今まで生身では扱えなかったが、科学技術では容易に再現できていた現象。だが何も持たぬその時でも扱えるのはやはり、『特異の力』という一言でしか説明が出来なかった。

そして人間は、その能力と気力を駆使して廃れた街から技術を復活させ、水を湧かせ、人が生きる最低条件を容易に満たしていくのだが、結局何も変わらず、懲りず、また元へ戻ろうと健気に頑張る時は流れる。

それから数千年の時が経ち、空白の期間を除いて数えて現在は『てんれき天曆一七八八年』である。

危惧されていた大陸同士の結合は、結局何千年待ても起こらず、島国である日本は過酷な環境の中で孤立したのだが――。

「世界に名だたる東京『セントラル中央区』の治安維持委員会の本部が、敵との抗争で区画ごと吹っ飛ぶってのはどうなのでしょう」

劣悪だからこそ上がるモチベーションは、それ故に世界に認められる技術力を蘇らせていた。

黒いライダースーツを嫌そうに着る少年『なつめ夏目鳴爪』は、両腰に備え付けてあるホルスターに修理から戻ってきたばかりの拳銃を二本突き刺し、腰に巻いてある弾倉帯に^{マガジンスベルト}揃えた弾丸と弾倉を仕舞いながら溜息をついた。

「知ったことか」

ぶっきらぼうに言葉を返し、彼の^{ヘッド}高床式寝台に座り込みながら愛用の大剣を磨く涼谷涼子は、それからナツメを睨むような鋭い視線を突き刺した。

「準備はまだか、グズグズするな愚図」

言われながら、ナツメはさつさと白い絹の外套を羽織り、^{ショルダー}肩下げ
^{バック}鞆と散弾銃を肩から掛けて、準備の出来ていないであろう涼谷に嫌
味の一つでも吐いてやろうかと高床式寝台を見ると、既にその場に
彼女の姿は無く。

早くも玄関を出て行こうとする彼女の背は、背負われている大剣
によって更に大きく見えていた。

^{サウスシティ}

——南地区第二区画にある、寂れたアパートの一室。ナツメ
の自宅である其処を出ると嫌になるくらい真っ青な、好意的に言え
ば抜けるような青空は雲一つ見せることなく、故に隠れる場所の無
い太陽は、凄まじい火力で肌を焼きつくさんとしていた。

真昼間のそこで無用心に肌を露出していれば一時間と持たずに火
ぶくれを起こしてしまうほどの熱光線である。外に出ると見える人
の姿は、皆ソレに用心した格好で街を歩いていた。

「武装も間に合わせで、仲間も二人きりつてのは少しばかり、心細
い気はしませんか……？」

政府の一部である治安維持委員会は、半ば独立しているような組
織である。それを直接的にどうこう言って命令できるのは、東京の
郊外にビルを建て仕事に専念する内閣総理大臣くらいであのだが、
現在その首相からはなんの連絡もない。

治安維持委員会本局が^{セントラル}中央区ごと爆破してから早くも一週間以上
が経過しているのだが、支部にも連絡が来ないので、彼等はその問
題の場所へ向かおうとしていた。

「中央区ちゅうくわいへの道中で遇うだろ」

支部も本局から仕事を流してもらっているというわけではないのだが、給金は本局から貰い受ける。給与日は後数日と迫っているのにこれほどまで大事になってしまっているのだから、腕に覚えの在るものならば、彼らと同じように勇ましく中央区へと向かうだろう。

だがナツメが心配しているのは、最終的に集まる仲間の数などではなく、出発時点での人数である。

北の郊外は総理大臣が居るのでその犯罪率は極端に少ないものであるし、中央区はその取締りの総本局であるから皆無に等しい。東は街の入り口であるから街の人間が自主的に防犯活動に勤しむし、西は資金家や貴族の地区故に防犯対策はばっちりである。

だが南だけは何もなく——いわゆる吹溜りのような場所であった。

だから上等なモノを身につけていれば、心が悪に染まっている者に狡猾に狙われ舌なめずりをされる。

彼がそんなところに住んでいるわけは、ただ一言。本局長に「治安が悪いのでそこに住み込め」と命令されたからであった。

ナツメはそんな気楽な一言に大きく息を吐いて、

「敵との抗争で吹き飛んだって話ですよ。ここは兎も角、中央区にその名も知れない強大で凶悪な組織が潜んで居るかも知れないのに」

能力者だって居るかもしれない。

能力には誰でも目覚めることが出来る。その素質を持って生まれ
てきたのだが、実際、ナツメや涼谷程使いこなせるのは東京の総人
口の四分の一にも満たない。

人口の数でさえ曖昧なので、それが多いのか少ないのか分からな
いのだが――少なくとも力のぶつかり合いが、それとも一人の
能力によるものか。なんにせよ、中央区を吹き飛ばす程か、それに
準ずる能力を持つ人間が存在していた、または存在していることは
確かなのだ。

ステータス
身体能力を数値に変換し、それを自在に操る『リミッターコントロール』という
ナツメの能力や、自分の意思で自由に炎を纏わせる『バーンエッジ』では到底
太刀打ちできないことは聞くだけで判断できてしまう。

「だとしても、そんな派手な事する奴が残党狩りなんてショッボイ
事すると思う？ ま、仮に来たとしても、あたしの相手じゃあない
ね」

得意気にその自信家は鼻を鳴らす。区画を吹き飛ばすほどの能力
者が残党狩りになど参加すれば、その付近は加減をしても大変なこ
とになるだろう。だからそれほどの実力者は来ない。だから涼谷は
自信満々に言うのだが、事実、彼女はそうしても許される程の実力
を持っているので、ナツメは何も言返せずにただ肩を落とした。

「じゃあ」ナツメはそんな彼女をからかうように問いかけた。「敵
が来たら全部任せても？」

言っと、間髪無く頭を殴られた。風を切って拳が迫り、まるで巨
大なハンマーでも振り下ろされたかのような圧迫感が頭上に迫るや

否や、大剣を容易に振り回す腕力は、なるべく優しく、ナツメの脳を激しく揺らす衝撃を与えて行く。

思わず足元がふらついて、そして思わず涼谷の肩に寄りかかる。だが何故だかそれは許してくれるようで、彼女はナツメの頭を揺らしながら言い聞かせた。

「男は女を守るものだ」と認識しているんだが」

「だって涼谷さんは男よりも勇まし——ッ」

不意に遮られる台詞の要因は、顔面に突き刺さる彼女の裏拳であった。大したダメージを負わないよう力を調節している彼女は、恐らくナツメが制御操作リミッターコントロールで力を全開に上げても敵わないのだろう。

ナツメが鼻血が垂れる鼻を、外套で押さえつけていると涼谷は心外だとそっぽを向いた。

短い癖っ毛は全身を髑るような熱風に微かに揺らぎ、そんな勇ましい口調と雰囲気を持つ彼女は無口になったとたんに、年齢としより少しばかり若そうな女性に見えた。

やれやれだとナツメは大きいため息を付いて、

「はいはい、涼谷さんは可憐で花も恥らう乙女ですよ」

「心がこもってない」

「俺に何を求めているんですか。口が過ぎたことは謝りますから。拗ねてないで行きましょう。ほら」

道のと真ん中で立ち止まっても、誰も邪魔そうにしないのは道が大袈裟なほど空いているからである。

だからといってそれを存分に味わう暇も余裕も、興味も無いので、ナツメは彼女の手を引いて前を進んでいくと――。

『古本叩き売り市場開催!』と言う、風になびく旗が本屋の前に立てられていた。

なんとこの事――なんとこの事だ。古本を叩き売りするだなんてことは、つまるところ在庫一斉処分と言う事だろうか。つまるところ、手に入らなかつたあの文献が、小説が、一式セットになつて驚きの価格で売られているのだろうか。あの店の店主に本の価値などは見出せていない。そんな彼が何故本屋を営んでいるかは不思議なことではあるが、そんな事が功を奏しているのかもしれない。

妙に頭が回転し、胸が高鳴っていく中で、一人の男が中へと入って行き、ナツメの胸は嫌な予感でまた心臓が激しく乱れた。

これは――下手をすれば欲しかったものが買われてしまうかもしれない。いや、欲しいものなんてのは最初から無かつたが、見つければ欲しいと感じるものだ。だが最初からそれを見なければそもそも欲しいと思う余地も無いわけで。だけでもしかするとあつたかもしれないという仮想がどうしようもなく心をかき乱してしまうかもしれない。

「涼谷さん」

だからナツメは彼女のようにまどろっこしい遠回りな事は抜きで、

「本屋に寄っていいですか？」と聞こうとするのだが、

「ダメだ」

即答する。ナツメがその時見た彼女の顔は、阿修羅像の静かな怒りを感じている顔に良く似ていた。顔の構造などではなく、雰囲気
が。

「な、何がですか。まだ何も言っただけじゃないですか」

「本屋だろ、ずっと見てたから分かったし——そんな所に寄る暇も余裕も無いし、あたしには興味が無い」

まるで心を読んだように吐き捨てる台詞である。涼谷はそう言っ
て得意気な顔でハイドを見て——背を向けていたその肩を力強
く掴んで引き寄せた。

本に盲目になっていたナツメは、そのお陰で目の前を通り過ぎて
いく男とぶつからずに済んだのだが——どうしたのか、その
男はナツメの前を通過し終える直前でわざとらしく、その肩でナツ
メの顔面を殴打する。

「いつてーっ！ 何すんだよ餓鬼コラ」

痛いのはこちらの顔の方だと愚痴ろうとするが、その少しばかり
背丈の大きい男は、ソレよりも早く無茶すぎる因縁を吹っかけて——
——だが吹っかけることさえ出来ればもう彼等の独壇場なのか、
気がつく湧いて出る彼の仲間は一瞬の間にしてナツメ達を囲んでい
た。

総勢八名。筋肉質な肉体で、それぞれが何かの迷信なのか鼻にピアスを装飾し間抜けな顔で睨みを利かせる。

どうしたものかと溜息をつく、涼谷は白々しく乙女を装ってナツメの背中に隠れてしまった。

どうしたものかと——本当にどうしたものだろうか。能力の持たないチンピラに絡まれるたびにこんな罰ゲームみたいなものを見なければならぬのだろうか。

彼女は確かに美人かもしれないが、しおらしい姿というよりは勇ましい格好の方が合っているのだ。

「ほっほー、可愛い彼女ちゃん連れてんね。有り金とその娘^こで、いいヤツ！」

背後の涼谷はその後ろに回る男に両手を封じられてナツメから引き剥がされ、女の子らしい悲鳴を上げる。そうして男は、そんな事を言いながらナツメの顔面へと拳を放つのだが——それは『どうしたのか』、何も無い虚空を貫いていた。

先ほどまで居たナツメの姿は一瞬にして消えていて、視界が反転。街から空へと移り変わり、踏みしめる地面はその姿を消して——
—そこでようやく、ナツメが居なくなっただけではなく、自分が転ばされて空を仰いでいるのだと理解できた。

「もう、所持金『だけ』は勘弁してください」

「ちょ、あたしは!?!」

大剣が見えないのか、男は涼谷を押さえつけたまま——彼女の後頭部で叩きのめされた。

果敢にも立ち向かってくる男にナツメはかがみ込み、がら空きになつている腹に拳を一打。内臓を浸透して行く衝撃は余ほど空きつ腹に堪えたのか、彼は腹を抑えながら倒れていく。

そうしてまた——今度は鋭利なナイフを抜く男が居て、

「それっ」

屈んだ際に手を伸ばして掴んだ砂を男に振りかけると、彼はそれを振り払うような動作をして——ナツメはその大きく現れた隙に突っ込み、腹を蹴り飛ばした。

男は小さいうめき声を上げて背中から倒れていって——気がつくと、既に先ほど絡んできた全員は余すことなく地面に伏していた。

悪乗りしていた涼谷はそれでもしっかりと働いてくれたようで、ナツメより一人多く対峙してくれたようだった。

「ふう……、金にならない仕事をしてしまった」

見せしめに外套を引っ剥ぎ、ズボンを脱がして両手を縛り、クツを脱がして遠くに捨てる。

遊び半分でそうしてやった後、涼谷は道中に戻りながら肩を落とす。ナツメはそんな彼女を励ましながら——まだ始まったばかりの今日に、大きな不安感を感じていた。

SKILL 1 『始動——スタンバイ——』

東京はその昔よりも規模を大幅拡大し、その昔の東京一つ分の大きさを一つの地区にして——現在東西南北中央と、五つに分かれている。ついでに言えば、その一つの中も細かく別れていた。

そしてまたその昔、平和を守るというお題目を掲げで政府に作られた国家公安委員会。それは現在、治安維持委員会と名を変えて平和を維持し続けていたのだが、一週間ほど前その本部がある中央地区が原因不明の爆発に見舞われた。

本部が巻き込まれたのかは分からぬが、地区の区画ごとに置かれる支部局員は誰も連絡が付かぬ様子。そして——その爆発には様々な憶測が飛び交っていた。

その真実を確認するためにナツメ、涼谷両名は中央地区へと向かうのだが……。

——中央地区へは電車で行けない上に、其処へ向かう『中央線』が走ってるのは西地区の駅か、東地区第三区の駅にしか通っていない。

その上、西地区に到着した彼等の耳に届く駅員の言葉は非常に残酷なモノだった。

「此方寄りの爆発だったようで、未だ中央線の復旧はしておりません。東地区第三区画からでしたら走っていますので……」

有線の黒電話の置かれる駅員室。天井に備え付けてある大きなプロペラ——シーリングファン——は穏やかに廻り、室内の温度を下

げて涼しくする。

もしかすると不機嫌になって怒鳴り散らすのではないかと思われた涼谷は、存外に大人な態度で丁寧^{ていねい}に頭を下げ、受け取ったコップを口にして喉を潤^{うる}していた。

ナツメも水を貰^{もら}って——それから親切な駅員にまた頭を下げて、彼等はプラットホームで電車を待った。

「あと三十分。そしてまた五十分」

指折り数えて、「足して八十分だ」と不平を漏らす彼女は、電車の待ち時間と、乗ってから目的地へ到着するまでの時間を指していた。

電車は一周するために乗換えなど手間が掛かることが無いので便利^{べんり}なのだが、車両が限られている為に廻^{まわ}ってくる時間は遅いという程ではないが、タイミングがずれば数十分待つのは確実である。

「それくらい我慢してくださいよ」ナツメは言った。「これから嫌でも忙しくなるかもしれないんですから」

回転式拳銃^{リボルバー}で純銀製のM二九は、手に取るとやはりずっしりとした重さを持つ。陽光に金属光沢を見せてその丁寧な造りに神々しさを垣間見ながら、ナツメは純銀の弾丸の変わりに四四マグナム弾を詰め込みながら、様子を伺^{うかが}う。

「分かっている」と涼谷は殊勝に頷^{うなづ}くのを見て、今度は自分で木製グリップに改造した愛用の自動拳銃——ベレッタの弾数を確認する。

それから愛用の散弾銃——レミントンM八七。——を丁寧に調子を見て、彼女に言葉を返した。

「見てますね」

腰の弾倉帯マガジンベルトの中をまさぐり、弾の種類ショットシェルを選び分けているフリをしながらナツメは言った。

「ああ。敵意はなさそうだが」

外套をマントの様に羽織り、露になるベージュ色の制服のズボンのポケットに手をつ込み、彼女は答える。その脇で——ナツメの髪が逆立つのを、横目に見ていた。

プラスチックケースの弾丸。念のためにその腹に『危』のマークが入ったモノを散弾銃に詰め込んで——リミットコントロール制御操作によって、遠くの鳥の囀りさえずりまでも聞こえる程にまで上がった聴力は、設置してある大きなゴミ箱に姿を隠す男の息遣いまでも聞き取れるようになっていた。

短く荒く、呼吸は繰り返し、ジリジリと靴の裏は砂塗れの地面を擦ってはゴミ箱から身体を出して様子を伺う。一体何が目的なのか、分からないし、分かるはずも無い。

治安維持委員会の所属証明書を誰かに見られたわけでも無いし、そもそもナツメは以前ゴタゴタに巻き込まれた際に紛失してしまったのだ。財布ごと。

自宅に帰って所持金と必要なモノは持ってきたが、なくしたもの

は二度と帰ってこない。この東京に戻ってくる際に乗っていた砂船サントウォームも砂蟲に襲われたせいである。——本局から配られる高性能無線携帯通信機も広大な砂漠に落としてしまった。

涼谷が言うには、爆発があつた時から電波が乱れて無線では通信できないらしい。故に有線の電話は、地下に敷く電話線が無事な限り通信は出来る。だから駅員室で試してはみたのだが、そもそも本局こうの電話が電話線が破損しているらしく、連絡が取れなかつた。

要らぬ事を思い出したがばかりに、飛ぶ鳥を落とす勢いで落ち込むナツメの心は大きく油断していた。

だが、だからといってその妙な様子の男が大きく動くわけでもなく。

やることも失つたナツメは、能力の使用を止めて大きくため息を付いた。

「敵意よりももっと危なげなモノを持ってます」

彼が聞いたのは、プラスチックが何かに擦れて立てる音。スイッチ装置のカバーに乗る指が重さを足して、起動しない程度に押され、離されが繰り返されている音であつた。

冷静に言ってみる。確信が無いのだが、彼の頭の中では既にソレは事実だとして受け止められているために、落ち着いた言動とは裏腹にその顔は冷や汗に濡れていた。

そして向かい合うプラットホームに挟まれる線路を覗いてみると——そこには予想したものが無かつた。

「ああ、ばくだ——」

そういえば、それを口にするなと止めておくのを忘れていた。もしそれを聞かれてしまえば敵は完全に後戻り出来なくなる。そんな事を彼女が言葉を紡ぐ間に、ナツメが考えていると——不意に巻き起こる凄まじい衝撃と、消えて行く足場に涼谷の呟きはかき消されていった。

閃光が辺りを包み、その後に耳に劈く爆発音が全てをかき消した。

何も見えず、何も聞こえない。感じるのは全身を蹴る瓦礫による痛み。妙な浮遊感の後に落ちた其処は恐らく線路の下だろう。

ナツメは事が起こってしまった直後に、全てを吹っ切らしたように受身を取って、ホームの一部が崩れ、そのせいで巻き起こった煙と、純粋な爆発による煙が混じるそこで立ち上がり、自動拳銃ベレッタを抜く。

脆いホームの崩壊は未だ続き、瓦礫が地面を振るわせる衝撃と音はそれから暫くしてから鳴り止んだ。それでも人の悲鳴は止むことが無かった。

一度荷物を置き、外套を脱ぎ、そして肩に掛けるモノを全て掛けてから、外套で隠すようにソレを着なおす。ナツメはそうしてから息を潜め、腰を低くして線路を足裏で確かめる。

手を伸ばせば指先が見えぬ程の濃煙のつえん。外套を口元に当てても硝煙臭い故に、ナツメはむせ返りながらも線路を伝って煙から脱出しようとするのだが、

「い、狗がアッ！」

そんなもる叫び声の直後に発砲音が空気を震わせて——煙を突き破ってやってくる、尻に棒の付いた手榴弾は、彼に避ける間も与えずに腹で炸裂した。

凄まじい衝撃に彼の身体は強制的に後ろへと押され、無防備になる全身に飛び散る破片は突き刺さる。頬を擦りきり、右腕の関節に突き刺さり、腿を切り裂いて——ナツメは其中で迷わず、発砲音がした方向へ銃を向け、撃つ。

爆発のお陰である程度晴れた煙の先に入る男は、そうした動作の後に胸に血の華を咲かせるや否や、その被弾場所を押さえながら前のめりに、そして未だ晴れぬ煙の中へと落ちていった。

その後、衝撃を利用して背後へと飛び退き、全方位を警戒しながらナツメは声を上げる。

「中央で待ってます！」

同時に——ナツメが駆ける方向とは真逆の場所で、炎が激しく唸りを見せては、銃声が連続して響き渡った。

恐らく加勢する必要も無く、逆に足手まといになってしまうだろう。ナツメは強化繊維製ライダースーツのお陰で露出部分以外の傷が皆無である故に、突き刺さる破片は全て服の上で止まっていた。だからナツメは軽快に、そのまま引き金に指を駆けたまま背を向け、その場を去って行く。

背後で小さく返事が聞こえたのは、恐らく気のせいでは無い——
と信じたい。

——ウェストシティ西地区第一区画。九時一〇分現在——

激しく乱れる呼吸を整えながら、ナツメは建物を背に寄りかかる。
抜き、構えたままの銃をそのままに、開いた手を乱暴にバッグの中
に突っ込んで、水の入った革袋を取り出した。

「んっ……ふう、はぁ……」

口で栓を抜き、紐で繋がるソレをそのまま落として飲み口を口に。
そうして些かぬるくなる水で喉を潤してから、彼は汗を拭って髪を
掻き揚げた。

休むことなく逃げて十数キロ。駅を抜けてその区画を出るまでで
数人の男に狙われた。同時にではなく、順々に。まるで敵の体力を
削ぐことを目的としているように。

人通りの多い通りから抜けた裏路地で一息つきながら、彼は頭の
中を整理する。

敵は——セントラルシティ恐らく、中央地区で爆発を起こした敵の一味か、そ
れに感化された関係ない組織によるテロか。全てが見知らぬ個人で、
偶発的に彼を見つけ、攻撃したという事も考えられるが、それは確
率的に低すぎる。その昔、脳みそをネットワークに繋げる技術があ
った時代には意識の並列化など小難しい技術で、無意識に周りの人
間に同じ行動をさせる事も出来たようだが、今の時代では遠い話で

ある。

武装は個人それぞれだが、武装コテコテの人間は大抵、治安維持委員会の人間である可能性が高い。そして割と技術の発達したこの都市でも少なからず貧民がいる。

決して平等ではない故に、だからこそ、テロの起きる要因はどうあっても存在してしまうのだ。

ナツメは拳銃をホルスターに仕舞い、外套の中に手を入れて散弾銃の安全装置を外し、その下で構えながら辺りを伺い続ける。

追っ手を退けたつもりだが、無力化したわけではない。弾を当てたが、動けなくなるほどではないのだ。最も、追ってくる気配は無いので、ナツメは幾分かは気を抜いているのだが。

——最初の手榴弾もどきは、グレネードランチャー 擲弾発射筒というよりは、小銃でも擲弾を撃てるように改造した手榴弾である。グレネード スティック型グレネードと呼ばれ、銃身に負担が掛かる代わりに、特別な準備が要らないのだ。

つまり、銃をあまり大切にしない人間。いくらか資金は持ち合わせているという事になる。それでいて、周囲にまで被害を及ぼす大味な武器を使う辺り、戦いなれていないのか。

ナツメは考えて、首を振る。少なくともそんな考えが油断を生み、死の可能性を覗かせるからだ。

「だが、まあ……」ナツメはまた水を口に含み、革袋をバッグに仕舞ってから飲み込んだ。「しんどいわ」

恐らく先ほどの爆発のせいであつた。また電車が止まるのだらう。一、二時間はざらであらうと考えては、また漏れ出る溜息をそのままにしてナツメは裏路地を出てその区画の中央公園を目指した。

南地区よりも人通りの多い其処は、故に話し声も格段に大きく聞こえる。聞こうと思わなくとも耳に入ってくる会話の殆どは、ついさっきの爆発騒ぎのことであつた。

なんでもテロが起こつただの、なんでも能力者^{アクマ}同士の戦いがあつただの。隕石が落ちただの、電車がぶつかつただの。

だんだん頭が痛くなつてきたので、その足を速めていくと――
――丁度向こうからやつてきた、見知つた男が手を上げた。

「もつてつきり中央へ行つたかと思つたが」男――御影^{みかげけい}慶――は治安維持委員会、北地区^{ノウスシテイ}第五区画支部の局長である。

そんな彼が西地区^{こし}第一区画に居る理由は、ナツメの尻拭いが理由であつた。

ここより少し進むと、すぐにお金持ちの住宅街があり、その奥に貴族の屋敷がある。そこでナツメは少しばかりトラブルがあつて――財布を紛失し――物事を収拾したのだ。

屋敷を治める一人娘の貴族になりすまし、資産を丸ごと使いまわしていた女の犯行である。その一人娘は人買いに売られ、現在御影らが、犯人の裏と同時に捜査を進めているのだが、生存は期待薄だ。そうだ。

そしてそれを見逃したままだった、西地区第一区画支部局長である涼谷涼子は一ヶ月間の謹慎処分。彼女と貴族の一人娘が親しい関係だったことはあまり知られていない。

「行きたいんですがね」ナツメはため息を付きながら手短に話した。

テロ行為の事。的確に治安維持委員会局員を狙ったこと。もしかすると、先述の事件で得た資金がそこに回っているのではないかと
言う事。

「……そりゃあもう、北五区支部の力じゃどうにも出来ん。手が足り無すぎる」

彼の泣き言は確かにどうしようもないから出た。

貴族はその昔から政府と共に並んで歩んできた。故に貴族に逆らった時点で政府に逆らったも同然となる。

そもそも本来ならば本局が人員を割いて捜査に当たる。

だが今回、それが不可能故に仕方なく彼が出てきたのだが、

「今回のことで他支部も混乱してる」

彼も彼で酷く忙しいらしく、額に浮かぶ汗を手で拭い、そのまま髪を掻き上げて息を吐いた。

「目的がブレんなよ」

白髪混じりの髪に苦勞が見える。ナツメはそれに申し訳ないと思
いながら、

「だからって、これを放置したらまた被害が……」

「対策も予測もできない。中央区がぶっ飛んでタダでさえ貧弱なネットもバカになった。全員が出るわけには行かないから二人だけを留守番に置いている——この状況で、そんなデカイ事をまた押しつけるのか。勘弁してくれ」

「他の支部は」

ナツメが聞くと、彼はダメだと頭を振った。

「ここいらは皆、留守番を置いて中央に向かってるらしい。支部つてのは、本局がダメんなっても動けるようにって建てられたって話なんだがな……」

「もしこの一連の事件が——ここまでを見越したものだとしたら、敵は組織でしょうか」

「だろうな。だが、流石に誰も、治安維持委員会がここまで『ダメ』だったとは思ひも寄らなかつたろう。良くも悪くもな……。最も、ダメだと気づいてるのは身内と、敵組織くらいだな」

言いながら彼は止めていた歩みを進める。そう激しくは無い雑踏の中に、彼はあつという間に紛れ込んで姿を消していった。

もし——彼が考えていることがその通りならば、捜査している彼等は最も事件の真相に近い位置にいることになるのだろうか。

いや、正確には誰よりも事件に触れられる位置というだけである。

捜査も犯人の裏さえ取れない有様であった。

ナツメは消えた御影に一つ息を吐いてから、外套の帽子を被って、
彼も雑踏中へと紛れて目的^{その}地を目指していった。

——^{ウェストシティ}西地区第四区画。——時一八分現在——

^{セントラルシティ}中央地区へ行くには幾つかの手段がある。それは主に電車が、自動車か自動二輪車か、徒歩である。

電車という手段が断たれた涼谷は勿論何の迷いもなく徒歩を選び
——そして迷っていた。

見慣れたお金持ちが住む住宅街を抜けて、自身の持ち場を通り過ぎて来たのだが……。

「おつかしいな」

駅前の大きな看板に貼られてある周辺地図で自身の場所と、中央区へと繋がる道を確認し、それを持参した地図にメモをして——
——看板の裏、日陰となっているそこで——先ず休憩を取った。

先ほどの——プラットホームでの戦闘は酷く大変だった。

そもそも敵の数が少なかったお陰で相手にするのは一人で済んだのだが、殺すわけにもいかなないので大剣^{ぶき}が使えず、辺りに被害を出せないので能力^{ちから}も出せず。

仕方なく素手で殴り飛ばして、ソレが落とした銃で脅し、好意的に話を聞こうとしたのだが、袖の中に隠していた掌サイズの銃——
”デリンジャー”——で即座に自身の頭を撃ちぬき自殺された。

そしてナツメが去った後を見るとまた、襲撃犯は皆姿を消している——涼谷はとりあえずの非難を促してからその場を去ったのだ。

何故あの時敵である涼谷ではなく自分を撃ち抜いたのか。あの夕イミングならば避けることも出来ずに頭を弾丸で叩き割ることも出来たはずである。

死も恐れぬという事だから人を殺せないというわけでも無いだろうが——相手を殺すくらいなら自分が死ぬというほどの正義漢だったのかも知れないと思えてきて、彼女は大きな溜息をついた。

「まあ、どうでもいいか」

考えても仕方が無い。ただ弾け飛んだ頭部には酷く気分を害したが、それだけである。

ウエストポーチから真鍮製の丸いような水筒を取り出し、それで水分を補給してから大きく息を吐いた。

口から垂れる水は喉を伝って胸をぬらす。大きくはだけの制服の下に着るシャツは濡れて——ナツメが居たら小うるさく注意されるだろうなど、思い浮かべては微笑んで、彼女は足を進めた。

街並みは静か。無駄に建物は無く、大人しい風景の大通りには、慰め程度に木々が聳えていた。

背中に固定する大剣は歩くたびに、大剣用ホルスターの金具部分とぶつかって金属音を掻き鳴らす。だがそう気にはならないので彼女はそのまま進むのだが——不意に気がついた。

街があまりにも静か過ぎることに。

自分以外、周囲には誰も居らず、気配すら無いことに。

そして前から、一人の男が迫ってきていることに。

手には悪意の塊である銃器。特徴的なドラムマガジンを装着するソレはトンブソン・サブマシンガン。頑丈で重く、それ故に『^{フル}撃ち放し』を簡単にした短機関銃である。^{オート}
^{サブマシンガン}

敵意丸出し。恐らく呑気な彼女とは違う街の住民は、いち早くソレを嗅ぎ付けて避難したのだろう。

昨日、というには時間が経っているが、近くで貴族関連の事件が起こったばかりだというので皆敏感なのだ。涼谷はいい事だと頷きながら——軽々と、背中から大剣を抜いた。

黒いタキシードにシルクハットを身に着ける紳士風。この砂漠の街には似つかない姿の彼は、大昔のマフィア映画でも意識しているような格好で、

「お前は、治安維持委員会の人間……だよな」

男との距離は既に十メートルを切っていた。そこで両者は止まるが——その間合いは短機関銃にとって最も戦い易いモノであり、

大剣といっても高々一四〇センチ程度の刃渡りだ。

これで向こうが対等な戦いを、との口弁を垂れたとしても、それは誰が聞いても戯れにしか聞こえないだろう。

だがソレを補う特異の力がある。必ずしも絶対が為しえない、誰かが割り振って与えたようなバランスを保つ特殊能力の数々。

圧倒的な火力は、だがしかし圧倒的な氷雪や水量には勝てない。だがソレも凄まじい電量の前には無力であり、地面はそれを無効化する。

「だったら、どうする？」

シルクハットに隠れた顔。陰になる口元は二ツと口角を上げて、高らかに叫んだ。

「粛清だッ！」

男の身体が僅かに反れて、代わりとばかりに銃口は涼谷に少しばかり近づくように突き出されて、そこから火花が散ったかと思うと同時に轟音が掻き立って——涼谷は横に飛んで避けると、連なり弾き出される弾幕の槍は、彼女の後を追う。

足元で銃弾が弾ける。それでも彼女は飽くまで冷静に、器用な小走りでソレを避け続けると、それは直ぐに収まった。

「下手糞」

涼谷は馬鹿にするように笑むが、男は然して気にした様子は無く

——銃口を彼女に向けたまま、ポケットからリングのような形をした手榴弾を取り出した。

「俺は動くのはキライなんだ」

頭から胴へと伸びる安全レバーを握りながら口で栓を引き抜き——男は彼女へと全力投球するのだが、

「同感だ」

同時に涼谷は大剣を振り上げて駆け出していて、二秒と経たずに迫るソレへと到達したのだが、また同時に、男は慌ててM六七破片手榴弾——通称アップル・グレネード——に向けて弾丸を撃ちつばなしに、ソレへ当てて誘爆させようとするのだが、

「ッ！」

近距離での撃ちっ放しですら当てられないのに、遠くへと離れて行く小さなソレに当てられるはずも無く——大剣は無事、手榴^{アッ}弾を打ち返す。

二秒と少しで打ち返されたソレは、帰る頃にはソレより早く持ち主へと到達し——それから間も無くして、男の下腹部近くでソレは爆発音を撒き散らしながら、同時に破片を辺りへと吹き飛ばしていた。

爆発。巻き起こる炎。立ち上がる煙。その中で、何処へ向けられているのかも分からぬ銃口は、絶えぬ轟音をあたりに響かせている。

飛んできた破片を僅かに受けて、掠り傷を作る涼谷はソレを眺め

ながら——あの阿呆は一体なんだったのだろうと、考える。

だが考えても仕方が無い。現在は思考することは然程重要ではないのだ。

だから彼女は、大剣を背負いなおし、その掌に『バーンエッジ焰術』の焰を滾らせて近寄った。

手榴弾被弾の炎は鎮火済みで、弾切れなのか嫌気が差したのか、短機関銃は弾丸を吐き出すことをやめていた。

うつ伏せに倒れる男の出血は酷いもので——涼谷は男を蹴飛ばして仰向けにし、そうして胸倉を掴んで激しく頭を揺さぶった。

ガクンガクンと前後する頭はやがて呻き声を鳴らして、それから目覚めるなり、彼女の顔を見て驚く。小さな悲鳴を上げて——
頬を殴られ、また悲鳴。

「お前等は何者だ」

澄んだ、否、冷え切った瞳で男を射抜く。弾丸を要せず簡単に男の心を貫いた涼谷は、それから——男の拷問を開始した。

1 — 拍動 —

ノウステンティ
—— 北地区第四区画。一四時三十八分現在 ——

本来一般人は電車でしか中央地区^{セントラル}へは入れない。日本でもより科学に進歩したそこは、あきらかな区別を行って中へ入れる民を選別するのだ。

故に徒歩で入れる通路も、教えられるのは治安維持委員会の関係者のみで—— ナツメは休まず走り続け、そこへ目指していたのだが……。

—— 派手な発砲音が彼の耳に届いて、人通りの少ないそこで彼は足を止めた。背後からの一撃。怪我は無く、また弾丸が素通りしたという感覚も無かったので恐らく空へ向けた銃撃だったのだらう。

ナツメは空気を貪るように吸い込んで、激しく肩を上下させる。流れ出る汗を拭う一方で、もう片方の手は素早く握った散弾銃^{ショットガン}の安全装置を弾いて解除しながら振り返った。

丁寧に、だが素早く背後を睨みつける。

その中で目に飛び込む光景は、突然の発砲に近隣の街人は驚いて逃げ惑い—— やがて直ぐに静かになる街であった。

広い通り。並ぶ商店。そこには人っ子一人残らずに、互いに睨み、視線を交差させる二人。

「怨みは無いが——狩らせて貰う」

先に男が口を開く。

黄土色の外套が翻り、雑に掻き上げられた頭が動作に応じて揺れだ。——同時にナツメは、構えた散弾銃を男の腹目掛けて撃ち込んだ。

乾いた発砲音の応酬に、ナツメは強い衝撃を身体に受けて僅かに押される。散弾銃を支えた右手は酷く痺れてしまう。

一瞬にして男へと肉薄する散弾は、まるで動かぬその目標を綺麗に撃沈させてくれると思いきや、その散弾は突然、目に見えぬ壁に弾かれたように辺りへ弾けて——弾の一つが、凄まじい速度でナツメの頬を掠って過ぎた。

左手に抜いた回転式拳銃はそのままに、ナツメは驚いたように眼を見開いて息を呑んだ。

そうしてから直ぐに我に帰ると、撃鉄を起こしながら男へ拳銃を向け、言葉を吐き捨てる。

「能力者か」

あの速度の弾を跳ね返したのだから、恐らく腕はそれなりに立つのだろう。種類は念能力か反射か、磁力操作……考えても埒が明かないが、モノを跳ね返す能力だ。

外套を脱ぎ捨て、それからその暑苦しいスーツを着る男はネクタ

イを緩めながら首を振った。

「だからどうした」

ナツメは油断無く拳銃を男に向ける。先ほどの能力展開でそれが無意味だと言う事がすぐさまに理解できたのだが、彼の威圧は変わることなく男を睨み続けた。

「貴様の組織のやっていることはテロ行為だ。反逆罪、内乱罪、国家転覆未遂——つまり政府に逆らったという事だ。それを、そんな奴等を抑え排除するのが治安維持委員会。つまり……俺だ」

「そうやって、なんでも力で抑えりゃ良いと思いやがって……ッ！」

男は弾き出された弾丸のように飛び出した。自身の能力で『地面を弾いて』凄まじい速度で迫るソレに、ナツメは一瞬にして制御装置を解放し、力強い脚力で飛び上がる。

ナツメが蹴飛ばした地面はヒビが入って——次の瞬間には、彼が居た所を男は通過する。身体を半回転して男を目で追うナツメは、何故だか自身の足元より少しばかり進んだ場所で既に停止していた男に、そんな何故を持たずに発砲する。

銃口で火花がハジけて、腕が衝撃に押されて僅かに上がる。銃弾は刹那的に背を向ける男へ寄るのだが、それはまた不可視の壁に弾かれた。

「気に喰わねエんだよ、テメエッ！」

男は振り返りながら叫ぶ。そうして反射した弾丸は、また操られ

ているようにナツメへと迫って——刹那に集中した神経は、跳ね上がった動体視力は、冷静にまた銃口から弾丸を撃ち出した。

一瞬。また腕が押されて、体が宙で後退する。

弾は真っ直ぐ狙った弾へと迫って、衝突した。甲高い音が鼓膜を突き破るように弾けて、ぶつかり合った弾はそのまま軌道と速度を変えて落ちて行く。

完全なる精密射撃。高速で肉薄する中で捉えられるのは米粒の大きさ。空中という支えの無い場所で、その弾丸を同じ弾丸で撃ち落す事はおよそ人間業では無く。

良くも悪くも恐れられる——ソレが彼ら、能力者^{アクマ}と呼ばれる者たちである。

——同時に、街を一望する高さから落下する。奇妙な浮遊感。腹の臓腑が浮かび上がるような感覚を全身で感じるナツメは、同時に、下方から男に肉薄されていた。

驚くべき速度に、素直に驚く余裕が無い。恐れるべき機動力に、彼は恐れる要因を手探りで探すことも出来ずに、ただ真っ直ぐに、ただひたすらに迷うことなく——また足元^{たま}に、弾丸を叩き込んだ。

頭の上でまた同じ事をやるナツメを冷視し、懲りない奴だとせせら笑う男は、顔面に鋭く迫る弾に対してまた壁を作り、慣れた様に弾いて——。

するとその瞬間、不意に、容量の大きい物体を弾いた感覚が襲い

こんだ。気がつく、反射の範囲内——展開した不可視の壁——に入っていた——あるいは触れていた——ナツメの足は弾丸諸共弾かれて——空へと向かう男は、弾丸と共に地面へと弾き叩きつけられようとするナツメとすれ違った。

短い舌打ちの直後、それが激しく地面を叩き鳴らす音が耳へと届く。

——ナツメの思惑は見事に成功し——、彼は背中に強い衝撃を受けながら受身を取って、流れるように這い蹲^{つくば}って立ち上がる。

まるで大男に殴り飛ばされたような強さに酷く身体が痛む。骨が軋む。立ち上がろうと力を込めるだけでも激痛が走る。それでも彼は軽くむせながら、『弾く』要素の無い空中から、先に比べると異様なほど緩慢に降りてくる男を、拳銃に弾を装填しながら待っていた。

男は弾を弾かなければ逆に頭を弾かれていた。だからこそ彼は反射しなければならず、散弾とマグナム弾を弾いた二回で見切った射程に入り込む時、既にナツメの足も其処に入っている、その場を免れることは出来た。

状況は奇跡的であつたが、そうした状況に落ち込んだ事は結局意図的であつた。そう考えていると、男は軽々と空から落ちてきて——地面を弾き、衝撃を和らげて大地を踏みしめた後、彼は苛ついたように歯を食いしばってナツメを睨んだ。

「冷静^{クール}ぶりやがって、テメエはそうやって、貧民^{みんな}を見殺しにしたのかよッ！」

胸元から外したネクタイを地面に叩き落して、男は拳銃を構えた。銀光りする自動拳銃^{デザートイーグル}。銃は撃たれたことの無い人間こそ脅すのには不向きであるが、それを十分なほど味わった人間には十分なほど通用する。

彼が持つソレは、ソレが十分なほどに通用『しすぎる』代物であった。

ナツメも同じように銃口を向けて睨み返すが、状況は圧倒的に不利なのは明らか。彼が弾を受け付けない時点で、ナツメは一方的に銃口を突きつけられているだけなのだ。

「我々に抗うものは弾く。選り分ける。区別する。それだけの話だ」

だがナツメは、態度を崩さず諦めること無く、意志を貫く。

額から滝のように流れ出る汗は絶えることなく、ナツメの体内の水分を必死に排出させていた。同時に、外套の帽子が外れている今は凄まじい太陽光線に襲われていて——疲弊の極地にある彼はそれでも揺らぐず、必死に地面を踏んでいた。

「……、ああ、弱かったのはどうしようもねエ。抗わなかった奴もソイツの責任だと今までムリヤリ理解してきた俺だが——」『抗うものは弾く』だアツ!? テメエ、射程外のモンまでハジいてまで仕事外手当で欲しいのかよオツ!」

一体——誰と戦っているんだ。無抵抗なモノまで駆逐する?
一体、何の、誰の話をしているんだ。

疲れているから脳の巡りが悪いのか、本当に身の覚えの無い話な

のかすらも区別が出来ぬナツメは、また叫び声と共に迫る男へと弾丸を撃ち込んでから——大きく左腕を振り上げた。

男は彼の弾をギリギリまで引き寄せてから弾く事に慣れ始めていた。トランポリンが押される力に最も伸びる部分まで延びきるようにしてから、跳ね返すのだ。

その行動は僅かに迫る勢いを落とす。時間にしてコンマ秒よりも遙かに少ないが——それを計算に含めたナツメの動作は、見事に男の顔面に食い込む位置へとはじき出されていた。

その直後に弾は反射され——ナツメの腹を直撃する。同時に男はナツメの拳を知覚して、倣うように自身も拳を出して見せて。

全ての考えはその通りに動き——拳は激しく接触する………ことは無かった。

見えない力。磁石の同じ極同士を近づけるように拳同士は共に、理解しかねる程の力で弾き返すのだが——ナツメの強化された全身は、力強くそれに喰らい付いていた。

「ツザケやがつてッ！」予測し得ない力強さに、無意識に舌打ちが漏れた。

だが——果たして、膠着状態は持続することはない。

ナツメの全身が激しく揺れ始めた。体力が、筋力が保たないのだ。故に少しでも気を散らすと抜けそうになる力に、強く集中して、

「黙れ、負け犬が」

苦しく放つ発言の後——不意に膨張した名も知らぬ男の力は、呆気なくナツメを背後へと弾き飛ばした。

知覚する余裕の無い力。まるで突然鉄砲水に飲み込まれるようであった。

身体は妙な浮遊感を覚える間も無く轟流に吞まれて——彼の身体は勢い良く地面を激しく削り、通りの奥まで滑っては、やがて停止する。

激しい砂煙が立ち上がる。予期せぬ力に跳ね返されたという事実が余りにも複雑な事象に思えて、ナツメは立ちこめる砂塵の中で軽く笑う。

思考すらも消えそうになるナツメはそれでもまだ立ち上がるうとして地面に手を突き立てるが、体重をかけた瞬間に関節は崩れて、地面に倒れてしまった。

——数百メートルに及ぶ地面の削り跡。終点地に向かうにつれてその幅は狭くなって、

「はんつ、あんだけ吼えてこの程度かよ。負け犬さん！」

砂煙がそよ風に消えた頃、彼はそうしてまたナツメの前に現われた。

その跡をゆつくりと沿ってナツメへと到達した男は、倒れるも未だしぶとく意識の残るナツメの頭に銃口を突きつけ吐き捨てる。

「テメエがどんだけ下ツ端で事情を知っても知らねエがな。最期の最後で諦めた自分を怨みな」

男はそう言ってから——思わず浮かび上がる苦くも辛い思い出に、齒を食いしばって、

「……ナニした自分を、怨めって……？」

不意に顎に、鈍い冷たさを感じた。僅かに気が緩んで——動くはずが無いと判断したナツメの行動を許してしまったのだ。

背筋が凍りつく。こんな零距离で撃たれては跳ね返すことも出来ないが——どちらにせよナツメは重傷だ。避けて撃つ事も出来る。そう考えた矢先に、

「貴様がどれだけ雑魚したつぱでどの程度の命令で動いているかも分からんがな。最期の最後で緩んだ貴様じぶんを怨め」

ナツメの左手は力強く、また素早く握る銃口を額からずらし、一瞬にして圧倒的優位に立ちなおした、が——予測すべくしてやってきた斥力は、凄まじい力でナツメの拳銃を腕ごと地面に叩きつけ、

「舐めんなアツ！」

絶対的に押しぬける事の出来ない地面を押し、逆に浮かび上がった男は発砲しながら空へと向かう。

弾丸の進行方向へ加わる押す力は、弾丸に付加し、その速度を急速に上げたのだが——既に目標はその場から離れていた。

男は地面と水平に空へと弾けた。故に彼は、地面に立ち直るまで地面以外は反射できず——ナツメはソレを理解し、その場からの脱出に全力を尽くして、その近場に転がったのだ。

「認めたくはないが……、強いぞ、奴は」

誰に言うでもなく、一人呟いた。商店の壁を支えにして上半身を起こし、それから立ち上がって寄り掛かるナツメはそうしてまた撃鉄を起こした。

最早疲労が云々の話ではない。吹き飛ばされた際に、全身を地面に叩き付けたせいでもともに動けないのだ。先ほど地面に叩きつけられた痛みなど比ではない。

事実、そうして立っているだけでも全力を尽くしている。ナツメは威勢を見せるだけで精一杯であった。

だから——男が余裕ぶって、目の前に降りてきた時などは絶望すらも垣間見たのだが、

「お前、名前は？」

そんな、突然友好関係でも結びたくなっただのか、それとも単に自分が殺す相手の名前くらいは知っておきたかったのか。

動機などは全く以って察せ得ないのだが、ナツメはそんな台詞にまた虚をつかれて、

「夏目だ」

素直に教えると、彼は腰のホルスターに拳銃を仕舞いながら――
――地面を弾いて高く飛びあがった。

「ナツメか、分かった、覚えた。次はお前が覚えろよ――俺の名前を、このアキラという名を！」

そうして彼――アキラと名乗ったスーツ姿の男は建物の屋根に飛び乗って、そうして瞬く間に姿を消していった。

一体何が目的だったのか。果たして見逃されたのか。そうだとしたら何故――考えていると気が抜けたのか、一瞬にして訪れた脅威と安堵は身体を多い尽くし、そのまま崩れて地面に倒れ、激しい痛みが全身を襲うのにも関わらず、その瞼は呑気に重さに耐え切れずに視界を暗く塞いでいく。

そうしてナツメは、瞳を閉じると次いで意識も失った――。

――中央地区第六『セントラル緊急連絡通路』。一五時〇〇分現在――
ホットライン

男から情報を得て、それから辺りに居た男色家二人に売ってその場をさった涼谷は、配布された地図に書かれている通りの場所へと向かい、見つける。

とある商店――政府の傘下に置かれる名も無き雑貨屋――の地下に存在する威圧的な鉄の門扉。知らされている暗号と治安維持委員会局員の証明書を店主に渡してたどり着いたソコ。

開けると、常に電灯が点灯している広く長い、溜まる埃が無い綺麗な廊下。冷えた空気は扉を開けると共に身体に触れて——店主の氣遣いか、水と食料を貰い受けた彼女はソコを進んだ。

軽く立つ足音すらも大袈裟に反響する。氣がどうにかなってしま
いそうなほど底の、もとい奥の知れぬそこは何もなかった。

打ちっ放しの人造石コンクリートで四方を覆う通路。地上でどれほどの爆発が
起こっても崩れそうに無いそこは、地下深くにあることもさながら、
人造石の堅牢さが信賴の元である。

「あー、あーあーあ……」

無意味に声を上げる。意味不明すぎる呟きは、彼女の思惑通りに
透き通るように響き渡って、

「おー、コレなら気持ちよく歌える」

これから始まる何もなさ過ぎる故に苦痛なそこは、彼女が歌う歌
によって色づけられていった。

——セントラル中央地区第三区画『治安維持委員会本部』。一五時。五分現在

適度に緑の生い茂る広い通り。人は何事も無かったように道を行
き、砂まみれの街とはまるで時代の違うソコを住処とする。

車が走り、自動二輪車が走り。大きな高層ビルが何軒も立ち並び、

液晶モニターで様々なニュースを映し出す。

街の人間それぞれが携帯端末式電話を持ち、友人や親、自身の勤め先などと連絡を取り合いながら歩いて行く。日差しなど関係ないように露にする肌は、熱を逃がすジェル状の薬用液を塗ることで火ぶくれを防いでいた。

「まだ分からないのですか？」

大きな瞳は凜と男を睨んだ。目に掛かる髪を掻き揚げながら、彼女は背にする全面ガラスの壁の向こう、平和の二文字が支配する街の景色へと目を移した。

少し遠くを見れば——巨大なクレーター。あそこだけが科学技術で蘇った街の黒い点であり、現在、能力者同士はソコに引かれるのか、多く集まりつつあった。

「はい、全力を尽くしているのが……」

恰幅の良い男はスーツのボタンが弾けそうになる腹を折って頭を下げた。現在、彼は大きくクレーターを作った主を探している。先ほど西地区サウスシティの駅でテロ行為があったらしく委員を向かわせたのだが、犯人らしきものは既に死に絶えていた。

そこに委員が居合わせていたという情報も入った。行方は不明だが——味方ならばこちらへ向かってきているだろう。

「第三課は全員集まりましたか？」

若々しく成熟した身体をスーツに包み、しなやかな指でガラスを

なぞる彼女は問う。

すると男は困ったように、

「爆発に巻き込まれた瞬間移動能力者『筒井』^{つつい}と、外の開発地区へ助っ人に出した……、確か、制御操作を使う少年が戻っていません」

前者の彼は委員会でも名の知れた実力者であるが、後者——ナツメ——の実力は中程。決して弱くは無いが、強くも無い。特徴といえば珍しく『使えない』能力を持つことくらいであった。

だから委員長である彼女も、筒井の生存も期待薄かと感想を漏らすだけであり、

「なら、早く第一課に外への通信を復興させるように伝えて置いてください」^{ライン}

第二課は情報を主に扱い、第一課は科学技術の研究を主とする。第一課の課長である男に彼女はそう告げると、

「分かりました華月委員長。^{はなつき}……失礼します」

彼は深く頭を下げて、その場を去っていった。華月と呼ばれた彼女はそれから広い役員机に備え付けられている牛革製の高価な椅子に腰を落として、深く溜息をついた。

——昔、天使の轟雷が世界を砂へと変えたと言う。だがそれでも繋がったままであった海底のトンネルや通信線によって世界は加速度的に復興する。

海外も自国の事が忙しく、他国に攻め込む余裕が無い。だから現在には、情報提供という形で関係を執りとめていたのだが——日
本も同様に、海外ばかりにかまけている余裕は無かった。

治安が無いに等しい。秩序が崩壊の極みにあった。

自分勝手にする生き残りの殆どは——我侭の権化である特殊能力を備え付けていた。

だから徐々に絶対的な政府を見せ付けて、現在に到るのだが……。

「何故、今更……」

その現在に起こったテロ行為に彼女は頭を抱えていた。中央地区の人間には実験の失敗だと言って混乱を収拾した。この組織の長たる総理大臣に連絡を取るも、捜査を続けるという現状維持を言い渡されているのみ。

確かにそれ以外、やることが無い。日本政府は更なる科学技術を発展させ、最初は東京を、続いて関東を。それから日本全域に高等科学を広めて豊かにしていく。その前に立ちふさがる悪たる障害を、物理的に除外するのが彼女等の仕事であるために。

この組織にある技術研究課などはその手助けにもならぬ緩慢さであるが、そもそも研究内容が国とは違うのだが、それはまた別の話である。

机の上に鎮座するパソコンを起動させると、空中に画面が展開する。彼女はそれに触れても感覚が無いソレを指で操作して——第
三課の能力者を確認した。

数十人という数。弱いと言われても少なからずエリートの印を押された彼等は、選びぬかれた人材である。

本来——能力者たる素質を滾らせるものは、生まれたその時からその可能性を感じさせる。故に、そのような者は選ばれて、東京郊外有能力開発学園へと送られる。

政府に勤める大体の人間はそこを出身としているが、極稀に異端児も居る。

「夏目鳴爪……。性別は男で、性格は温厚。能力は制御操作。リミッターコントロール自身
の身体能力を自在に操り、また応用技術により触れた物体の本質を
操作することが出来る……。？」

つまりは剣ならば剣をより鋭く、バネならばバネの『跳ね具合』
を強化することが出来るのだが、彼女はその物体が剣としてなのか、
鉄としてなのかイマイチ理解できずに居た。

華月は、続けて脳に刻み込むように呟き続ける。

「……ッ？ 北の……開発地区出身？ 肉親は不明、友好関係は……
不明」

北の開発地区とは、東京に次ぐ第二都市と為り得る場所である。
然程広く無いが故に治安は良く、能力者の数も極端に少ない。

水も自給自足でき、何よりも海に面しているために東京とは異なる
発展を遂げていた。

だからこそ、何故わざわざこんな過酷な場所へと来たのか理解できなかった。学園を介さずとも能力を発現させる者は居るし、大抵そのような人間は自分の力を試したくなる。

だがその場合は大体が人を脅したりして——人間と同様に進化を遂げた生き物が生息する、未知が多い砂漠を、命を掛けて超えるものなど居ないのだ。

月に一度だけ走る砂船も、ソコまでは行かずに身近な開発村までであったが——そこに行っただけでも砂蟲サンドウォームに襲われる始末なのだ。

他と比べて短すぎるプロフィール全てに目を通し、妙な少年だが、やはり特別に目を張るような事は無いと息を吐いて、それから適当に考える。

妙だ。そう——妙なのだ。ランクはCと表示してあった。AからEまである能力者の実力振り分けのランクであるが、治安維持委員会は選ぶ能力者の実力は最低ラインをCとしている。

故に彼は決して強くないのだが……。

華月はナツメの、気張った様な真面目顔を見て、何かを感じていた。

こんな時は必ず何かがある。良くも悪くも、彼女のそんな勘は確実に当たるのだ。クレーターを作る爆発があったときも、数日前から妙な、胸に何かが詰まる感覚がしていたし——委員長に選ばれたときも、妙な胸の高鳴りが続いていた。

だから——もしかすると、裏が深いか浅いかも分からぬ今回の事件をどうこうしてくれる重要人物かもしれないと期待する一方で、もしかすると潜入スパイかもしれないと、疑ってしまう。

恋心よりも複雑な思考は、彼女の頭を痛くさせて——気がつく、背にする外の景色からは、紅い夕日が差し込んできていた。

——サウスシティ
南地区第二区画。一八時二五分現在——

「馬鹿野郎共がッ！　まだ一週間は大人しく様子見てろって言ったじゃねーかつ！」

薄暗くなる中、全く何一つとして眩しいものが存在しないそこでサングラスをかける男は並ぶ男たちに怒鳴り散らしていた。

砂塗れになるスーツの男。服がボロボロで武器を失い、尻を痛そうに押さえている男。血まみれで泣きじゃくっている男。

様々な状況に男は思いを怒り一色にして、それからまともに会話が出来そうな、まだ大人の仲間入りをしたばかりであるような風貌の男に視線を向ける。

「おいアキラ。なんで委員会に直接手を出しやがった」

「仲間がやられてるかもしれねーのに、一人知らねえような顔して歩いてるのがムカついたんだよ」

「お前は、んなチンピラみたいな事をするためにここに居るわけじ

やないだろうが……。まあ、分かてるだろうがいいが——兎に角、相手をした敵の情報を教えてくれ」

叱り始めてみて、怒りではなく相手を考えて叱る事がとても難しい事が分かった男は、サングラスのズレを直しながらアキラに聞いた。

他は自然的に、解散という空気を察したのか闇の中へと姿を消して行き——アキラはそれを確認してから答える。

「身体の弱い貴族を病院に送って、貴族の代わりやって、何を勘違いしたのか委員会が突っ込んできた事があつただろ？」

彼が話すのは上守という、人買いに売られた貴族の話。彼にはまともな情報どころか、嘘しか教えられていないのだが——サングラスの男は頷いて聞いた。

「あん時の、西篠をやった男が居た。それが弱いくせに妙に手強かつたんだが——」

そして憶測で彼の能力を語り始める。決して諦めなかったことや、結局見逃したこと。

「取るに足らなかったから」

とだけ言い訳をして、サングラスの男は頷いた。それから酷く冷静に、

「そう言うタイプは叩かれて強くなる。次遇ったら迷わず殺せ。それから、明日の事だが——」

そうして夜は、更けて行く。

ノウステンティ
——北地区第四区画。——二二時三三分現在——

騒ぎが終えてから街に戻る頃は、既に夜も更け始めていた。

商店や民家には被害は無かったのだが、通りの凄まじい削り跡はその戦闘がどれほど激しかったものを物語っていて——同時に、その当事者を発見させた。

それから色々^{それ}と街人が当事者をどうするか短く話し合った結果——

「……はあ」

不運ここに極まれりと、服の代わりに包帯を纏うソレを眺めながら彼女は溜息をついた。

結局、第四区画の平民代表者の娘である彼女が彼を引き取ったのだが、一向に目を覚ます気配が無い。治療をしてからややあって、それは風も無いのに髪を掻き立たせては、また何事も無かったように静かになる。

やはり能力者で何かが発動したのだろうと思ひ、ソレが持っていた拳銃を構えながら男を見ていると、その瞼はピクリと動いて——

「……目は覚めたかしら」

——気がつくとその処は、見知らぬ場所であつた。

見知らぬ天井。直ぐ近くの窓からは月明かりが差し込み、身体を包むのは暖かな布団であり——同時に、記憶は蘇る。

アキラと名乗る、同年代らしき男に叩きのめされて……見逃されたこと。

委員会本部へは時間が経っている為に急がなくとも良いと考えてはいたが、テロ行為が続発した事態を見てはそう悠長に構えては居られない。

だから彼——ナツメは眼を見開いて身体を起こそうとすると、そんな声が掛かったのである。

ナツメは布団を剥いで起き上がると、隣には月明かりに髪を紫色に照らせる女性が、彼の自動拳銃を向けて立っていた。

「……迷惑を掛けた様だな」

気を失った場所が場所であるために、治療を施してくれた彼女も巻き込まれてしまうかもしれない。そう言う意味であれば、迷惑をかける様だな、とこれからの事も心配して声をかけるのが正解である。

「自分が一体何者なのかを正直に語った上で、通りの修繕費を出してもらえないかしら」

どうやら身元を示すものを探すために荷物を漁ったのだが、目的

のものは見つからなかったらしい。だからナツメは、言ってもどうせ信じてもらえないであろう事を、ベッドから立ちながら口にする。

「治安維持委員会、中央地区委員。所属は第三課で、能力者だ」

「……、本物を呼んで来いと受け取って良いのかしら」

「むしろその方が助かるが……」

乱雑に、と予想していたが存外にしっかりとハンガーで掛けられていた衣服を着て、そして素直に銃を差し出す彼女からソレを受け取り、ホルスターに突っ込んでから、

「殺されるとか、思わないのか？」

荒らされるところか綺麗に整えられていた荷物を背負い、外套を羽織りながら聞く。すると彼女は、後方にある扉へと視線を向けながら、

「物理的に、貴方には出来ないからね」

「そうだとも！」

突然、彼女の言葉に同意する男の叫びがあつて——向けた視線の先で空間が揺らいた。

何が起こっているのかと考える暇も無く何も無い空間から、透明に見せる衣を脱ぎ去ったように現れた男はズカズカと大腿でナツメへと歩み寄っていく。

そんな男にナツメは少なからず気圧されながら、彼女の言葉を聴いた。

「言い忘れたけど、お客さん」

特にそれ以上紹介されるわけではない男は、ポケットから財布を出し、そこから適当に札を抜き取ると振り向きもせず、彼女に押し付けるように手渡した。

「課長が呼んでる」

何でもないように、まるで外で待っている人間に呼んでくるよう言われて遣わされた様に言いながら、彼は柔軟な金属で覆われている戦闘用スーツの胸元を開ける。

彼のスーツは東京より北にある、発展した開発地区より蘇った新技術の試作品である。景色と同化するというより、姿を透明に見せる技術。ただし激しく電力を消費するので、未だ実戦段階には到達していない。バッテリー

そんな極秘兵器を彼が持っているのは、それが彼の仕事の一つだからである。

「わかった。すぐ行こう……。世話になったな」

ナツメは仏頂面でそれだけ告げると――男は馴れ馴れしく肩を組んで、

「すまんかったな、娘さん」

そんな台詞の直後——二人は一瞬にして、姿を消した。

まるで元より、その場に居なかったように感じるほど早く、自然に。

これが能力者かと、彼女は目の当たりにしたソレを反芻しながら、渡された札を握ったままその場を後にした。

セントラル
——中央地区第二地区。二二時五〇分——

天を衝くように聳えるビルは、治安維持委員会三課のものである。

暗き闇に明るく伸びる。街もネオンが妖しく光っていて——
久しぶりに来て見るとやはり別世界のようだと思感を漏らすナツメに、笑いながら肩を叩く瞬間移動能力者は共にビルの中へと入っていった。

それから共有シャワー室で汗を流し、着ていた服を洗って代わりに、適当なシャツとズボンを身に着けてナツメは男の後を付いて行く。

アキラに与えられた怪我は——彼女の治療がよほど効果があったのか、全て消え、完治していた。実は無意識下で命の危機を感じ、能力が自動で発動し自然治癒を強化した、打なんてことには一切気づいていない。

エレベーター
自動垂直移動型箱式人用昇降機に乗り込み、操作パネルを弄ると間もなく扉が閉まって、妙な加重が身体を襲う。足元が高速度で上

昇しているのをなんとなく感じていると、そう間もなく小さな衝撃と共にソレは止まった。

一階から二五階まで並ぶ階表示は、二三階をオレンジランプで点滅させて現在地を示していた。

「あ、そうそう」

出ると、真っ直ぐ伸びるだけの廊下。右手は全面ガラスで、暗闇にネオンの輝く綺麗な景色が広がっていた。

その中で、思い出したように男はポケットをまさぐって――
携帯端末型高性能無線機をナツメに手渡す。

今まで持ち歩いていたものとは少しばかり形状が異なるそれは、黒というシックな色に重さを魅せて、強化プラスチック製で頼りがいがあり、また手に収まる程度の大きさであった。

「GPSがずっと砂ん中指すからてつきり死んだかと思ってたんだが、まあ、生きてて良かった」

外国の技術と手を組んで宇宙空間に放り投げられたままだった衛星と接続し、GPSをある程度まで復活させることが出来ている。衛星はその昔に開発された完全なる永久機関で電力を自給自足する上に、AI活動によりある程度の故障も自動修復するので可能となったのだ。

それにより、現在の科学技術がより進展したといっても過言ではない。

渡された無線機にはそれ以外にも、液晶画面だけだったものが何も無い空中に大きな画面を映し出し手動タッチで操作できるようになり、委員会所属証明書をデータで保存していたりなど、より便利なモノとなっていた。

こんなものは図らずして高価となる。ナツメが東京に戻ってくる前の仕事、開拓村の手伝いで自分より強い能力者を倒した際の報酬の何倍もの品物である。

決して支給されないというものではないが、渡されるものは大抵―― A 級か、それ以上、または B 級で高く評価されている能力者、または委員ばかりである。

そんなおよそ手の届かないものを渡されたという事にナツメは素直に喜んで、また、然程評価されていない自分がコレを渡されると言う事は、今までが評価されて―― 今まで以上に過酷な仕事を課せられるのだろう。

考えると、酷く気が落ち込んだ。

「過剰評価って奴だ」

だからナツメは、そのこの時代では貴重な木製の両開きの扉の前に来て、男に無線機を返そうとするのだが、

「お前は自分を過小評価しすぎてるだけだ」

聞く耳も持たずに―― 男の手によって扉は大きく開かれた。

「禿高、夏目、共に戻りました！」
はたか

強い照明が天井から光を落とす。明るい中、全面ガラスが鏡のように彼等の全身を写すその中で、二人は真っ直ぐ役員机へ。そこに腰掛ける、一人の男の下へと歩み寄っていった。

妙に足音が響くように思われたが、それはナツメがあまりにも緊張し、無意識の内に耳を澄ましていたからで——ソレに気がつく、心の準備をする暇もなく彼等は課長と呼ばれる初老の男の前へとやってきていた。

「う」苦勞

渋い声が空間に広がる。歳より老けて見えるのは、頭の中ほどまで禿げ、そして残る髪さえも白く染まるからであろつ。

その割にはそう皺の無い顔で、彼は禿高からナツメへと視線を流し、続ける。

「私はお前に正当な評価をしているぞ」

聞いていたのか、話を掘り返すように課長は口を開いた。そんな台詞に肩をびくりと弾ませると、課長は楽しげに、

「だから非常に危険な外への仕事に向かわせている。お前が今まで倒してきた能力者のランクでも確認してみるか……？」

単なる捨て駒だとばかり……。素直に湧いてきた言葉だが、口に出すことは出来ずにナツメは飲み込んだ。

それに、わざわざランクなど確認せずともナツメは大体覚えてい

る。誰もが自分より優れた能力を、自分よりも訓練を重ねて強化し、自分よりも自在に扱っていたのだ。

その實力は、ABCなどで区別するにはあまりにも勿体無い力の数々であつたが——無論、ナツメがソレに対峙して生きていると言ふ事は、全てを打ち負かしているからである。

だからこそ、今回の事は例外過ぎて頭にくるところか、寧ろ冷静に、生かしたことを後悔させてやるとばかりに胸の奥で炎を滾らせているのだが。

「西篠にししのと言つたか。先週の貴族誘拐、資産横領事件の際に居た奴隷エレクトロニカは。奴の電撃はそれだけでB級モノだが、實力としてはA級だ。今は政府の医療機関で怪我が完治した後、拷問に掛けられる」

「こつ、『ザ・戦闘向き』って能力じゃないのに、良くやるなあ。筒井と言ひ、コイツと言ひ……ねえ課長？」

そんな禿高の台詞に短く息を吐いた課長は、次いで苦い顔で言葉を吐いた。

「お前も戦闘向きではないが、良くやっていると評価している」

「ですよねえ」

「それが無ければもつと良いのだが……」

痛い頭を抱えながら、課長は話を切り替える。同時に背筋を伸ばすので、ナツメも釣られて背中をピンと張って直立した。

彼は机の上で手を組みながら、じつとナツメの目を見て口を開く。

「開拓村から今までのことを、かいつまんで説明してくれ」

言われてナツメは頭の中を少しばかり整理してから、ソレに答えていった。

——サウスシティ南地区第二区画。二三時。分現在——

過激派の朝は早い。

外は未だ暗く例え日が跨いでいなくとも、彼等が目覚め、活動を開始すれば何時であろうともそこは朝になる。

彼、アキラもその中の一人であるが、彼は過激派の一味と言うわけではない。

いわゆる便利屋と呼ばれる、仕事に見合った金を貰えればなんでもすることを稼業としている人間である。

だが——その日の昼、ナツメとの戦闘を経て彼は心変わりを始めていたのだが、それは彼自身も気がついていない。

「……」

アキラは無言で腰のベルトに拳銃を突っ込んで、暗い室内を歩く。過激派が雑魚寝する其処を跨いで、そっと、起こさぬように外に出た。

玄関のドアは錆びた音を上げて、眩しい月明かりを部屋に取り入れた。アキラは外へと身体を滑り込ませて、また静かに扉を閉める。寂れたアパートの一室。治安の悪い南側は、それ故に彼等にとって最も動きやすい場所であった。

夜は極端に気温の下がる砂漠の海の中。例え街の中でもソレは変わらず、アキラは身震いしながら外付け通路の二階部分から飛び降りて——能力で手すりに強く反発し、その勢いで屋根の上へと昇り上がった。

「寒つみい」

高きに上るとより風は強くなり、身体の熱を狡猾に奪っていく。だがその代わりに、何処よりも近くに見える満月は、どんな高い場所で見ると手が届きそうな気がした。

アキラは身体を抱くその手を空へと伸ばし、そして月を掴むような素振りをする。天に突き上げる形となった拳は——無意識の内に自分が見てきた難民を思い浮かべた。

「馬鹿となんとかは高いところが好きってのは、どうやら本当らしいね」

「おいボカす所が違エぞ。俺は煙か」

アパートを見上げる一つの影。アキラはその声に反応しながらまた飛び降りて、地面に衝突する直前で大地に反発し、衝撃を和らげてからそこを踏みしめた。

腰まではあろうかという長い髪のをリボンで纏め、風になびかせる女性は悪戯っぽく微笑んだ。

まつげが長く、大きな瞳がより大きく見えるのが特徴的な彼女は大人っぽい体つきで、さらにソレを魅せる様に清楚なスーツ姿で立っていた。

「悪いけど、仕事を頼むわ」

言いながら、一枚の紙をアキラに手渡す。彼は風に飛ばされないように強く掴みながら、月明かりでソレを読み上げた。

「……救出任務で百万だあ？ 随分と羽振りがいいじゃねえか。どうしたんだ？」

「ちょっと大きな仕事だから……」

彼女は言いながら、背を向ける。付いて来いと語る背に、アキラは短く溜息をついて後を追った。

——セントラル中央地区第五区画。○一時五八分現在——

「早いけど長い！」

過激派が密かに見つけた地下通路は、通るといとも簡単に中央地区へとやってくる事が出来る。そこは電車のレールがあることから、地下鉄の跡なのだろうと考えられた。

地下なので音も気にすることが無く、自動二輪の騒音も気にならないので本来ならば考えられなくらいの速さで其処へと到着できたのだが……。

彼等が居るそこは、国立病院である。今日本にある病院の中で最大級とされ、政府が全てを統括している故に出入りすらも厳しい場所。

噂によると、刑務所や留置所よりも厳しいらしい。

「でも外を歩くよりは遥かにマシ……。それよりも、しっかりと頼むよ?」

顔写真の載る依頼伝票を片手に、彼は面倒そうに欠伸をかいだ。

そこに記されているのは第五病棟二〇八病室と、二一二病室にそれぞれ居る西篠という能力者と、呉氏崎という女。どちらも、この間の貴族誘拐、人身売買、資産横領事件の主犯格である。

最も、前に言ったようにアキラはただ純粹に、悪の権化たる貴族を懲らしめた、程度の認識し貸していないのだが……。

要は——こちら側の情報を吐かれる前に二人を回収して来いという仕事である。忍び込むには少数精鋭が基本。数が少なければ見つかる危険性もその分減って、そしてアキラは今待機している過激派の中で一等強い。

申し分ないというところであつた。

「ダメだつたら始末しろつて言われてもなあ……」

伝票の最後に記してある注意書きに目を通し、それを雑にポケットに突っ込みながら溜息をつく。

「俺は仕事を完璧に成し遂げる男だつつのによ」

言いながらアキラは——玄関の前に待機していた警備員二人に瞬間的に肉薄し、ほぼ同時にそれぞれの顔面に拳を叩き込む。

うめくことすらも忘れて倒れる警備兵を適当に放置してから、アキラは忍ぶ様に中へと侵入する。

——それを遠目に見る彼女は、早くも胸に不安が募っていた。

——中に入るとそこは異常なまでに静まり返っていた。

歩く度に床が軽い音を鳴らす。薄暗い其処は壁の足元に点けられる非常灯と、オレンジ色の鈍い光だけが唯一の可視光線である。

こんな時ばかりは——超感覚や絶対知覚などの、周囲を感覚だけで把握できる能力がうらやましいなと素直に思いながら、アキラは出入り口付近の壁に貼ってある院内全体図を眺めた。

しかしやはり、それだけだと分からない。当たり前のことも試してみてもからでないと納得できない彼は、そうしてからポケットに突っ込まれた懐中電灯でソレを照らす。

だがやはり——図面だとイマイチ理解し難い。だから彼は、階段の場所を覚えてから先を進んだ。

行き当たりばったりがいつもの彼にとって、逆に作戦などを立てる方が調子を狂わせるのだ。

アキラは何が起こっても、どのような障害が、壁が現われようと『突き破る』つもりである。

殊彼に限り、それは大いなる過信ではなく信頼すべき自信であるのだが――。

「誰だ！」

仕事内容によってはそれが足を引っ張ることもある。

広いロビーを曲がるとアキラの懐中電灯はすぐそこに居た警備員を照らして――。

「紳士だよ」

アキラは楽しそうに笑いながら、また、たったの一步で眼前へと迫ると同時に懐中電灯で男の顎を叩き上げる。

激しい打撃音に、歯を強く噛み合わせる音が響く。その後、警備員のうめき声が耳に届いたので、アキラはすかさず懐中電灯を持ち直し、その尻で天井を崇める頭を殴り落とした。

また衝撃が痛々しい炸裂音を鳴らして――大きくバランスを崩した後、それは体を鈍感に揺らしてから床に崩れた。

面倒だ……。アキラは酷く憂鬱そうに息を吐くと、警備員をその

ままにして、階段があるであろう場所へと駆け足で向かっていった。

順調に静か過ぎて不気味な廊下を進み、階段を上って二階部分へ。

先ほど警備員と出くわしたことなど既に忘れてしまったのか、それともお構いなしなのか。アキラは懐中電灯の光で辺りを照らしながら、また階段を上り続けて——五階へ。

だが恐らくそこはまだ『第五病棟』なる場所では無いだろう。入ったばかりであるし——恐らく其処は、特殊な場所のはずだ。

少なくとも能力者が居る。それを一般人でも簡単に抜け出せるような場所に置くはずが無く、またそもそも容疑者である。

だからその警備はこの——第一病棟の——ものよりも厳しいだろう。能力者を警備に当てていてもなんら可笑しくは無い。

だとしたら、面白くなる。

アキラはふと浮かぶ笑顔をそのままにして、存在するであろう渡り廊下を探した。

すると間も無く、廊下の曲がり角から人工的な光が床を照らすのを見る。アキラは面倒そうに小さく舌打ちをして、適当な病室の扉を開け、そこへ身体を滑り込ませて身を隠す。

「……、なあ今誰かの足音しなかった？」

遠くから響く声は小さく耳に届き、そんな男の疑問は相方と思わしき別の声が否定した。

「んな分けないだろ、ば、バツカだなあ！」

怯える声は廊下に反響する。アキラは軽く息を吐きながら、点け放しであった懐中電灯でついでに中を見ると——何事かと目を覚ました入院中患者がベッドから身を起こしてアキラを見ていた。

「……、……」

いつもの彼ならばそもそも隠れなどせずに、突っ切って目標へと迫る。だが今回ばかりはその目標を知られては困るのだ。

仕事を完遂するのが彼の仕事。その目標の命を尊重することは前提条件故に、それを人質に取られてしまえば名折れ覚悟で目標諸共殺すしかない。

だからこうして、瞬時に無力化できなければわざわざ身を隠しているのに——個人部屋の中にいるその男はそつと、眩しげに懐中電灯の光を受けながらナースコールへと手を伸ばしていた。

「待て、ああ、待てよ落ち着け。怪しいもんじゃない……つっても信じねーか」

それじゃ。彼はその場でそう呟いた直後——地面を弾き、瞬間にその男のベッドの上に飛び乗ると同時に腰から拳銃を抜き、その頭に銃口を突きつけた。

「第五病棟ってどこだ？」

「だ……、第、五……？」

アキラが聞くと、男は戸惑ったように、喉が張り付いたように途切れ途切れに言葉を紡ぎ、それから唾を飲み込み喉を鳴らしてから、台詞を続けた。

「お、おお、奥です。こ、こ、ここから、三に行つて……」

銃口が伝える冷たい殺気に魂を鷲掴みにされた男の言葉は、どうにも要領を得ない。アキラはソレを軽く押し付けながら、

「わかんねーよ、三つてどっち。右？ 左？」

「病棟ごとに、建物が分かれてて……、ご、五角形です、五角形……」

恐らく彼が言いたいことは、第一から第五までは離れていて、それが五角形を形作るように配置されているということだろう。離れているといっても渡り廊下で繋がっているのだが、夜間である現在は防犯シャッターで封鎖中である。

だが彼は、その事に一切感づかずにイラついたように返した。

「じゃあ屋上には、どうに行く？」

男は言われて、恐る恐る——アキラが入ってきたスライド式の扉を指差した。

そんな本気か冗談かも知れぬ行為に、アキラは思わず軽く笑ってから、

「まあいい。好きにしま」

男から拳銃を離し、また腰に戻すとアキラは素早くそこを後にする。残された男は呆然としながら――暫くして、何もなかったと自分に言い聞かせながら布団の中に潜り込んだ。

――廊下に飛び出したアキラは、背を向ける警備員とは逆方向に駆け出した。

屋上への階段が、一階から続く最上階であろう五階までの階段に無かったのは、ただ単純に存在しないか、自殺防止のために隠してあるかの二択。

これほど大きな病院で屋上が無い、または上がれないなどという事はないだろう。だから後者だ――アキラは考えながら廊下を駆け、曲がり角を蹴って直角に方向転換しまた走り出す。

すると直ぐに――ナースステーションへとたどり着いた。

アキラの存在を捉えた一人が驚いて悲鳴をあげ、それに驚く以下数名が連鎖的に絶叫を引き起こす。アキラは小さく舌打ちをしながら、また床を弾いて急加速し、すぐにその場から離れた。

それから走り回るのだが――如何してか、また元の階段へと戻ってきてしまう。

「ったく、どうなってんだ……？」

渡り廊下どころか、上り階段すらない。

ここへとやって来るために昇った階段は下りしか無く、上り階段があるべき場所は平らな荷物置き場になっているのだ。

無論、渡り廊下はシャッターが閉まっていてその存在にすら気づけないのだが、彼にはソレがわからない。

そして勿論のこと、アキラはその一周だけで随分とこの仕事自体が面倒になってきていたので——階段を降り、踊り場にある大きな窓を開けると、迷わずそこから身を投げた。

一瞬、奇妙な浮遊感に全身が包まれて、

「よっと」

見慣れぬ綺麗なネオンの輝く街並みを眼下に、アキラは壁に垂直に身体を密着させて、壁を真下に弾く。

すると足場のように現れた反射域は強くアキラを真上に浮かび上がらせて……。

それを幾度か繰り返すと、彼はやがて屋上の、フェンスの外側の縁へとたどり着いた。

「……つたく、吐き気がするぜ」

その台詞は高さを感じてではなく、何処を見渡しても明るい街の夜景を改めて見直しての感想であった。

外の——東西南北地区とは大きく違う、まるで別の世界、時代へと迷い込んでしまったような場所。そもそも電気なんて普及し

ていない場所すらあるし、明日の食料の不安を拭えずに眠る者も居る。だというのに、この場所は……。

アキラはまた、小さく舌打ちをしてから辺りを見渡しながら、縁を歩く。

眺めるそこは、入院患者が言ったように五角形を形作るように病棟は配置されていた。

見る限り、この第一病棟が星の頭というところだろう。だが――。

「わかんねえよ……」

残り四つだが、その内の一つをピンポイントで当てなければならぬのだ。しらみ潰しなどしている時間も余裕も無い。

だが――問題は然程、難しい様子は無かった。何故か、と言うと……。

「わかんねえ……わけも、ないなあ」

一つだけ渡り廊下の存在しない病棟があるのだ。まるでここは危ないので閉鎖的に活動しますと言っているように。

適当なのか大真面目なのか。難易度が高いのか低いのかよくわからない仕様に彼は軽く笑って――敷地の左手側奥にあるそこへと、屋上を乗り継いで向かっていった。

――数分を要して、彼は窓を蹴破り、第五病棟五階への侵入

を成功する。

そろそろ玄関の警備兵が目覚ます頃だろうとなんとなく思いながら、アキラはその廊下の奥から慎重に移動する。

懐中電灯で病室の番号プレートを照らし、ポケットの伝票と見比べて。

存外に警備員が少ないのは、夜と言う事もあるのだろうが――
――隔離病棟なのだから、もう少し警備を強化すればいいのではない
か。そう、考えていると……。

不意に銃声が対面から、前にしている廊下の奥から鳴り響いた。

「馬鹿が、泳がされていると気がつかなかったのか」

余裕綽々の、まるで待ち構えていたというように男の声は足音と共に迫り始める。だが、台詞から伺うに、おそらく『まるで』や『ように』などの推測系助動詞は要らぬほど確定的な行いなのだろう。

「貧民のお前は行っても分からんと思うが……この世には監視カメラという代物があるんだよ」

「ワケわかんねーっつの。っーか、病院ン中で発砲すんなよ。大事な患者に当たったらどうすんだ？」

仮にもこの病院に勤める人間だろう。アキラはそういうと、そいつは「お前が誰かの被害の心配か？」と憎しみでも込めるように吐いた後、

「いいんだよ。院内だから」

そう付け足して、オレンジ色の薄暗い灯り中、それは足音を忍ばせながらも悠々とした態度でアキラの前に現われた。

「タキシード？ 俺あどうやら、賊と紳士を間違えたみたいだな」

薄明かりの中では、男の漆黒色の戦闘スーツはよりその姿を認識しにくくしていたが、顔に装着しているゴーグルによってその位置は概ね把握することが出来る。

アキラは警戒する様に構え——そうすると同時にまた床を弾いて接近し、その顔面を殴り抜けるのだが……。

大きく振りぬいた拳は感触を肌に伝えぬまま、その顔を突き抜けて、やがて身体ごとアキラは男を通り過ぎて行った。

拳は——明らかに男を殴っていたはずだ。実際に彼は、その拳が男の顔に触れたのを見たのだが、

「お前はアホか？」

依然、男はその場に立ち尽くしたまま振り返り、アキラを小馬鹿にするような声色で台詞を紡ぐのみ。

地面を弾き返し、身体を急停止しながら——また素早く男に肉薄する。

だがそれも、先ほどと同じように男が居た——否、立っている場所をそのまま通過してしまう。男の姿は消えることが無いまま、その中を彼は通ったのだ。

「お前は――」

男は言いながら脇に下げられているホルスターから拳銃を抜き、その銃口をアキラに差し向ける。

そんなものなど――当たるはずが無い。先ほど、幻影だと確認したばかりなのだから。

理解が追いつかぬ頭でもそれだけは把握できる。アキラはそうに相手の能力をなんとはなしに覚えて、飲み下す最中、また銃声が響き……。

弾丸が、その位置から放たれたと考えるならば遅すぎると思われるほどの遅さ――だが客観的に見れば十数メートル分の違いしかない――で飛来して、

「なっ」

迷わずその太腿の付け根部分へと、喰らい込んだ。

その刹那、暗闇の中ただでさえ見えぬ弾丸は肌に触れ、肉を裂き、痛みを感じること――その速度、威力、大きさ、形状、その全てを彼に認識させた。

具体的な数値で表すのではなく、大体これくらいだろうと言う曖昧な表現で、コンマ以下まで正確に理解して――能力を展開する。

肌にその身を半分ほど埋める弾丸は未だ止まることは無いのだが、

「らァッ！」

『反発』能力によって、弾は勢い良く進行方向を真逆に変更して弾き飛ばされていた。

「……馬鹿はデメエだよ」

彼の能力は、物体を弾き返す。その条件は述べたとおりの事を理解、認識した後、自身の間合いである半径二メートル以内に入り込むことである。

瞬発的な衝撃なら一トンをゆうに超すが、持続すればそれは徐々に衰えて行く。だが完全に消えてなくなるまでは少なくとも、五分以上は掛かるので彼にとってはあまり懸念する点ではない。

「ぐあぁっ」

反射した弾丸は、男に『反射した』という事実を認識させる前に着弾し、速度が何倍にも膨れ上がった弾丸は、容易にその腹を貫通させていた。

男の、なるべく殺そうとする様子が伺える低い呻き声がアキラの耳に届く。その直後には既に、ソレの目の前へと彼は迫っていて――
――下を向く顔に振り上げる拳を炸裂させた後、顔面を『反発』させて男を天井へと叩き付けた。

「アホか？」

そしてまた、言いかけていた台詞の続きが聞こえたのは、その直

ぐ後であつた。

緩慢に感じる時間の流れ。その中で上——天井に衝突し、落ちてくる男——を見ると、それは先ほどの幻影とは遠く違つ警備員の姿。そうしてから、また気がつく。

周囲には一瞬にして、複数の幻影が出現し、アキラを取り囲んでいることに。

「幻影^{みがわり}使えるのに本体がそこに居るはずがねーだろ」

言葉の後、相槌代わりに発砲音が鳴り響き——その額に、銃弾がのめり込んだ。アキラは上体を反らしながら時間を稼ぎ、そしてまた弾を弾くと、

「無駄って言葉。知ってるか」

次ぐ発砲音が幾重にも重なって——幻影が作り出す弾幕は、暗闇で弾丸が知覚出来ない以前の問題を作り出していた。

故に——弾丸は彼の身体に致命傷を作れないものの、確実に痛みを、傷を与えることが出来ていた。

幻影は音も何処からとも無く響かせるのか、鼓膜を破らんとする連なる射撃音は途絶えることが無い。またソレに反して一発ずつの被弾は酷くアキラを混乱させていた。

「クソッ垂れ……」

直線的な攻撃の為、魅せられる幻影を無視して高速で左右に移動し続けても確実に弾はアキラを貫こうとする。

薄暗い闇の中で、一体どうやって居るのか定かではなく、また被弾ごとに足を止められるのでまともに前に進むことも出来ない。

距離も一弾ごとに大きく変わる様で判定しにくく……、全ての状況が、彼に不都合となっていた。

だからアキラは仕方なく——反射による同時射撃を止めて、常に反発する力を身体の周りに展開し始める。

すると——弾丸は柔らかいクッションに衝撃を吸収され、軽く宙を舞ってから床に落ちる。

「ふざけた真似を」

「はっ、大真面目だけど？」

どこからとも無く響く声。それに反応すると——不意に、並ぶ個室の扉部分に火花が散った。

外に付けられる堅牢な南京錠が、発砲によって破壊されて、

「なら考えがある」

幻影が音を止めるとやってくる静寂。その中で、扉が開く音がした。

その刹那後——開いたばかりの扉から、一筋の蒼い電撃が疾^{はし}

る。

凄まじい稲妻の炸裂音。男の小さな悲鳴に、逃げ出す足音。背後を向きながら威嚇する射撃音。そして——また現れる幻影達。

それから、わざわざ開けた扉から、まるで待っていたかのような格好でソレは現れた。

「やかましいお陰で目が覚めましたよ」

全身に青い電流を流し、まるで身体が発光しているように見える彼は『西篠輝』^{にしのかる}。自家発電^{セルフ}という電気を体内で発電、あるいは外から取り入れ、その電気を操ることが出来る能力を有する。

それは非常に強力で——。

「これは手助けではなく、礼代わりですからね」

彼が身体に纏った青い電流を解放すると、それらは一瞬にして天井の照明へと飛び——驚くほど早く、その階は廊下の奥から奥までを眩い人工の光で満たされていた。

アキラは手で影を作り、徐々に目を光に慣らしながら、西篠の言葉^{ことば}を聴く。

「他には誰が？」

「呉氏崎^{いづみ}つつー女だ」

今度の幻影はアキラを包むのではなく、遠くから自分の姿を隠す

ように配置されている。彼はわざと油断させるために、今度は能力を使わずに肉眼で知覚できる故に、反射神経で避けて見せた。

肌を掠りながら弾を避けるアキラを見て、「呉氏崎……」と呟きながら弾丸を上回る速度で動く西篠。

それから少しばかり思考して、

「貴方が何故苦戦しているか理解しかねますが、ここは僕に任せてください」

彼は先を促すようにアキラの前に立ちふさがった。

「ふざけんな！ 野郎は俺の——」

「貴方のも！」西篠は大声で叫んで、アキラの言葉を遮る。 「……僕の敵でもありますし」

そして、敵が弾倉交換している隙に、西篠は振り返ってアキラに言った。

「貴方が仲間だと判断して言います。全ての判断は呉氏崎さんを助け出してからにしてくださいと」

背を向ける西篠に、発砲音が突き刺さる。同時に迫る、先ほどより少しばかり形状の異なる弾丸は——疾る電撃によって撃ち落された。

光が爆ぜる。アキラはソレを合図と判断して、文字通りその場を飛び出した。

「逃がさ——」

男の横を飛ぶと、ソレは一斉に銃を向けて、

「代わりに僕が残っていますか」

西篠は応じる様に電撃で全ての幻影の手元を弾いて見せた。

そんな交わらない応酬を人事に聞きながら、アキラは伝票に書いてある部屋番号を探す。

彼女の部屋番号は二二二。そう離れていないので、簡単に、数秒と掛からずにそれは見つかった。

何の変哲も無い、並ぶ個人部屋の一つ。アキラは超大型拳銃デザートイーグルを両手で構え、男がそうしたように南京錠に照準を合わせ——力いっぱい引き金を絞る。

瞬間、強い衝撃が腕に伝わり、火花が手元ではじける。炸裂した弾丸は見事に南京錠を破壊して、アキラはぶら下がるそれを雑に引き剥がして、扉を力一杯蹴り開けた。

中に一步入り込み——途端に、それらを感じた。

外界の音がすべて消えたような妙な違和感。

肌に障る酷く嫌な生温さ。

吐き気を胸の奥から沸き上がらせる生臭さ。

肉や血などの凄惨なソレではなく、

「……？」

生理的、本能的嫌悪感を感じさせる生々しい——男の臭さ。

汗などから来る体臭ではなく、

「……ッ！」

質素な冷たい独房。狭い室内には高床式寝台ヘットがあり——その上では、件の彼女が横たわっていた。

口には穴の開いた球を噛ませられていて、四肢は伸ばされたまま高床式寝台ヘットの四隅に縛り付けられて。

身体には何も纏われておらず、そして悪臭の根源である白濁に淀んだ体液に全身は塗れていた。

アキラは上着を彼女の上に投げ捨て、それから縄を拳銃で打ち抜くと——彼女はようやく、悲しみに塗れた顔で目を覚ます。

感情など捨てたように、精神など既に壊れているような表情で、そっと起きるはずも無い身体を起こそうとする。

なのに何故だかその身体が自由に起き上がることに驚いて——
—アキラが口枷を外した瞬間、彼女の頭は一瞬にして白く染まり、
彼の手を強く弾いた。

それから気がつく。自分にかけられていた上着のことに。はっと、それで彼女は彼が助けだといわかに理解するのだが、身体がすくんで動けない。

なるほどと——西篠が言っていた言葉の意味が分かったアキラは嫌そうに頷いて、

「犯^やられたら殺^やりかえせ」アキラは彼女にはおよそ手に余る大型拳銃を投げ渡し、「ソイツはくれてやる」

彼女がやられたことなどは、彼女が今までにしたことに比べたら万分の一程度の苦しみでしかない。

人身売買に、人殺し。残された家族や、売られた人間のその後を考えれば、ただ数人の——まともな性趣味の——男^{まわ}たちに輪姦^{まわ}される事などは罪滅ぼしにもならないだろう。

が、アキラは彼女のことなどはただの善人としてしか理解していない上に——仮に知ったとしても、誰がどんな人生を歩もうとも苦しみなどは人それぞれだと、考えや行動を変えないだろう。

最も、それは至極正論だ。程度さえ違えど、その気持ちは十分に理解することが出来た。罪滅ぼしにはならぬが、それだけでも自分のした事の大きさがわかる。だからそれだけでも良い、充分なのではないか。

何が良くて何が悪いかなどは、どの時代に於いてもはっきりしない。だがそんな複雑な世界の中で——彼女は、弱々しく、だがしっかりと、拳銃^{ぶきう}を取ることを選^{えら}びんだ。

——そもそも、尋問や拷問をするにあたつての強姦^{レイプ}などは論外である。本来の目的を履き違えているのか、知能の低い者が相手だったのか。

敵がどうであれ、情報を吐かせるのが重要であり先行すべき仕事のはずである。相手のプライドを折る事が近道とされ、その行為に近いものは効果があるはずだが、強制的に犯してしまうのは効果の期待は酷く薄い。最も、性的な責め自体、拷問として有効ではないのだが……。

何かがおかしい。アキラは直感的に思いながら、彼女を眺めていた。

ベッドから降りて、冷たい床を裸足で踏みしめながら、引き締まっている割に白すぎる身体をアキラの上着で隠していく。

すこしばかり大きなソレを着ると、最早先ほどまで合った女の子らしく怯えた表情や雰囲気、その全てが払拭されていた。

呉氏崎は重く、力強く遊底^{スライド}を引き銃弾を薬室に送り込み、後は引き金を引くだけの状態にして——部屋の外へと出るアキラの後を追った。

「——とても第三課とは思えない。自分がどれほど無力で無様で情けなくて恥ずかしくて生きている価値がゴミ虫程も存在しないか、これでわかりましたか？ 少なくとも、僕がこれほど貴方に教えて差し上げるのは、貴方が僕に色々なことを教えて下さったからですよ？」

「お、俺じゃ——」

立ち尽くす幻影の中力なく尻餅をついて後ずさり、壁に背を付けて喚く男の顔の横に、西篠は電撃を疾^{はじ}らせ遮った。

「ええ、正確には貴方じゃありません。ですが、少なくとも貴方が属する組織に関係があるでしょう。一般人には、政府の細分化組織なんて見分けが付きませんからね。組織内の誰かが人を殺せば、組織ごとそんなレッテルが貼られる」

西篠は穏やかそうな表情で歩み寄ると、力強くその胸倉を掴み上げ――囁くように続ける。

「そう言う所でしょう？ 貴方の立つ場所は」

怒っているのか悲しんでいるのか。感情などどこかへ消えて、思いついたままにやっているのか――少なくとも、今の彼を見ればナツメは驚くだろう。それほどの豹変振りを見せながら、それを隠す様子も無く振り返った。

「この方の精神はスタボロです。まともに能力も操れない」

彼の能力は、視^{ジャミング}覚妨害。

人は物が反射する光を見て、その物体を認識する。だが彼は自身の放つ電波により、存在しない物体が『ある』という情報を無理矢理脳に送り込むのだ。そうすれば脳はその電波を認識し、実際には無いソレがあると誤認する。

音まで表現できるのは上達の証であるが、認識妨害系能力を極めればその感触すらも騙すことも出来る。

最も——彼はそこまで成長することなく、今正に人生を終えようとしているのだが。

——扉と扉の間の壁。逃げ場が無いそこに背を押し付け、逃げることも出来ず、落とした狙撃銃も拾えず、男はただただ、瞳孔が開いている呉氏崎の拳銃を口の中に突っ込まれていた。

西篠は男の行く末を睨み、アキラは彼女の行動を見守る。

呉氏崎の腕は不思議と震えることが無く——。

「私は反省や同情などしない。貴様と同じようにな」

男の悲鳴が漏れ出る前に、片手で構える大型拳銃の引き金を力いっぱい引いた。

——飛び散る火花は瞬く間に爆ぜる肉塊に消えた。

強く上方向へ弾かれた呉氏崎の腕は、強い衝撃に耐え切れず肩を外していた。

——脳髓があたりに飛び散り、壁や床に赤い染みを作る。下あごから残る体は直立したまま壁に寄りかかり、喉の奥から血を噴出させた。

これでいい。血に塗れた顔を拭いながら呉氏崎は呟いて、羽織るだけだった上着をしっかりと着なおして拳銃をアキラへと差し出した。

——甘い血の香りが辺りに充満する。血溜まりは早くも小さな池と化していた。

「くれてやるって言っただろ？」

アキラは彼女に背を向けてそう返す。ぶっきらぼうに言って、来た道を戻るように歩いて行く。

二人はそれぞれを一瞥してから、急ぐわけでもなく、その場を離れてまだ名も知らぬアキラの後を追って行った。

3 — 生動 —

——中央地区第二区画。セントラル——。一時。三分現在——

彼、ナツメは現在いま所属課ビルの課長室に居た。

今日はこれまでが仕事続きだったので休み、という筈であったのだが……。

ナツメは幾人かの課員がかしこまって並ぶその端で面倒そうに、課長の言葉を聞き流していた。

「その第五——もとい能力者や案件の容疑者の為の隔離病棟に賊が忍び込んだ。昨晚のことでな、丁度警備に回っていた電波の吉田が殺された」

のほほんと久しぶりに摂れるであろうまともな昼食を呑気に頭の中で思い描いていると、不意に周囲がざわついた。ナツメはソレに反応し、即座に緩んだ顔を真面目にした。

「彼はB級能力であつた。しかしそもそも直接的な戦闘が出来る能力ではない——コレを見てくれ」

言ってから課長は指を鳴らす。すると室内左側の全面ガラスにシッターが下りた。同時に天井の一部が開き映写機が出現して、照明が落ちる。課長が席を離れたその奥の壁に、ソレは映像を流し始めた。

——そこは薄暗い廊下であった。深淵なる闇はなく、オレンジ色の鈍い照明に包まれている廊下。そんな中で間も無く誰かが現れたと思うと、直ぐに消えた。

恐らくそれが賊なのだろうが、それ以降カメラに映ることが無かった。数分間、あるいは十数分だろうか。言い知れぬ緊張に包まれ誰もがソレに注視する中、突然明かりが点いて……。

ナツメの見覚えのある少年が電撃を奔らせていた。それは幾重にも蒼白い閃きを飛ばして、やがて一人の男——吉田——を壁に追い詰める。

それからまた——驚くことに、先日反吐が出る程にナツメを虐めたアキラが、そして貴族誘拐事件の主犯である呉氏崎が出てきて……。

既に白旗を全力で振っている吉田の頭を、拳銃で打ち抜いていた。音声の無い映像は、スイカを叩き割ったような頭部の有様を、淡白すぎるほど凄惨に映し出す。

同時に、その場に居るナツメと課長以外は皆顔を伏せて——軽く息を吐きながら、課長が映像に補足した。

「電撃使いと少女はある事案の容疑者だ。そして『ソレら』を救出しに来たのはアキラと言う——その道では名の知れた便利屋の一人だ。実力は高く、巨大ミミズ型の砂蟲を一人で討伐したという噂が流れるほど」

言い終わると照明が点く。やがて映像は消えて、映写機は元の天井の中へ。シャッターも緩慢な動作で機械の作動音を鳴らしながら

収納されていき——残酷な場面が失せてから、それぞれは意見を口にした。

「の、能力の程は……？」

「見る限りでは両方ともAの下と言った所か。『^{マイナス}反射』に『電撃』、EやDの下位能力でも特別視される系統は、それ故に上達するのも難しいのだが……」

難しいと言う事は、永きに渡る努力が必要だと言う事。彼等がその大きな力を手にしていると言う事は、その『難しい』を乗り越えたという事で——つまり、それは能力の厄介さ等よりも、その精神が強すぎる事を教えていた。

精神が強ければどれほどの逆境でも諦めることはしないし、適応判断も飛びぬけているだろう。完全に無力化するには、その息の根を止めなければいけなくなるほど厄介で——そして相手を殺すこと自体の難易度が、その能力のせいで酷く高いのだ。

「せ、選抜チームを向かわせれば良いのではないですか……？」

選抜チームとは、第三課の中でより強力とされているAの上の力^{プラス}を持つ者のみで構成された集団である。

多彩な特異能力は手に余ることなく使いこなされ、また能力を使わずとも高レベルな戦闘技術を持ち合わせている。

その中には、能力レベルが判定限界値ギリギリである『特A級』が二人ほどいるのだが、その姿を見たことがある人間は極端に少ない。

「私が、手に余る仕事を君たちに与えると思うか？」

彼にそういう信頼を向けられる数人の課員は、皆B級以上の能力を持っていた。ある程度の実力はある。そう自覚している彼等だからこそ、そんな課長の台詞に僅かながらも自信を持つのだが、

「でも、なんでCマイナスのナツメが居るんですか！ 足手まといですよこれじゃあ！」

一人の男が声を上げた。敵意を持つように、ただでさえ見慣れぬ戦力外を排除するようにナツメへと指を向けて。

そして図らずして注目を受ける羽目となったナツメは、苦笑を浮かばせ、少しばかり後ずさりしながら課長に尋ねた。

「ええ確かに。俺の実力や能力ではとても齒の立つ相手ではありませんし、弾除けになる前に死んでしまいます。それどころか足を引っ張ってしまうかもしれません」

だが彼は西篠を一度窮地に追い込んだことがある。そしてアキラに認められた人物でもある。そんな事実を知るのは課長のみであるために、ナツメはそれを伏せて話すと、

「わかっている。お前はチームには入っていないが————知っておいたほうが良いと思ってな。これは私の気まぐれだ。気にするな」

課長は不敵に笑んだ後、その数人の課員の中でリーダーを決め、命令を下して解散をさせる。

馬鹿にするようにナツメを見ながら去って行く課員達に少しばかり苛立ちながら——ナツメは振り返った課長に用件を聞いた。

「——それで、話とはなんでしょう。まさか公開私刑するために呼んだわけじゃないですね？」

そんな思惑ならばナツメにも少しばかり考えがある。そう言う意図を汲み取ってくれるであろうと思いつきながら言葉を口にする、課長はああ、と短く頷きながら、彼は元の席に腰を落とす。

ゆっくりとした、だが妙に貫禄がある速度で手を組んでから、課長はようやく言葉を続けた。

「お前にはあらゆる仕事を与えたいのだが——昨日の話から察するに、お前は事件は兎も角、アキラと再戦したいのだな？」

与えたい、と言うのは押し付けたいのいい間違いだろうと、心中吐き捨てながら、ナツメは軽く頷いた。

「まあ、それもありますが——さっきの話で、俺の魂が燻くもったんですよ。奴等は自分の目的のために人を殺す事をいとわない。それも、どれほど手を汚したかも分からない人間を助けるために……。何者か、どんな組織かも判然としませんがね。俺は、奴等を裁かないといけない。秩序を乱す者は正さねばならないんです。だから俺は、この事件を担当したいんです」

お願いしますと、彼は深く頭を下げる。その腰の曲げ具合などはコレまでに無いほど真摯に。心はいつしか台詞どおりに燻くもるところか、酷く暑い炎に燃えていた。

だというのに課長は素っ気無く「お前が頭を下げてても意味は無い」と吐き捨てて、ナツメが顔を上げるのを待った。

そう言われてしまえばその姿勢を崩すしかない。課長はしつこく粘る熱意より良く話を聞いて思い通りに動いてくれる『駒』の方が好みなのだから。

だからナツメは仕方なく顔を挙げ腰を伸ばし、背筋良く立ちなおしてから課長の瞳を睨むように見据えた。

「お前の頭には権力ちからがない。だからどれほどの角度で、どれほどの回数下げようと意味は無い。そして——お前の望みどおり、関係性を見せるこの事件を追うことを許そう」

なんでも無い様に紡ぐ——そんな台詞に、彼はそう驚くことは無かった。

元より、ダメだと切り捨てられても個人的に追うつもりであったからだ。何が現れようとどんな障害が立ちふさがろうともソレを全て切り捨てて。そんな気持ち、心境であつたからこそ、彼は表面にもありがたいという気持ちを出さず、当たり前だとそれに軽く頷くと、課長はソレに付け足した。

「条件付きでな」

彼は薄く微笑みながら、机の上にある煙草入れから紙巻を出して火を点け、それから胸いっぱい煙を吸った。

条件とは一体どんなものだろうか。ナツメは疑問に思いながら、気分良さげに煙を吐き出す課長を見ると、彼は「なに、そう心配す

るものではない」と告げてから、

「他の仕事も遂行してもらおうという事だけだ。既にお前の望む事件には担当が付いている。それでもその事件に臨みたいというお前の願望を叶えてやるには、お前の空いた時間に捜査をやって貰うしかないのだ。無論、^{フライベート}個人でやっているわけじゃなく、またそのせいで休みが無くなるという事だから、支援は惜しまないつもりだがな」

——^{セントラル}中央地区第二区画。一。時三十八分現在。

「せっかくのいい女が灰かぶりになってしまったわ」

現状を簡単に説明すると——マンホールのような出口から這い出ると砂塗れになった、という事だ。

口に入る砂を吐き出し、また服に付いたソレを払いながら彼女が呟くが、語尾は女性らしく上げたものではなく、男らしく吐き捨てるように下げたソレである。

彼女——涼谷涼子は背負ったままでは通れなかった大剣をその場で、くくりつけた縄で引き上げ、それからしっかりと背負いなおしてから立ち上がる。

「さあて、愛しのナツメ君は生きてるかなつと」

そこは街中であるが裏路地の奥地で、偶然迷い込まなければ分からないような場所である。

彼女は背伸びをしながら軽い足取りで進むのだが、決して道を知っているわけではない。ただ、奥へと進むのではなく手前へと出るのだから、適当に歩けば大通りへ出られるのではないかと考えるだけである。

事実、その通りに地面を占める砂は徐々にその姿を消していき、やがて冷たい人造石の大地となりはじめて——その調子で曲がり角を曲がると、

「ん？」

「あ？」

先客が狭い路地で煙草をふかして溜まっていた。特に女性を襲ったり金を持っていそうな人間を脅したりしているわけではないので、気分悪そうに声を漏らすだけに留めたのだが……。

「なんだその大剣^{おつ}は。いつの時代の人間だっはっはっはっ！」

彼女の背中から生える剣の柄を見るなり、腹を抱えて笑い出す男が居た。まだ大人になりたてであろう外見の彼等に、涼谷は大人の態度で許してやろうとするのだが——連鎖的に、その場に居る数人の男が笑い出してしまった。

一体——何がそこまで彼等の笑いのツボを刺激したのだろうか。

怒りよりも興味と言つか、そんな好奇心が彼女の頭を駆け巡って、

「やかましい」

一瞬、ほんの刹那、そんな好奇心を上回った心が笑いを促した男の顔面に拳を突き刺した。

勢い良く、だが全力で手加減をする一撃。拳は吸い込まれるように男の顔に向かって、彼がソレに気が付いた頃、拳は既に視界の大部分を覆っていて、

「がぺっ」

そんな奇妙な悲鳴を上げながら、男は近くの壁に叩きつけられては頭をぐら付かせ、そして堪え切れなくなつた様に膝から崩れ落ちる。

そして瞬間的に――辺りは静寂が、殺気を孕む視線を飛ばす静けさが支配した。

「勝手に笑って、注意したら怒るのか？ いいなあ自由で――
だがな、私の適正武器を知らぬでも侮辱した事には流石に堪忍袋が破裂するぞ」

酷く怒りの沸点が低く堪忍袋が小さすぎる彼女は、男たちを上回る殺気でそれらを睨み返すと――飯にも中央地区にいる人間である彼等は、それだけでも彼女の實力を理解したのだろう。

大勢でかかっても負けると判断した彼等は、ジリジリと後ずさりした後、倒れた男を引きずって足早にその場を去っていった。

「まったく」半ば呆れたように、半ば感心するように言葉を漏らす。
「平和だねえ」

迷路のようでそうでもない路地を抜けるとそこは――。

「人でごった返してる……、委員専用の裏道とかないもんかな」

朝である故に日差しも気温もまだ柔らかにある。その時間帯に限らずだが、強いて言えば最も人が多い頃であつた。

そんな鬱蒼とする森よりも酷い人の波。彼女は少しばかり憂鬱になりながら大きく息を吸い込んで、其処へ飛び込んだ。跳ぶ様に入り込んで、向かい側の店へと向く身体を自身の進行方向へと向ける。

流されぬよう。自分の意志を貫くようにしっかりと先の地面を踏みしめて――肩をぶつけられても、荷物が大剣に引つ掛かつて迷惑な目で見られても自分を押し殺す。

その中で――前方から迫る男が居た。

どれほど近づいても避けることもしない図々しさを態度で見せる男。だから彼女は仕方なく道を渡そうとするのだが、周囲の人間が壁となり……。

結局、男はまるでそれが目的だったように涼谷と衝突して、

「はっは、やっと見つけたよ僕の大好きな涼子さぁん」

大剣ごと強く抱き締める。失くした人形が見つかった女の子のように力強く、だが優しく、今までの悲しみを打ち消し嬉しさを表現する抱擁の如く。

長身の涼谷よりも背丈の高い男は其中でそう戯れた。

見も知らず声も聞き覚えのない男の行為に、彼女はひどく女の子らしく小さな悲鳴を上げて——彼の両腕を引き剥がすように力強く弾くと、攻めの流れを描くように素早くそのまま顔面を驚掴む。

「気軽に触るんじゃないよ。もっと暑くなりたいのか？」

流れ行く人波は避けて雑踏の中彼女らを置き去りにする。

邪魔だというような顔をされるが、今回ばかりはその気持ちが涼谷に理解することが出来た。

「そう恥ずかしがらないで。そんな所もキュートだよ」

男の眼窩脇の骨がみしりと悲鳴を上げた。

「口を減らして名を名乗れ。私の心は焦土だぞ」

「恋い焦がれてしまっ——」

「いいから名乗れっ！」

やれやれと肩をすくめ、顔を掴む手を離そうとするのだが、それは離れるどころか力が抜ける気配が一切無い。

男は考える。これはもしかすると彼女なりの照れ隠しなのかもしれない、と。大昔にはそんなものを現わす単語があったはずだが――

——失念してしまった。覚えていればそれでからかい、彼女の可愛らしい仕草を見られたのだが……。

戸惑いの言葉を幾度とも無く発すると彼女はようやく手を離したので、彼は軽く息を吐きながら、彼女の並びに立って歩を進めた。

「僕ってそんなに薄い？」

言われてから涼谷は目を向ける。彼の顔は常に微笑み、目に掛かるほど髪が長く、そのちゃらけた茶髪の奥には常に薄い目が在った。

そんな優男を見て涼谷はそいつが何者か、ようやく判然として来たのだが彼女は悪戯に頷くだけ。

男は落ち込んだように肩を落として——彼女の頬を包むように、手を伸ばした。

「だったら僕の熱いキスで思いだ——」

その瞬間、頬の手に彼女の滑らかな手が触れたと思うと、

「熱っっ！」

高熱の炎が手の甲を焦がした。

肌の烧ける臭いが鼻に障る。男は熱そうに、痛そうに手を抱きながら涼谷の嫌悪しかない声色を聞いた。

「熱い炎で私を思い出したか？ はかもり 墓守さんよ」

彼女の横暴さ、手の速さはようやく記憶の底から蘇る。何故忘れていたか、男は考えると、脳は瞬く間に答えを導き出した。

そいつもまた、彼女の魅力であるからだ、と。

「^{たかもり}嵩杜だつて。でも君の墓なら——ああごめん、守れないや。だつて君と一緒に黄泉の国に行きたいから」

「気持ち悪い事を言わないでくれるか？　悪いが私はお前に興味ないし、お前ほどの見た目や貢献心を持っていれば他の女が来るだろ」

「うん」

彼は否定することなく、当たり前だと言つように頷いて——

彼女は少しは謙虚に出るよと、首を振ると、

「でも僕は涼子さんが好きだから。でも安心して、本当に迷惑だったら二度と君の前に出ないから」

そんな卑怯な台詞を吐かれてしまう。涼谷は、また頭を振って、

「わかったよ。私はお前に構わないが、お前は常識の範囲内で好きにしろ」

街に戻ってはみたが早速妙な同僚が現れて——これはナツメと合流するのは大分後だなど、ざっと考えながら空を仰いだ。

その空はいつもの様に吸い込まれるような蒼さを魅せていた。

セントラル
——中央地区第五区画。——一時○○分現在——

見上げる空は嫌に青い。綺麗ではあるが——気温が上がりつつあるこの場所では、それは慰めにもならなかった。

寧ろ熱かろう苦しかろうと小馬鹿にしているようにさえ見えるが、恐らくコレは熱によってストレスが溜まり頭がオカシクなっているだけであろう。

ナツメは今国立病院へとやってきている。あの後直ぐに休みを貰えたからだ。

身に纏うのは防弾性の高い強化繊維を使用されている作業服のよ
うな制服である。ベージュ色で、変わりに蒸す傾向にあるので上着
のファスナーをあけることで風通し性能を上げる。

だが病院の中に入ればそれはあまり意味の無いことであった。

地獄から蘇ったような、生きた心地がそこではする。その理由は
——冷房が効いているからである。基本的に、中央地区にある
屋内営業の店や施設には冷房装置が完備している。

それは常に中央地区を最先端にする思惑から来る事でもあるし、
それがどれほどまで民間で広がり、どれほどまで扱えるか図る実験
代わりでもあった。

「すみません。治安維持委員会の者ですが……」

受付へと赴いた彼は最新式の携帯無線機を操作し、証明書を空中

に画像として展開する。スーツ姿の彼女はその証明書に記してある番号をパソコンに打ち込み、政府から与えられている委員会の情報の中からそれを検索させて――確かに彼の情報があることを確認してから、業務用笑顔で頷いた。

「はい、今日はどのようなご用件でしょうか――」

簡単に「先日の事件跡を見たい」とだけ告げると彼女は一瞬、嫌だと言う様な表情をした後――簡潔に場所を教える。それに丁寧な頭を下げて、ナツメは言われたとおりに道を行った。

能力者だと知られたならば、彼女の気持ちは至極まともなことがあるう。能力者は力がある分問題を起こしやすく、また起きた問題の規模が大きすぎるのだ。

決して当事者同士の怪我だけではすまないから、必ず誰かに迷惑が掛かる。病院であれば、それを心配するのは当たり前であるう。

最も――彼は、無関係者のけが人は一度も出したことは無い。それだけは信念にしているので、彼は他人からどうこう言われようとも気にはしない。

――外へ一度出て、道なりに進むと例の隔離病棟が大きく構えていた。

並んでいるどの病棟よりも一際大きく、配置されている一般病棟よりも一段とその不気味さを醸し出す。ナツメは『能力者と犯罪者』が収容されていると聞かされている其処へと、息を吞んで入っていた。

唯一ある出入り口で証明書を見せ、開かれた扉の中へ足を踏み込む。

一瞬、妙な殺気というか、悪寒というか。不可解な不愉快を感じたナツメはそれでも止まることなく、一階部分のロビーを素通りしてそのまま階段へと向かう。

嫌に静かな廊下。酷く明るく、妙に人気の無い其処で足音を鳴らしながら歩き——彼もこんな風にここへと来ていたのかと、なんとなく考えながら……、ようやく其処へとたどり着いた。

『進入禁止』という黄色のテープが階段を塞ぎ、そこは一樣に暗かった。

恐らく、殺人が起こった場所になど居られないと収容者が抗議し、仕方なくこの場所を一定期間閉鎖状態にすると決めたのだろう。それもまた、仕方の無い事ではある。

用心のために能力者を配置していたのに、その用心棒が殺されてしまったのでは誰もが不安になってしまう。収容者は皆怪我をしているが、少なからずとも犯罪を犯している。

大多数は人の命を弄び、罪を償うと言う意味では殺されても仕方の無い人間ではあるが——賊に殺されては意味が無い。

政府が『裁く』事で死ななければ、その命は全くの『無駄』となる。非人道的と蔑まれようと非常識だと石を投げられようと、また誉められようと讃えられようと、そこに属す人間には何も反論することは出来ない。

それが政府の決定である為に。

——まだ拭いきれて居ないような血の臭いが鼻腔を刺激する。ナツメは能力を展開し、即座に暗闇に目を慣らして足音を慣らして前へと進む。

すると、先ほど映像で見た場所が其処にあつて——血染みになっている壁が、床がそこにあった。

通路の両脇に並ぶ個人部屋。灯かりは照明しかないと言う閉鎖的造りは、『脱獄』と自殺防止、それと侵入防止のためである。今回に限っては、それもあまり意味を成さなかったのだが……。

——二つ、鍵の掛かっていない部屋があつた。ナツメは警戒しながら耳を澄ませ、本当に誰も居ないか確認した後、手前の部屋へと侵入する。

するとそこは——。

「あのっ！」

突然声を掛けられてナツメは肩を震わせた。心臓が驚いて一瞬停止したかと思い、また思考は一瞬にして白紙に帰る。

目が慣れたとは言え、暗闇の中、視点を変えた場所を直ぐに認識できるはずも無く、故にその部屋の中を見ることなく振り返ると一人の男が引け腰で立っていた。

「……なんでしょっか」

「第五病棟管理責任者様が、貴方の……」彼は言いよどみ、一つ咳払いをしてから捲くし立てるように言葉を続ける。「能力者の意見が聞きたい、と言っておられるのですが如何でしょうか！？」

この場の捜査に來たのは恐らく一般警察機関だろう。委員会が出るまでも無いと考えていたが、能力者が関係していると判断されて――先ほど、課長室に呼び出された者たちが捜査担当に選ばれた。

本格的に活動するのは明日だろうか。彼にはわからないしどうでも良いが、少なくともその責任者は、殺し殺された能力者と同じ存在である彼に意見を聞きたいらしい。

「わかりました。それでは申し訳ないのですが、案内を頼みます」

安堵したように頷く男。それほどまで威圧を掛けられていたのかと思いつながら――ナツメは部屋を一瞥し、それから急かされるように呼ばれたので先を急いだ。

――結局、彼は明日には綺麗に改装されているであろうその部屋を見ることが無かった。見れば彼の、少なくとも人間に対する考えが根底から覆されるような有様を。

ナツメは男が意図的にソレを止めたことにも気づかず、責任者との話を望み――明日にはまた違う仕事が待っている。そんな事を考えて、また疲れるだろうなど。

次第に明るくなって行く階段を降りながら考えて、軽く息を吐いた。

SKILL 2 『確信的テロ事件』

ノウステンティ
——北地区第五区画。○五時五三分現在——

暗き闇。全てを飲み込む深淵の如きソレが存在するのは、電灯の普及率が極めて低いからである。

気温は低く、零度に近いのは——極端に暑く、極端に寒い砂漠故の常識であつた。
あたりまえ

その中で外套も羽織らぬ一人の男が直立不動で動かない。とある通り、商店が立ち並ぶそう広くも無いが、狭くも無い場所だ。

一陣の風が吹き——短髪は微動だにしないものの、だらしなく纏われる衣服はなびいて、

「君に幸あれ」

何かを願うように、だがソレこそが皮肉だと言うように男は嫌らしく口角を挙げ、笑むと言うより蔑むように目を細めると、男は背を向けてその場を去って行く。

少しすると東の空は明るんでくるであろう時間帯。早朝と呼ばれる時間帯ではあるが、まだ誰もが活動を開始しない頃。

男は眺めていた建物を遥か後方に送りながら、時計を確認する。

長針は一一の数ミリ手前に。秒針は直ぐに一二の位置まで迫って、

やがて到達する。そうすると長針は時間の経過を過敏に察知したように身体を動かし、時刻を五五分と表示させると——同時に、彼が前にしていた店が吹き飛んだ。

辺りが一瞬にして真赤に明るく光った後、凄まじい爆発音と共に商店は紅い炎と黒い煙に包まれる。凄まじい煙の臭いに彼は服で口元を押さえて振り返った。

それは近辺の建物に被害を及ぼせ——誰かの悲鳴は、多くのソレを呼び起こし、やがて幾重にも重なるソレは酷く鬱陶しい騒音と化す。

バチバチと火花が弾ける建物。寒い夜は一瞬にして熱気籠る。骨組みが露わになった頃に、知らせを受けた消防隊員は慌てた様子でその火へと砂を掛け始めた。

男は店を囲む野次馬に紛れてソレを眺め、ほくそ笑みながら——
——そつと其処を抜け、また闇の中へと溶け込んでいった。

——中央地区第二区画。セントラル。八時。四分現在——

「あれからまた爆発テロが起こってな」

大変な時期だなあと煙草をふかす課長の話を、ナツメは後ろで手を組みながら真剣に右から左へと聞き流していた。

「中央第一区が大きなもので、西三区駅は一週間運行不可。そして今回は北五区の商店だ。中央はまだ分かるが、それ以降に起こる小

規模な爆発^{テロ}は関連性が無く、手がかりが掴み難い」

一連性はあるが、それが同一の犯人による犯行だという関連性も証拠も全ては爆炎の中に散る。

もしかすると、考える通り一番最初の大規模テロからずっと同じ組織^{テロ}が爆発を起こしているのかもしれないし、またそれに感化され、且つ社会に不満を持っていた人間がそうしているのかもしれない。

平等でもそうでなくとも、世の中は常に不満で溢れているものがある。

いつ暴動^{デモ}が起こるかわからないだけであり、今回はたまたまソレがテロという形で爆発し、政府に、民に脅威と恐怖、それと大きな不安を与えているのだ。

今回は商店が爆破されたと言う話だが——それが酷く厄介である。

それが単なる力の誇示なのか、それとも政府に対する脅迫状なのかが判然と出来ないからだ。

政府^{かれら}がそうやって探す羽目になるのは、水中のぼやけて仕方が無い条件^{しかい}下で外から放り投げられた、ペンで印が書いてあるだけの石である。それも酷く小さいもので、大体親指の先ほどの大きさの。

言われただけでも嫌になることを——彼、ナツメは今正にソレを探せと命ぜられている最中であつた。

「……、俺は有能ですか？ 万能ですか？」

聞き流そうと努力をするも、性格上どうにも無視できないので仕方なく脳に刻んでいると、やはりどうにも、無視できない言葉の数々ばかりであり——どこから聞こうか迷う内に、彼は自分を問うた。

「少なくとも無能ではないな」

課長は曖昧に返してから、思い切り煙を吸い込んだ。火種は勢いを増して紙と草を灰へと変え、それから濁った白色の息を吐いて彼は軽く笑った。

「ああ、お前は上限が見えない程吃驚することをいつでもやってくれる。それは特A能力者がやっても当然なことを、お前も真似てやってくれるから、だと思っただが……どうだ？」

「わかりませんが、誉めているのならばありがとうございます」

妙だと疑うほどソレは実に高評価であり、ナツメはそれに少しばかり照れながら、だがソレを表情に出すことは無く一礼する。

課長は不敵に笑ってから言葉を、続けた。

「警察はテロだというだけで匙^{さし}を投げた。迷惑な話だが——ああ、確かに迷惑だ。だが仕事が流れてくる限りソレを受けなければならぬ。そうだろう、そう言うものさ」

うんざりするように肩をすくめ彼は自己完結する。そして大きく息を吐きながら煙草を擦り潰すように灰皿に押し付ける。煙は鈍く空気に溶けて、やがて火共々ソレは姿を消した。

途方も無いようにソレを眺めながら、ナツメは彼の言葉を耳へと流し込む。

「だから今回、君に搜索をしてもらおうと私は考えた。低能力の君にソレを頼む私は愚かな？」

「それは断じてっ！」

課長の微笑が浮かぶ直後、ナツメの気だるそうな背中の後ろ——つまり背後の扉が勢い良く開かれて、

「話は全て、聞かせてもらいましたわっ！」

振り返ると見える、金髪の女性。ソレに対して——ナツメは少しばかり肩を落として息を吐いた。

事務用の身体に吸い付くようなスーツを身に纏う彼女は、ただでさえ高い声をさらに高らかに上げて歩み進む。腰より長い金髪を左右に軽く躍らせながらスカズカと、だが何処と無く品があるような歩き方で。

そうしてやってくる彼女は——間近で見るとそれはどこかのお嬢様のような巻き髪で、そして人形のように整った顔は非常に感情豊かであった。

「課長は愚かな判断ではありませんわ。なぜならソレは——この私、『エリック・ジェーン』が居るからです！」

尖るような凜とした瞳は課長を睨み、得意気に釣りあがる口元は

意気揚々と言葉を打ち鳴らす。

課長は彼女が聞き耳を立てていることに気がついて、わざとそうに登場するタイミングを与えたのだ。

ナツメがソレに気が付いたところには既に、彼女の申し出を断るタイミングは計られずに過ぎ去ってしまっていた。

エリック・ジェーン。彼女は例の選別チーム、Aの上の能力者^{プラス}である。能力や身体能力は不明——と言つか機密事項扱い——だが、性格は彼女の台詞を聞いた通りである。

酷く自己主張が強い美人。異邦人特有の髪と瞳を持ち、正確は強気一筋。

ナツメがまた息を吐くと、彼女はきつとナツメを睨んで——。

「噂は聞いていますわ。ナツメくん……？ 『その程度』の能力で霞むほど上に居る実力者たちを打ち倒していると言う『噂』を、聞いていますわ」

「それはそれは。かのジェーンさんに名前を覚えてもらえるとは光栄です」

嫌味に聞こえる台詞だが、彼女は真っ直ぐ思ったことを口にしていただけであり、別段、他の意味を込めて言っているつもりではない。

彼女はそう言う人間なのだ。

最も、ナツメも影でコソコソと言われるよりは幾分か気分が楽である。だから少しばかり、実力にモノを言わせて他を蔑ろにするような人間でも彼女はマシだと、そう思えた。

「ええ、光栄に思ってくださいまし。この私^{わたくし}、エリック・ジェーンと行動を共にできるのでからっ！」

この——やかましいほどの自己主張が無ければもっと良いのだが、とも。

しかし、挨拶を交わして自覚の無い嫌味を言われたただけなのに、一体いつ行動を共に、だなどという話になったのだろうか。甚だ不思議である。これが——選別チームというものなのかもしれない。

「いや、光栄は光栄なのですが、ただ捜査をするだけです。わざわざジェーンさんが出てこずとも——」

「私は貴方^{わたくし}の力を確かめたいと思いました。貴方は非常に不可思議な程強いという事実があるのに、その噂は極一部でしか信じられて居りません。最も、私自身もそれが事実かは分かりませんので、貴方と同行してその力を見極めたいのですわ」

真摯な眼差し。先ほどの貶すような台詞とは矛盾する言葉。彼女はソレを意識無く言いながら手を差し伸べた。

飽くまでも、拒否権は存在すると言う事らしい。この手を引つ叩いてこの場を後にすれば個人でのみの捜査が出来るという事だ。

相手はエリート中のエリート。生まれも育ちも、能力の質でさえ

霞むなどと言う位置では無く、遙か雲の上、大気圏内に存在するほどの場所にあるのだ。とてもナツメには届かぬ場所ではあるが――。

「この人とはあまり関わりはありませんが――俺で良いのなら、こちらこそよろしくお願いします」

いずれは到達する場所だ。下見は早い方が良い。絶対に、確実に。少なくともナツメはそう考えた。

だからナツメは力強く握手を交わしてから、課長の告げる情報を受けてから、ジェーンと共に行動を起こした。

――ノウスンティ北地区第五区画。○九時三四分現在――

中央線から東地区の駅へ。そこから北へと向かい、到着するが空はまだ気温も日差しも優しかった。

ナツメは腰に下げる拳銃だけを装備するが、エリックは着のみのまま自由気ままにやってきている。

中央とは全く違う寂れた雰囲気。事実、其処は寂れているのだが――人の活気さがソレを打ち消しているようで、一概に寂れている、と口に出来るものではないようだ。

「根本から別の街みたい、ですわ」

中央生まれで中央育ちという生まれながらの人間は、エリート下を簡単に

侮蔑する。ソレが大体を占める為に、ナツメは、純粹に感心する様な彼女の言葉に少しばかり虚を突かれてしまった。

「はい、科学技術に置いてかれていますからね」

電気の普及すらも全ての建物に行き渡っているかすら定かではない街。現在は豊かな時代であるため完全に政府が保障してくれているのだが、そもそも電気工事が^{はかど}捗らないらしい。

そんな事を平々凡々、仕事など忘れ呑気に考えている彼女は、委員会の制服を着ているという理由もあるが——周囲から激しく注目を受けている。その美貌もさることながら、程よく引き締まる身体がどこことなく淫靡な^{いんぴ}ラインを描いているからである。

だが彼女は気にした様子も無く。ナツメは仕方なく拳銃に手を掛けながら、目的地までの道のりをただ漠然と歩いていった。

だが相手がどれほど美人であろうと、政府の人間に煩惱だけで襲い掛かる人間など居るはずが無い。結局周りの人間の注目を浴びるだけであり……。

そして間も無く前にする——黒く焼け落ちた建物の残骸。

今では野次馬も消え失せ、『Keep out——立ち入り禁止——』の黄色いテープが張られるのみの虚しく寂しい場所。

隣接する建物も半焼けし半壊しているようで、その家主は忙しそうに中の荷物を外へと運び出していた。荷はリヤカーに乗せられ、その近くには荷を盗まれないようにガタイの良い男が腕を組んで辺りを警戒している。

「あの——— すみません。話をお聞きしたいのですが」

腕部分に縫い付けてある、委員会を示す腕章を見せながらナツメは男へ近づくと、彼はこちらへ気づき、友好的な笑顔で手を広げる。どうやらあんな風貌をする男でも緊張していたのだろう。

「ああ、良く——— 来れたもんだな、お前等はアツ！」

などと勝手に好意的解釈を——— 最も見たままの感想——— を思い浮かべると、男は腰から勢い良く振り抜いた何かを、間髪置かずにナツメの頭頂部へと振り下ろした。

不意に襲い掛かる凶器乱舞。脳裏に過ぎる閃光の瞬きは、手に掛ける拳銃を離せと強く命令を下していた。

「なんで大事のときに、いつも遅いんだッ！」

男の叫びは素早く次の台詞を紡ぎだし、ナツメは拳銃を手放して素早く頭上へと手を振り上げた。

一瞬。日常生活で鍛えられた身体は戦闘にも生かせると、感情の赴くままに頭上へと振り下ろされる鉈を両手で挟み込む様に受ける防衛方法——— 白刃取り——— を実行する最中に彼は感じていた。

身体に、腕に、鈍く重い衝撃が極端なまでに負荷される。進行方向を防ぐ掌の肉が裂けるのを感じると共に、腕は強い力に僅かな間痺れてしまう。

それでもナツメは機械的に万力の如く、肉がソレによって裂けて

も無論関係無しと、鉦を押さえ込みながら痛みを押し殺し、情けなく、一つしか浮かばない言葉を口にした。

「申し訳ございません……」

「貴様が遅いせいで娘が死んだッ！」

間を置かずに男が理不尽を叫ぶ。その声は涙ぐんでいるようであり、垂れる鼻をすすする音が耳へと届いた。

ナツメの横ではエリックが腕を組んで彼の選択を待ち、またナツメ自身は――。

「申し訳ございません」

言い訳も浮かばず、またそんなその場凌ぎを吐けるほど、彼は肝の座った男ではない。

故に、ただ無力に、男の怒りを抑えるわけでもなく抵抗することせず、言葉を繰り返すだけであった。自分でも何が真に良いのか見出すことも出来ず……。

「謝れば許されるのかッ!？」

謝罪で済んでしまうような世の中ならば治安維持など不要で、謝罪一つで許されるような世の中ならば世界平和などは夢のまた夢。そんな一言は、現在の彼の行動を根底から否定する一言である。

が、彼は未だ、知恵の足らぬ者のように台詞を繰り返し、

「貴様は……、クソがッ！」

痺れを切らした男は、鉈を振り抜けぬと理解して他の行動に移る。

その直後の判断は目を丸くするほど素早くて確で——鉈から手を離れた彼は、左足で大きく踏み込むと其処を軸にしてその筋肉のみで構成されたかのような巨体を軽々と翻した。

その間に収縮されたような右足は、回転して勢いを付加し、そしてナツメを正面に捉えると鋭く突き刺さった。

全ての体重を乗せる大木のような足は見事にナツメの腹を蹴り抜ける。彼は背後へと大きく姿勢を崩しながら、それでも倒れぬように地面を擦りブレーキを掛け、そして力強く踏ん張ってまた——直立する。

男は憎らしげにそれを見ながら、その最中で巻き上がる砂煙の中に落ちた鉈を拾い上げ、動くこともせず乱れる衣服も正さず——逃げることも抵抗することも、許されることも放棄したナツメの首筋に、殺意無き刃は凶器らしい冷たさを伝えた。

「娘は、コレよりも苦しかった筈だ……」

「申し訳、ございません」

——彼とてぶつけようのない怒りに苦しんでいたのだ。

そんな時に——治安維持を謳う割には何も出来ずに、ただ権威を振るい威張り散らすだけのナツメ達が現われた。恐らく、堪らない程の怒りが彼の中で炸裂したのだろう。

だからその限界値を超えた怒りに背中を押されて襲い掛かったのに、ナツメは命を守る程度の抵抗しかない。

本当に憎むべき相手が分かっている上に、八つ当たりすらまともに出来ない彼は——悟ったように、その手から鉈を零して、背を向けた。

「もう良い、帰れ」

流れる涙を、吹き出る鼻水を袖口で拭い去りながら、最早どうでも良いように彼は吐き捨てる。

これで退ける。逃げる事が出来る。今回の選択は失敗していた。これから個人でコソコソと調査して裏で事件を解決すれば良いのだ。情け無いが、これが最善——。

そう考えた矢先に、襲い掛かるのは酷く苦い嫌悪感。

先ほどの無抵抗はなんだったのか。ただ単に、これ以上の意味の無い問題を起こさないためだったのか——否、それは断じて違う。抵抗する必要がある見出せなかったからである。

死なないから大丈夫だという意味ではなく——自分を守るためだけに力を行使してよいのかと考えさせるべく現れた偽善心の所業。

男に謝罪しか出来なかったのは何故か。それは無難に無様なままその場を潜り抜ける為ではなく、悲しみに明け暮れる人間の気持ちを知った風に口を利きたくは無かったから。

ナツメはそうしてから、自身に問うた。

このまま、退くのか？

その答えは問いを紡ぐと同時に全身へと伝達された。

「爆発は何時頃に――」

「帰ってんだよ！」

来ると予想されたように放たれる、振り向かぬ男の叫び声はされど激しく、ナツメの声は霞む間も無く飲み込まれて消える。だが退くことを捨てたナツメは、次いで声を張り上げた。

「この店の――」

――そんな懲りぬ、よほどの間抜けや阿呆に見えるナツメへと男は振り返り、そうしてまた距離を縮めて胸倉を掴み上げた。

だがナツメの表情は変わらず、そんな顔に苛立ちを覚える男は吐き捨てる。

「そんなに傷心してる街の中を掻き回して楽しいか？ ああ楽しいだろうな、てめえの所にやそんな危険はねーんだからよ」

見も知らず、また自身に襲い掛からぬ危険はただの娯楽であると、言葉は意味を孕んでいた。

「――傷心、だと……？」

そうして彼も——男の台詞に、心電図の波が跳ねる様に心が弾けた。

ナツメは吹っ切れたように、その口は鋭く滑らかに言葉を打ち放ち始めた。

「野次馬心ばかりが遅しく、灼熱の中泣き喚き助けを呼んでいる者もただ興味半分に眺めている人間までもが傷心とのたまるか」

「なんつ、だとオツ！」

癢に障る。口の減らぬナツメに男は大きく腕を振り上げると、

「殴るのならば殴ればいい。だがそれで貴様の心は晴れるのか。ただの同情すらない周りに迷惑を掛けぬようこの場を離れる貴様が、ただ俺を殴るだけでその気が晴れるというのなら好きにしろ」

自分の思想や理念を押し付けるようなことは酷く見苦しい。だがこれだけは——何もせずに悲劇を語る人間ばかりは、どうにも我慢の限界であった。

だからナツメは捲くし立てる。簡潔に、どんな結果になろうとも口を滑らせると——案の定、男の拳は綺麗なほど真っ直ぐ、ナツメの鼻筋を撃ち抜いて、

「爆発時刻は午前六時少し前。店は道具屋を営んでいて、だが少し前から非合法の薬を取り扱っていた。警察に伝えた情報だが——
——そこまで言うなら、なんとかして見やがれ！」

ナツメは垂れる鼻血を拭いながら、また背を向けてリヤカーへと向かう男を一瞥し、

「ご協力ありがとうございます」

深く一礼してから、彼もまた同じように背を向けて歩き出す。そうして意識が緩むと同時に、掌に嫌に鋭い染みるような痛みが走って、

「——全く。無茶と言う言葉以外、掛けられませんかね」

ほら、手を出してくださいましと、いつの間にか隣に現れたエリック・ジェーンはどこから拾ってきたのか、消毒液と包帯を手にしていた。

「ですが、私の目は狂^{わたくし}っては居なかったようすわ」

消毒液に洗むナツメの顔を見ながら、その顔に対してか、今後を想像してか、エリックは何かに対して楽しそうに微笑んだ。

一日が始まったばかりである青空の下——事件の齒車は錆びた音を立てて廻り始める。

1 — 平穩の中の不穩 —

——サウスシティ
南地区第三区画。○九時五四分現在——

「よ、元気してたか？ 天下の便利屋アキラさんよお」

肩を貸す反政府組織の仮拠点——寂れたアパートの一室——から
抜け出し、持て余した資金で適当な店に入り朝食を済ましているア
キラは、図々しく隣の席に座り、自身よりも少しばかり値の張った
定食を頼む男を一瞥した。

サウスシティ
南地区は治安が悪い。それ故に——半ば違法的に——仕入れる品
物は質が良く、治安が悪い故に防犯対策の整った店が多いソコは彼
等にとって居心地が良かった。

中央で栽培される野菜や肉は破格の値段で横流しされる。そんな
事が起こるのは、中央からの支給が酷く雑なモノであるためであっ
たが、そのお陰で彼等は割合上等な食事にありつけている。

「羽振りがいいじゃねーか三嶋さんよお。お前こそ儲かってんだろ
？」

目の前のカウンターに並ぶ主食、副食の皿を先に平らげ、ぬるい
水が注がれたコップを空にしてから彼は言った。

そこでようやく生姜焼き定食がやってきた三嶋は、割り箸を軽快
な音を鳴らして割ってから、軽く肉を口の中に放り「いやいや」と
首を振る。

天井の大きなプロペラがやかましく廻るお陰で涼しい店内には、朝故に然程人は居ないものの、時が満ちればやがて人でごった返す。カウンター奥に居る店主は忙しそうに、その下準備を続けていた。

「お前が今回の仕事を成功させてくれたお陰だよ」

アキラと三嶋の関係は大体ギブアンドテイクで成り立っている。説明は簡単で、三嶋があらゆる仕事を受け付け、必要なときは雇用主の信用担保代わりに捕らわれ、必要なときは道を作り、また必要なときは共闘する。

アキラはただ三嶋によって敷かれた道を通り走り、目的を奪還、もしくは撃破すれば良いだけの話である。

だが今回、と言われても最近は反政府組織から頼まれる戦闘しとばかりで、三嶋からは仕事などは受けていない。最も、全ては三嶋が反政府組織から受けた仕事で、アキラへと廻って来ているのかも知れないが……。

だから、アキラはまたコイツは奇天烈な事をいうもんだな、などと眉間に皺を寄せながら睨んでいると、彼は軽く笑いながら、「ほら、病院の——っておい！」

三嶋が箸の手を止めた途端に、アキラの腕はまるで一筋の閃光の様に素早く狡猾に、だが丁寧に精密な動きで一枚の肉を奪い去って行く。瞬く間に口の中の深淵に飲み込まれた肉の切れ端を恨めしげな目で睨みながら、三嶋は仕方なく続けた。

「ほら、中央の病院にいったらあ？ アレだよ、ソレ」

「ああ」アキラは納得したように頷いて、「でも、高々あの程度であの金額か？ 要らねえっつーわけじゃねえけど」

「珍しく細かいことで。まあ今回は侵入した際に出てくる障害よりも、助け出す目標の方が大切で、金額はそれに相応するモンだつてことよ」

目標が口を割つていた場合は殺しても構わないと言っていたが——
プライドの高い彼をわざと挑発し、最初から生きたまま奪還させるつもりであったことが、三嶋のその台詞によって理解できた。

アキラはそんな事に、小さく舌打ちをする。舐められたものだと溜息を吐きながら、三嶋の食事を眺めていた。

三嶋は相応の金額だと言ったが——その実、報酬は雇用主、つまりテロ屋から倍以上受け取っているのだが、中央への侵入と病院への侵入のリスク代、それとその他様々なリスク代や雑費を差引いて彼の分け前となっている。

その金額は五分以上なのだが——そもその報酬の大きいお陰でアキラは気づかない。

内心ヒヤヒヤしていた三嶋はそれでほっとして、それから一気に食事を終わらせた。

「アツキラくん。お勘定頼むよ」

——満腹故に機嫌の良い彼は冗談交じりの声で言い、得意気な顔で三嶋の手がアキラの肩に触れた瞬間、彼の顔面に拳がめり込

んだ。

「払う金がねえンなら全部吐き出しな」

カウンターの奥から予測不可能な速度で客席へ繰り出される拳は、浮ついた三嶋の顔を極端なまでに崩壊させる。渋く鈍く低い声は彼の心に突き刺さり、三嶋は涙を目に浮かべながら「冗談です」と土下座をする羽目となった。

自業自得だとアキラは笑いながら吐き捨てて、一足先に彼は店を出る。出した金額で適当に料理を頼むので、彼の勘定は既に済んでいるのだ。

——眩しく熱い日差しに出ると、彼はまくっていたシャツの腕を戻す。

常ならば鬱陶しいくらい人が通っている道は、今日は特別通行量が少なかった。店のサッシの下の屋根、日陰へと退いたアキラは、それから直ぐに出てきた三嶋にソレを聞いた。

「あ？ ああ、今日は配給の日だからな」

配給日——それは、政府から一定の支給を受けられる日である。一週間に一度、それは存在し、支給されるのは医療薬に食料、栄養剤などなど。どれも切り詰めれば一週間は何とか持つ量。

アキラ達のように、力も持たず貧民の貧民たるを貫く民は、ソレにすぎなければ生きていけない。この世の大半は弱肉強食であるのだが、政府の恩恵があるために絶対弱者が生きながらえているのだ。

だが――。

「最近、妙に配給受けてる奴多くねえか？」

一ヶ月、二ヶ月前よりその受給者は増えている気がしてならない。少なくとも一ヶ月、二ヶ月前は配給日などという、生活困窮を極める民にとっての充電日だと気づかされるほど、街の人間は減ったりはしていなかった。

その多くの原因は、必ずその場で支給品の奪い合いや盗難が起るからであった。

「ああ、なんか最近――立会いの警察が、その立場を委員会に明け渡したって話があるが……、お陰で盗人が減ったんじゃないの？ だから安心して誰でも行けるとか」

「そんなもんかねえ」

「少なくともなんかの作用だろ」決め付けるように、興味なさげに三嶋は言くと、それから直ぐに何かを思い出したように笑みを浮かべた。「へへっ、上手くいきゃ爆発テロの瞬間見れっかもしれないねえから見に行くか？」

納得がいかないのか、首をかしげながらも頷く台詞を口にするアキラに、三嶋はふざけるように彼を誘う。

だがアキラは、自分が一体何を知っている前提で連れて行くことしているのか分からなかった。だからただ一言「テロ？」と反芻するように繰り返すと、

「ああ、実は昨夜、いや今朝だったかな。北の、クスリを違法に売りさばいてる店が爆破されてよ。その筋の間では早速噂されてんだよ」

仕事請負人として情報屋ほどあらゆる情報を知り、素早く手に入る彼は、わざと知らぬ情報をさも相手が知っているように言うてから興味を引いてから、詳細を口にする。

「なんで」そしてアキラは思惑通りに聞き返した。

「罪を赦さぬ爆弾魔ってさ」

「なんだそりゃ。ソイツ自身が罪に溺れてるじゃねえか」

「その矛盾さが良いらしいぜ。俺にやちょっとわかんねーけどさっ

大きく伸びをして、三嶋はさっさと日の下、通りの真ん中へと躍り出る。アキラも仕方なしに、長く連れ添っている友人の横へと並び、

「俺あもつとわかんねえ」

面倒そうに、促されるまま配給場所の見学へと赴いた。

——北地区第一区画。——
ノウステンティ
——二時二八分現在——

そこは寂れ、床が軋み、蒸し暑く、薄暗い今にも切れそうなオレ

ンジ色の白熱電球が光源となる店の中。

壁には大型の対戦車ライフルが飾ってある妙な火器取り扱い店であった。

エリック・ジェーンは暑そうに胸をはだけさせ、渡されたうちわで風をそよがせる。中年の店主はソレをじっと、いぶかしそうな瞳で眺めていた。

情報屋——そこがそうであると知らされずとも、なんと無くソレを察して、だが彼女はわざと気づかぬ振りをする。

「——で、その店の背後関係を……、……おいつ」

ふわふわした空気を纏い、話など耳から入れて流すどころか耳に栓でも詰めたように話を聞かぬ男に、ナツメは苛立った様にカウンターを叩いた。

強く高い音は狭い店内に響く。その目の前で起こった大きな音に店主は驚き、飛び退いてから、

「なんだ、居たのか」

「アンタが見ている代物は俺の連れだ。何を見ている」

ナツメは呆れたように首を振ると、店主は冗談だと軽く笑んだ。

そしてまた、カウンターに軽く腕を寄せながら、視線をエリックへと流す。ナツメまた息を吐き——男の顔を力尽くで正面に向けてから、話を始めからしなおした。

「五区で爆発があつたろう。その店がクスリを取り扱っていた。違法のな。アンタならその裏が取れると思ってわざわざ来て見たんだが……どうだ？」

「どうだつて言われてもなあ。時間をくれとしか返せない現状で俺はなんと答えればナツメ様に合格をもらえるんでしょうな」

そうにわざとらしくおどける男は——「そもそも」と、彼はそう付け足すと、先ほどのような緩んだ表情を引き締めてナツメを睨んだ。

「ソイツを調べるのはお前の仕事じゃあないのか。善良な都民をわざわざ危険へと赴かせるのか？」

「桶は桶屋だ。そして——アンタは危険を承知でこの仕事をしている。違つたか？」

そんな男に応じて、ナツメも真剣な眼差しで答えを返す。不敵に笑うと、彼はやれやれだと、肩をすくめた。

「色々あつたようだが、変わらん」

「この程度で変われたら苦労なんかしやしない」

軽口をそれぞれ叩きあいながら、ナツメは財布から万札を五枚差し出し、カウンターに備え付けてあるメモ用紙に自身の連絡先を書き記してから、素っ気無く、

「じゃあ、信頼してますよ」

背を向けて、彼はさつさと店を後にする。エリックは店主に軽く会釈をしてからナツメの後を追い——男はそれを見送ってから、軽く首を振った。

「——ちよつと強気すぎたのではないかしら」

店を出ると途端にエリックは不安げに言葉を漏らした。日差しの下ではしっかりと胸元を閉め、だがうちわで扇ぎっぱなしの彼女は、彼等の関係性をイマイチ理解できていない。

だからナツメは、別にソレを教えてやるわけでもなくただ頷いた。

「長い付き合い、ですから」

そんな風に、深くも無い言葉をわざとらしく意味有り氣に言ってみるのだが、

「——あ」

その直後に彼女はそんな呆けたように声を上げて、そういえば、と言葉を紡ぐ。

「私の記憶が正しければ貴方は今現在、年齢の程は一九の筈ですが」
わたくし

「え、ええ。随分と詳しいですね」

妙な、先ほど話していた内容とは全く別の会話へと話は移行する。どう考えても全く関連性の無い話だが、彼女に何か考えや気づいたことがあるのか——そう考えては見たが、どうせただ思い出し

ただけだろう。

ナツメは驚いたように、またうろたえて頷くと、

「私は一七ですわ。^{わたし}つまり貴方より二つ歳下。貴方が私に対して敬語をお使いになるのは間違いで——つまり、こう、もっと砕けた風にお喋りくださいませし」

つまりタメ口で喋ってくれと彼女は言うのだが——ナツメは、参ったなと頭を掻いた。

確かに年齢ではナツメが上ではあるが、^{キャリア}年季や実力、周囲の評価、人望、その全ては彼女にある。

彼女、エリック・ジーンはいわゆる年下の上司という訳であり——無論、そんな頼みは受け入れられない。

だが、それこそが彼女の命令ならば……。そう考える矢先に、エリックは言葉を付け足した。

「お友達として」

——つまりはプライベートなご関係。

自身の「運」が強いお陰で今まで生きて来られた——等と、言う暇もなくナツメは彼女に激しく興味を持たれてしまったという訳である。

だがまあ——委員会に所属するようになって二年余り、その友好関係は開発地区か開拓村、それと先程の情報屋程度しかない。

だからこの際、人脈を広げてみるかと、ナツメはなんとなく思った。否、思えた。

何故かは分からない。彼女が彼女であるからかもしれないし、ただ単純に、無意識下で彼女に惚れているからかもしれないし、また彼女の美貌に酔っていると言う可能性も無きにしも非ず。

「ええ、ともだち戦友として」

だから——いつかは背中を、命を預けられる仲間になれることを祈って、ナツメは動機はどうであれそんな関係になろうと、手を差し伸べた。

彼女はそれが嬉しかったのか、その整った顔を崩すほどの——それでも美形には変わらないが——笑顔で、その手を両手で握り締めて、首を振った。

「敬語は無し、ですわ」

「あ、ああ……。わかった、これからよろしく」

「ええ、こちらこそ」

そうした直後、ポケットに詰め込んだ高性能多機能最新型無線機けいたいでんわは電子音を鳴らして——慌てて其処から抜いて操作すると、空中に展開される粒子の画面に電話の主の名前が映った。

その連絡は課長からであった。でんわ

手にする支給袋を抱きかかえながら喜ぶ民たちは、平和そうであった。

ソレを見て出るのはそんな陳腐でつまらなく、予想が外れた虚しさ
に徒勞であつたことを痛感させられる感想である。

その区画の公園部分で展開されているそこで、彼等はベンチに座りながらうな垂れていた。

だが三嶋は——アキラはてつきり、委員会の連中を見たら直ぐに手を出すかと思つていた。彼は委員会に何か怨みでもあつたのかと考へていたのだが、理性的に見守る姿を見るに、どうやらそれでもないらしい。

笑顔で、額に汗を浮かばせながら底を突き掛ける支給袋の配布を手伝っている委員を見ながら、三嶋はそうにアキラへと疑問を投げかけた。

「別に、奴は別にどうでもいい。俺はただム力つく野郎をボコつてるだけだからな」

それが仕事にもなっているのだから気が樂である。やはり能力ちからがある者は言つ事が違うな———そう思うが、彼の場合、能力があるうとも無かるうとも、やることは同じだろう。

長年付き合つてきて、彼という男がどんな人間か分かっている三嶋はそう言つてまた、トラックが鎮座する配給場所へと視線を向け

ると、そこは丁度配給が終えた所であつた。

「ま、平穩が一番っちゃ一番だな。これからどうする?」

「どつつて言われても——」

そもそも予定を立てることも提案を出すことも、彼には向いていない。行き当たりばったりが信条というか、生き方そのものである彼はそんな質問に困っていると——こちらに気づいた委員が、一度トラックの中を見てから、困つたような顔をしてアキラ達へと歩み寄つてきた。

三嶋はそれに、警戒しながら腰の拳銃に手を伸ばし、アキラは面倒そうに立ち上がると、すぐ前まで来た男は「すまない」と突然謝つてきて、

「もう支給品が底を突いてしまったんだ」

「ああ——なるほどね。ま、気にすんなつて、俺たちは支給品は要らない人間だから」

丁寧な男の対応に、三嶋はすぐさま拳銃から手を離して、気楽に話す。気にするなど、存外に気の良い男に、マシな委員も居るものだとは彼は物珍しく笑顔で接していた。

三嶋が吞気にそうする間——アキラは不意に、視界に入れる。

地面に倒れる、中身が散乱した支給袋を抱いたままの貧民たちを。寝ている——などとは、この突き刺すような日差しの下では

考えられない。明らかに、病か、疲労か。そんなもののだが……、そんな事が複数人同時に、起こりうるものだろうか。

起こるだろう。そう思ったのだが——気がつくとアキラはベ
ンチから飛び出して、一番近くの、まだ若い青年らしき男を抱き起
こしていた。

「おい、大丈夫か？」

呼吸はある、が——身体機能が異常であつた。

筋肉は小刻みに痙攣し、体温は急激に下がって死体さながら。顔
は青ざめ、生きているのが逆に不思議な症状。アキラは自分にはど
うにも出来ないと思座に判断して、すぐに——”優しいおじさ
ん”を呼ぼうと立ち上がると、

「ああ、安心して。ソイツらは、大丈夫だから」

「ああ？」

——抱き上げた青年は、脇から配給役員によって掠め取られ、
彼はそうして重そうに青年を背負う。だが慣れた風と、そう見て取
れる足取りで素早く、青年はトラックへと乗せられていった。

そして気がつくと、屈むアキラの背後には先ほどの委員が立っ
て、

「病院へ、連れて行って」

優しいだろうと強調するように言う間に、アキラは立ち上がり、

その腕を大きく後ろへと引くと——その拳を反発させて、腕だけを一気に加速する。

「あげ——」

一瞬の間も言葉の続きを口にする事も赦されない男は、その直後にアキラの拳を顔面に突き刺されて、またアキラはその打撃が十分に顔面を陥没させた事を確認して——男を力いっぱい、能力と併用して力の向く方向へと吹き飛ばした。

鈍い衝撃が手に伝わる。凄まじい衝撃波が、拳が着弾すると共に波状に広がった。

強く握り締めた拳が伸びきる頃には、プロペラのように回転して飛んだ男は籠ったような音を立てて地面へと叩きつけられる。

砂煙が舞った。それを遠めに眺める役員の男たちが硬直^{かた}まる。三嶋は何事かと一瞬思考を停止して——アキラは大きく息を吸った。

「おい、何やってんだよアキラ！」

「ム力ついたから殴った。悪イか」

「悪いに決まってるだろっ！　なんでわざわざ——」

問題事を。そう愚痴垂れる暇も無く、役員たちは物騒な飛道具^{ていどうぐ}を構えると、三嶋がそれを認識すると同時に彼等は引き金を引いた。

乾いた音を響かせる発砲音は、真っ直ぐ弾丸をアキラへと迫らせ

るが——銃弾は、その目的を果たせずに、見えぬ力にふわりと、一瞬全ての力を吸い取られるように空中で停止した。そしてその直後に弾丸は、向かってきた速度を上回る速さで同じ軌道を帰って行く。

「があっ!？」

弾は——発砲したそれぞれの胸へと被弾することで、本来の目的を果たすことが出来た。

男たちはうめきながら胸を押さえ、弱々しく拳銃を手から落として、情けなく——先ほど運んだ貧民よろしく地面にへばりついて行く。

それを興味なさげに見てから、アキラは視線を落とした。

「多分、能力に対しての反応が強い奴だけに発病するクスリが入ってたんだろっよ」

青年が撒き散らした食べかけのパンを拾い上げて、アキラは齒を食いしばる。嘘だと、三嶋は疑うが——先ほど男が口にした『病院に連れて行く』という言葉が、ソレを確信へと変えようとする。

「まさか病院って……」

「第五隔離病棟^{第五隔離病棟}。犯罪者と研究実験体^{サンプル}が収容される所だな、多分——治安を維持する? ふざけやがって。こいつ等が一番治安を乱してるくせによおっ!」

外側へと反発する力を、逆方向へ——内側へと向けると、圧倒する握力が水分の無いパンを握りつぶさせた。

パンは四散し、三嶋は勿体無えなと踏み潰しながら、

「これからどうする？」

三嶋はまた、平穏だと陳腐に眺めていたはずの、平和”だった”公園を眺めて、同じ問いをした。

「決まってるだろ」

だが答えまでは同じになるとは限らない。先ほどまでとは、数分前とは心境も状況も全く異なる彼は、吐き捨てるように、憎悪を湧きたてるように、口を開いた。

「本部に殴り込む」

昨日の今日。一昨日の今日。最近は何かと——委員会が原因で頭に血が上る。

アキラは苛つきながら拳を握り締めて、トラックへと向かう三嶋の後を追っていった。

2 — 不穩の中の疑惑 —

——サウスシティ
南地区第三区画。——一時三五分現在——

アキラ達がトラックを奪い中央地区^{セントラル}へと向かったのを見計らって、
一人の男はその公園へと現れた。

地面に伏せる役員たち。胸に寸分の狂いも無く突き刺さった銃弾
は、彼が登場した頃には既に心臓の活動を停止させていた。

血で、汗で、涙で地面が濡れて固まる。その男は、だがそれでも
何も感じないように、ただ殴られて気絶しただけの委員へと歩み寄
った。

「誰だか知らんが……、勝手なことをしてくれ。それにコイツは
無関係だ——馬鹿が、俺は……知らんぞ」

鼻が折れ、そこから大量に流れ出る鼻血はやがて止まり濃い赤色、
ほぼ黒に近い色に染まって固形化する。

半眼に開く瞳は白く剥き、口から泡を吐く彼は当分目を覚ますこ
とは無いだろう。どちらにしろ命に別状が無いことは良いのだが…
…。

倒れる男の腰に付くホルスターのボタンを開け、拳銃を抜き、そ
れから大きく息を吐いた。

「反政府……か。馬鹿共が」

彼は思う。反政府組織はただ漠然と頭にくる権力者を暴力で黙らせているだけではないのかと。力を示し、相手を怯えさせているだけではないのかだと。――ただ反逆するだけで、仮に国家を転覆できた後の事は、国を自分の力でどうしたいのか、考えていないのではないかと。

要らぬ事、邪魔な事、稚拙な事。目に余る行動しかないそれに彼は苛立ちながら強く拳銃を握ると――その拳銃は、突然極彩色に輝き始めた。

やがてソレは光によって形も認識できなくなる。ソレを強く握り続ける彼の掌の中では、拳銃の形は鈍く冷たい温度のまま、手の中に納まるような楕円形の球体へと変化し始めて……。

「だが、まあ――俺には関係ない」

好きなようにやらせてもらう。男は心の中で呟きながら、手の中の”手榴弾”を強く握り直してその場を去って行った。

セントラル
――中央地区第二区画。――四時一八分現在――

「遅い！ 一体何をしているんだ、エリックが付いておきながら……」

課長室へ急ぐように飛び入った矢先に、見知らぬ男は声を荒げて怒鳴り散らしていた。

「すみません」

「遅れましたわ」

ナツメとエリックはそれぞれ言葉を発し、それから軽く息を付く男の隣へと早足で迫る。

そうしてから、三人が揃ったところを見て、課長は煙草の火をすりつぶすように消してから、その三人を流し見てから、口を開いた。

「忙しいところ呼び出してすまない諸君。だが感謝して欲しい。これからはもっと忙しくなる」

課長が得意気に、そう鼻を鳴らすが――その場に、一を聞いて十を知る賢き者は存在せず。

一体彼の言葉が何を意図して放たれているのか、彼等は疑問に思うことすらなく、ただ来るであろう課長の補足説明に対して耳を傾ける準備段階へと踏み込んでいた。

課長はそんな、熱心なのかやる気がないのかイマイチ判別の付かない彼等に軽く肩をすくめてから、仕方なく言葉を続ける。

「どこから漏れたのか、メディアへこのような情報が」

課長は嫌々、机の引き出しから数枚の原稿用紙を引っ張りだした。端に立つ男は一步踏み込み、彼からソレを受け取って視線を落とす。

男がそれを読み、理解し、驚き言葉を失うその間に、課長は台詞を追加した。

「ソレは個人的な関係を築いた記者に譲ってもらったが——その出所を探してほしい。可及的速やかに」

男が^{でたらめ}出鱈目な文章に憤慨し、顔を紅く染め上げる間に、ナツメは思わず反論する。

「待って下さい。その個人的な関係を築いた記者は一体……？」

まさか殺すはずも無いだろう。有力な情報を握っていた存在にはまだ価値がある。殺すことに意味が無いどころか、こちら側が不利になることは必至である。

この原稿が新聞社のものか雑誌社のものかは分からないが、少なくとも裏を抑えていない状態で相手を怒らせることは酷く愚かなのだ。現行の内容は分からずとも、男の奮える腕でそれは判断できた。

「仲間が来て連れて行かれた。捕まえる理由はあれど権利が無いという事は悲しいことだな」

「それではもしかすると、その原稿を奪還しに潜入してくると言う可能性も無きにしも非ずでは」

「こちらは腐つても政府だ。わざわざハイリスクを犯すことはないだろうが……少なくとも、向こうの警備はより厳しいものとなるだろう」

そこへ潜入する事が出来るだろうと、彼はナツメら呼び寄せた。なぜよりもよってまた自分なのだろうと息を吐くと、

「今までの任務^{しゅむ}は、私の考えが正しければ、引き継がなくとも解決

「こいつぁ酷エ！ なんなんだよこれア……なんでこんな」

男は課長の言葉を遮り——片手で頭を抱えながら俯き、誰に言うでもなく撒く訳にもいかない怒りを言葉に変換して呟きながら、もう片手で隣のナツメへと原稿を差し出した。

なんだろうか、一体どんな内容が彼を憤慨させているのかと視線をソレに移すと、待ちきれないのかエリックは腕に抱きつくようにして飛びかかり、同じように原稿を真剣な眼差しで読み始める。

「えつと……」

——数枚の原稿用紙は、エリック・ジェーンの読む速さでページを変えられる。故にナツメは、半分ほど読んだ所ですぐに次の原稿用紙を読む羽目となるのだが……。

その内容はそんな雑な読みまわしでも理解できるほど酷かった。

「……捏造、ですか？」

簡単に説明すると——政府が民から金を”公的”に搾取するために危ない薬物を売人へと渡していると言うもの。

勿論そんな事実はないので課長は、「嘆かわしい事にな」と返して頭を掻いた。伏し目がちに、それから腕につめを立てて指を食い込ませるエリックは静かに怒りを口にする。

「薬物売買のどこが公的なの！？」

課長に喰らい付くエリックを抑えながら、ナツメは返す。

「記者なのに表現が間違ってるのは確かにいけませんね」

「表現どころか内容だろ、馬鹿か貴様等！ 馬鹿だろ貴様等ッ！」

「何故二回言う」

課長は騒がしい準喧騒の中で呟き、溜息をついて、「静まれ馬鹿共」と語気を荒げて言うのだが、

「俺は馬鹿じゃねえから黙りませんよ課長」

「そんな事だから馬鹿に見られるのだぞ保孝^{やすたか}」

得意気に鼻を鳴らす男——保孝と呼ばれた彼に、呆れを通り越して怒りすら感じ始めた課長は毒を含む言い方で返す。

その時ナツメは、彼の名を初めて聞いたのだが——その名を脳に刻む瞬間、なにやらデジャヴを感じた。

前にも聴いた事があるような名前。そんな馬鹿にされてムスツとする膨れ面は、どこかで見た覚えがあるかもしれない。

ナツメは思いながら彼の顔を見ると、保孝はソレに気づいて、身体ごと彼を向いた。

「ああん？ なんか用があるのか？ 俺と今更仲良くしたいってわけか？」

苛立つた様子は無く、安易に笑顔を向けて友好的に手を広げる。
この行為はつい先ほど、街の人間にされたのだが、その直後に鉋を
振り下ろされたのであまり良い印象はない。勿論、保孝は知らない
ので、警戒するナツメを不思議だと見ていたのだが。

「い、いや……ただ、どこかで見たことがあるような気がしないで
もなくて」

「俺を？」

自分を指差しながら疑問を浮かべる保孝に、ナツメは何事も無い
ように頷く。そもそも、わざわざこんな事を口にしても「ああそう
なんだ」と困ったような笑みで返されるだけなのは明白である。

だと言うのに彼は突然、その眉間に皺を寄せ、歯を食いしばって
ナツメの胸倉を掴み上げた。

予想だにしない状況。一瞬にして緊迫に包まれる状況の中、エリ
ックは驚いたようにソレを見守り、課長は早く話を進めたそうに煙
草に火を付け始めている。

若干、本当に緊迫しているのかと疑いたくなる一方で、思考は保
孝の怒声で僅かな間停止した。

「お前、俺を忘れたっていうのかっ!？」

唾が顔に降り注ぐ。それを困った表情で拭いながらナツメは肯定
の意を言葉にして告げると、

「俺だよ、保孝……いすみやすたか出水保孝だッ! 覚えてないのか!？」

出水……出水……。ナツメはその名前を頭の中で幾度とも無く反芻し、そして記憶の検索システムを起動させ、高速度で思い出の海を掻き分けていき——それは、この都市にやってくる前まで遡ることであろうと発見することが出来た。

力強く言い切る割に、不安げに聞き返す彼を、ナツメは改めて見直した。

常によつていそうな眉間に、太い眉は鋭く上を向く。瞳の白が多いその目は、それ故に人相が悪くなる。短く刈り上げられた髪は当たり前前に逆立つて——。

「……ああ、お前が。久しぶりタカヤス」

「保孝^{ヤスタカ}だつってんだろうがよ……っ！　つかさあ、忘れんなよ。東京では一番付き合いが長いはずだろ？」

「その台詞は正確ではないな。北開発地区^{むいこう}では付き合いは長かったが、東京ではおおよそ半年前に再開したばかりじゃないか」

そもそも北地区^{きたち}開発地域でも、深いような浅い付き合いだった。ナツメは思い出してから、一步遠ざかる。

だからといって、嫌いだとか近づきたくないと言う訳ではない。存在を忘れていたことに、深層下で申し訳ないと思っている故の行動である。

「でもま、顔見知りだ。仲良く行こうじゃねーか。約束通り強くなってるみたいだしな？」

しかしあまり気にした様子も無く、出水は台詞の通り関係を近づかせようと手を差し伸べた。

ナツメはそんな彼に気を許し、同じように手を伸ばす。共に手を握り合い、視線を交差させ——それだけでも妙な信頼感が芽生えそうなのは、やはり同郷の友人だと言う事が大きいのだろう。

それから話が一段落した風の其処を見た課長は、煙草の火を消しながら一つ咳払いをして見せて、彼等の注目を得てから、「話は済んだか？」と額に脈動を感じていそうな表情で問う。

気まずそうに頷くそれを見て、課長は悪戯に笑ってから——
——新たな仕事を告げる。

「この原稿はこちらにあっても、その情報^{ネタ}を持つ人間は向こうにある。だが何故——公にもなっていないクスリ^{クサリ}の存在を、あたかも周りが知っている体で文章に起こしているのか、という所だが……」

「キナ臭^{キナクサ}いつてえ、訳ですか」

言わずとも分かる胡散臭さ。薬物売買は原則的に禁止され、行われていれば摘発対象である。故に外から中に入れる事も難しく、栽培するには圧倒的に厳しいこの環境では、そんな事案が上がる事がそもそも無い。

この——肥沃した大地の中央地区^{セントラル}を除けば……。

「なんでも最近、雑誌は売れても新聞は売れてないそうだからな……」

…。雑誌社も知らない情報で、しかも新鮮なニュースとなれば売れ行きはうなぎ上りだろう」

その台詞に頷く三人を見て、課長は軽く息を吐きながら続けた。

「この都市にある新聞社は一社。ここの第一区画の商業地区にある――武装は整えておけ。それと、車を用意させておく」

そんな課長の言葉に、三人は背筋を伸ばしてから深く頭を下げる。新たな任務を言い渡されたこともあるが、今回の仕事は随分とやりがいがありそうだから、気合が入るのだ。

調べていた爆破^{テロ}事件は、恐らく偶然的に薬物売買をしていた店に当たったのではないだろう。恐らく自覚的に、そしてまた――確信的に。

だから元を抑えれば爆破も止むだろう。犯人は、自分が正しいと思っているから自首はしてこないだろうが、徐々に近づけばいいだけの話。

ナツメはそう考えながら、一番先に頭を上げて、誰よりも早くその場を後にした。

「――ま、今更新聞つつーのもなあ。こんな時代に、明日には紙くずになるモンを毎日金出して買えつつうのも酷な話だわな」

ビルの下腹部辺りにある更衣室は、先ほどの課長室程広い。そして色々な事を防止のため、男女の更衣室はそれぞれ離れた位置にあ

った。

そこでは支給品——防弾スーツと拳銃が一丁——の詰まったロッカーが壁ぎわに立ち並んでいる。ロッカーは簡易な指紋認証ロックで、一度ロックを解除してしまえば、その指紋はまた登録しなおさなければならぬ。

そんなところで二人は着替え、その中で出水は愚痴垂れるように口にした。

繊維強化合成ゴムで改良されたラバースーツを、薄いインナーシヤツの上に癒着してしまうと錯覚するほどにぴっちりと着て、またナツメは面倒そうに、

「昔から続いていたらしいからな。電子媒体でも紙媒体でも……。最も——本土が二割程度しか機能して無いこんな世の中じゃ、そんなモノも不要だろうが」

指にたるむラバースーツを引っ張り、指の股にくつつける。それから全身を包むそれに不備が無いか確認したあと、背中 của チャックを閉め始めた。

そうする一方で、出水の準備は既に済んでおり、後は目の前の口ッカーから自動拳銃を引き抜いて弾倉を確認するだけである。マガジン

強化ゴムで作られるこの黒いラバースーツは、防弾チョッキ以上の防弾性能がある。弾丸を貫通させず、肌を傷つけない。強い衝撃で受けた瞬間、その箇所が硬化する合成プラスチックを使用しているのだ。

「ったく、またゴム弾かよ」

自動拳銃はコルト・ガバメント。出水は弾頭にゴムが詰め込まれている弾——ゴム弾——の入った弾倉^{マガジン}を、腰に装備する弾倉帯^{マガジンベルト}に数個詰め込み、そのベルトに拳銃を挟んでナツメの準備を待った。

ナツメもまた、私用武器を支給武器の代わりにロッカーに詰め込み、そして今まで着ていた作業服の様な制服を素早く、ラバーズツの上から着直し、雑にロッカーを閉める。

ガチャンと大きな音が鳴り、自動的に施錠される音が響いた。彼等はそれを確認して、更衣室を後にすると——。

「遅い、ですわっ！」

事務職用のスーツではなく、ナツメ達と同じ作業服を着る彼女は、腰に手をあてお冠であった。女性の着替えは遅いと聞いたが——
——とんだデマだなど、ナツメは軽く謝罪をして、共に外へと向かう。

その間に、エリックは少し迷いながら、結局好奇心に負けて、彼等の関係を聞いていた。

——^{セントラル}中央地区第一区画。——一五時。二分現在——

夜ならば、ラバーズスーツ一枚でも保温効果と黒き生地故の隠密性のお陰で十分であったが、この、ただ立っているだけでも汗が滴る日差しの中、作業服の他に余計体温を逃がさないスーツを着ることにナツメは疑問を抱いていた。

ハイネックシャツの様に、襟から黒いソレは伸びて、また袖から伸びる手は肌色をしていない。それだけで十分に怪しいのだから、防弾スーツだけで良いのではないかと思うのだが……。

「ま、個人の能力によつては弾丸が避けられっからな。俺は俺で、コイツがある事が嬉しいんだがな」

新聞社の前に車は止まる。そこは第一区画の半分をクレーターに変える爆発があつた場所より離れた所。

居住区は全て無に帰し、残つたのは新聞社や雑誌社、それと刷版会社など需要の低い企業ばかりの商業地区である。

常ならば一人であろう警備員は五人に増えて、入り口部分を警戒していた。

それから出水は開けていた窓を閉め、ナツメは早速行動を開始しようとしてドアに手をかけると、出水はそれを制す。何故だと、口にしようとする瞬間——後部座席で、窓を隔てているのにも関わらずエリックはその拳銃を警備員へと向けていて……。

次の瞬間、その銃口からは派手な火花が散つた。

乾いた破裂音が狭い車内でやかましく響く。鼓膜が破れてしまうそんな騒音は、だがしかし、一度、一発目で途切れた後再びすぐに連射されるが、きっかりしつかり、それは五回で終える。

酷い硝煙の臭いが鼻に障つた。緊張のせいで気でも狂つてしまつたのかと言つ疑念が脳裏に過ぎる。だがそれでも、割れた窓で怪我

をしていないか一応心配をして後ろを振り返ると———だかし
し、そこはガラスの破片など飛び散ってなどはいなかった。

不思議なことに———ただ車内をかき乱したのは、拳銃からは
じき出された薬莢のみであつたのだ。

締め切られた窓は、しっかりと硝煙の臭いを車内に留めていた。
弾き出された弾丸は一体どここの亜空間へと飲み込まれてしまつたの
だろうか？

拳銃を腰に差し直す彼女は嬉しそうに微笑み———全てを理解
できていないナツメへと、簡単に説明をする。

「^{わたくし}私の能力ですの。^{スキャン}能力名は透視なのですが、それでは無粋なので
^{ラフリー}『恋する乙女』と」

———視界補助系能力『^{ラフリー}恋する乙女』は、目に映るもの、いわ
ゆる視界内の物質、肉体を任意で透過して見る事が出来る。

そしてその能力発動時には、”透視された障害物は、彼女の手に
よって打ち出された物質に限り、通り抜けさせることが出来る”。
最も、この能力は応用技だと、彼女は簡単に説明した。

「恋は盲目って言葉は、よく言つたものですわ」

戦闘に恋をしているとは———やはり変人には間違いが無かつ
た。

ナツメは意外過ぎる一面にため息を付きながら、今度こそ止めら
れることなくドアを開け、それから警備員が皆地面に伏している玄

関へと急いだ。

車内からの発砲故に減音効果は絶大で、お陰で彼らの存在は気付かれていない。

「しかし、まだ確定もしていないのに殴り込みとは……」

駆け足で彼等は迫り——警備員達を簡単に纏め上げながらナツメが弱気に呟いた。

「九分九厘ビンゴですわ。むしろ間違っている可能性のほうが低いのです」

「九分九厘つても九・九パーセントじゃ——」

「うつせえよ！ グチグチ細かく言いやがって。九・九パーセント？ 十回に一回当たる割合だろ。上等じゃねーか、侮んなよナツメエ！」

得意げに言い聞かせるエリックに、どこか不安が募るナツメ。それに苛つき、怒鳴り散らす出水であったが、それらにはどことなく妙に一体感がある雰囲気くつきが漂っていた。

だが、——その瞬間、その全てを一瞬にして消し去る凄まじい衝撃波が彼等の全身を蹴った。

それと同時に、頭上で凄まじい爆発音が鳴り響く。大気が激しく振動する。轟音が全ての音を掻き消して——何事かと、そう思う暇も無く見上げる空には、

「……ッ!？」

屋上よりやや下の階から、四方の壁を突き破る爆炎が躍り出た。昼の空に上がる濁った暗黒色の煙の中でソレは蠢き——白昼の空に煌めくのは、ガラスの破片。

その奥からは、巨大な人造石片コンクリートが降り注いで……。

「リジエクシヨン・ワールド
反重力区域」

声高らかに出水が腕を空へと振り上げると——何よりも早く、地上の生物を絶命させようとの意思を持つかのように、刃を鋭く振り落とすガラスは、彼の拳の、遙か上空でその動きは止まった。

その——見えぬ力の領域は、空間を僅かに歪めて見せる。まるで水の中に浮かばせた油のように不安定に揺らめくそこには、続々と崩落物が——酷く緩慢に——飲み込まれるようにして、音もなく、全ての勢いを殺されていた。

その後も、周囲へと落ちて碎ける人造石はあれど、ナツメたちに害を及ぼすソレ等は皆その上空で動きを止めている。

その間に、ナツメとエリックは急いで建物内に警備員を投げ入れて、共にその中へと避難した。出水はそれを確認してから、自身も中へと入り込み、能力を解除する。

直後、崩落した壁の一部はまるまる地面へと叩きつけられた。凄まじい地響きに建物が大きく揺れて、腹の奥底に響くような衝撃は轟音と共に、やがては薄れて行く。

その中で一同は、冷静になったその時に、入り口を塞がれてしまったことに気がついた。

が、彼等にとってそう問題ではない。故に心を落ち着かせる為に、それぞれ大きく息を吸う。

「爆破つて……何かアブない物でも作っていたのかあ？」

能力の使用により僅かに息が上がる出水は冗談めかしく呟いてから、悲鳴を上げて受付の下にうずくまる受付嬢へと声を荒げた。

「おい、この一時間以内で不審者は入ってこなかったかッ!？」

「いつ!」

だが声を殺して悲鳴を上げ、怯える彼女等にはそもそも会話が出来るはずが無い。

爆発の影響か、電気が消えて薄暗いそこで大きく息を吐いてから、上へ行くかと、提案するナツメは——受付の隣にある通路の奥から足音を聞いた。

決して穏やかではない、慌てて走り、転んで、立ち上がる動作音。激しく乱れる呼吸音。ナツメは能力で聴力を上げてから先頭に立ち、拳銃をそこへ向けると、やがてそれは彼等の前へと現れた。

乱れた髪に、所々が血に濡れる白いワイシャツ。体力の限界なのか、通路から出てきてナツメを発見するなり転んで、彼は手を伸ばしていた。

「た、助けてくれ……っ!」

その姿は正に、神に助けを求める信者の様であった。故にナツメは、彼へと向けた銃口を——まだ残る一人の男へと差し向ける。未だに聞こえる、忍ぶような足音は、そうして通路の闇から再び姿を現わした。

「……ふうむ。誰だか知らんが、邪魔をする気か？」

完全な闇から、薄暗いロビーへと出で立つ彼は、ナツメ達を見るなり冷めた声を響かせた。

エリックが見る——遙か頭上の階では、スプリンクラーが発動しているも、凄惨な状況は覆ることも無く、火の手はより激しいものとなる。

ナツメは恐怖に腰を抜かす男ではなく、余裕そうに立ち尽くすソレに銃を向けたまま、

「分からないな。俺がどう行動すればお前の邪魔になるのか」

状況を何一つ理解できない、自分の低能加減にいい加減腹が立つてくる。ストレスの為に後頭部に染みるような鋭い痛みが走るのを感じながら、彼は男の出方を伺った。

「俺の目の前に存在している、という事だが——教えてやったが、失せてくれるのか？」

「さあ。恐らく貴様が考えている通りだ」

「なら——沈黙しろ」

男は静かな怒気を声に孕ませ、そうして言い切りながら手の中の手榴弾を投擲する。

暗闇の中、その存在を認識できたナツメだが、距離的にも撃ち抜くわけにもいかない代物に一瞬、行動を迷うと——ナツメを力尽くで押しのけた出水は、前方に手を差し向けて叫ぶ。

「グラビティ・リジョン
加重力領域ツ！」

その瞬間、出水の能力範囲に捕まった手榴弾は勢い良く地面に叩きつけられて——その身を突き破る爆炎を撒き散らし、巨大な火柱を立てた。

割合そう接近していなかった手榴弾は、腰を抜かす男の近場で爆ぜて——凄まじい爆破による衝撃波で、効果範囲内にいる男は範囲外にまで吹き飛び、彼はこれ幸いと、そのまま壁際まで転がった。

飛び散り負傷させるはずだった破片は、出水の能力によって押しつぶされている。故に被害は、床を軽く破壊する程度であったが——男は全身に及ぶ軽い火傷に、泣くように呻^{うめ}いていた。

「能力者……、貴様等まさか——委員会か？」

この闇の中で彼の存在を事細かく認識できているのはナツメだけであるが、歴戦の勇士であるエリック、出水両名は五感で知覚せずとも、経験で男の所作を全て理解できていた。

そして委員会の能力者は皆、戦闘技術を訓練されている。故に立ち振る舞い、その姿勢や気配だけでも、ある程度以上の能力者や戦闘員ならばすぐにその独特な雰囲気で気づくことが出来る。委員会を知らずとも、他とは明らかな違いで違和感を覚えるのだ。

故に——この男は経験は少ないと、彼等は即座に理解できた。

「さあ？　どっちにしろ、言うと思うか？　この状況で——まあ、言った方が正しいんだろうけどな」

ナツメに成り代わり先頭に立つ出水は、半ば答えを言っているように舌をスラスラと滑らせる。能力は発動したまま故に——呼
吸の乱れを抑えるため、彼の息遣いは酷く緩慢になっていた。

「なるほど、ならば争う必要も無いだろう」

男に対しての牽制を目論む加重力領域は、僅かに揺らいだ。それが疲労のためか、男の台詞のためか、定かではない。

「何故だ？」

ナツメが、彼が求めるままに疑問すると、男は少しばかり齒を軋ませてから口を開いた。

「知っていて来たのだろう？　貴様等は。ここが薬物を売人に渡して売り捌かせている事を」

「証拠は？」

「俺が全て爆破したが——屋上に栽培されているだろうな。ビ

二ツルハウスの中で」

ならば——可及的速やかに屋上へ向かい、その物的証拠を保護しなければならぬだろう。男の言葉が正しければ、の話だが。最も、疑う余地も無いだろう。

これで新聞社の思惑——自社で話題を作り、新聞の売り上げを伸ばす——が潰れ、また摘発対象となった事で今回の仕事は終了の兆しを見せて……。

また、ナツメが元々請け負っていた爆破テロ事件の犯人も見つかった。

——まるで図られたように都合の良い展開である。わざわざ気の滅入る仕事を犯人が片付けてくれたのだ。そんな事は、都合の良いすぎるソレは夢にも思わない。

これから後は、出水に屋上を任せ、ナツメとエリックは彼を捕獲するだけ。

ナツメはそうに、横に並ぶ彼に目配せすると、出水は薄く笑んで、

「ま、この手の野郎は厄介だ。頑張れよ」

戦鬪面で厄介と言う訳でなく、彼に自身の行為を悪事だと認識させる事が。

出水はそんな意味で肩を叩いて、壁ぎわに倒れる男を担いでから背後へ——出入口を塞ぐ瓦礫を能力で退かして、外へと姿を消していった。

「——貴様等は、つくづく無能だ」

そんな男は出水を追うことも止める事も無く、ただ何も出来ぬまま結果だけを横から奪い去る彼等に吐き捨てた。

その台詞は尤ももつとな事である。ここ最近の委員会の体たらくといえは無い。直視出来ない酷さであるのだが——。

「貴様がわざわざ犯罪に手を染めてまで教えてくれたのは感謝するが——犯罪は犯罪だ。我々は貴様を確保する」

新聞がわざわざ報道するほどの規模で薬物売買が行われていた。新聞社が行っていたことだが、それほどまで手が伸びているのにもかかわらず、それを警察はおろか委員会まで認識できないとはどれほどまで隠蔽に富んでいたのだろうか。

——新聞社の手で足りるのか——？ 否、それは不可能に近い。簡単な自問自答は、簡単に答えを導き出した。

これほどまで情報が皆無ならば、本当は一部でしか薬物売買をしていなかったのを、わざとその情報を広めてから、東西へと手を伸ばすつもりだったのではないか？

もしくは——それを隠蔽できるほどの権力が介入している、か。

「……？ 何を言っているのか、理解に苦しむな」

後者は、絶対に関わりたくない。恐らく酷く面倒な事になるだろ

うし、それを知った途端口封じに殺されてしまうそうだ——ナツメはそう思う半面で、心の、魂の奥底は燻っていた。

裁かれるべき悪は断罪されよと。赦されぬ罪は償われよ——と。

「どんな思いで遂行したか、なんてのは関係ない。貴様がやったことは、結果はどうであれ罪は罪。貴様は裁かれなければならない」

「ふざけるなよ小僧が。俺が犯罪者？ 舐めた口を——」

不意に、男の手の中が極彩色に輝き始める。ナツメはそれに対して過敏に反応し——能力で強化した脚力で、一瞬にして肉薄し、

「利くなッ！」

その男が手の中に現れた手榴弾を再び放つより早く、ナツメはそれを腕ごと蹴飛ばして——その口の中に、銃口を突き刺した。

「善悪の区別も付かない大人が、舐めた口を利くなよ」

そうしたナツメの、一瞬の判断が男を無力化させた。彼は身動きを一切とれず、やがてエリックに両腕を後ろで組まされて、冷たい手錠に拘束される。

ナツメら一行は、その後直ぐにやってきた警察に全てを任せてから、早急に三課ビルへと舞い戻る。

その頃——委員会本部ビルが大変な騒ぎになっているとも知らずに……。

3 — 疑惑の中の確信 —

—— セントラル 中央地区第三区画。—— 一四時三五分現在 ——

ナツメ達が託された仕事を達成するために三課ビルを出てから暫く経った後。

三嶋が運転する、薬物の中毒症状の現れた数人を乗せるトラックは、委員会本部ビルの前に停止した。

「能力の発現の可能性や才能が無い奴はただの依存症に。センスがある奴は一時的に覚醒状態になるけど、能力に体が付いていなくて—— 仮死状態、か」

呼吸もせず体温が低いが、鼓動は弱々しいもののしっかりと刻まれる。トラックの荷台に雑なまでに乗せられる彼等は皆そんな状態であつた。

「だけど、精神力が弱い奴はこの状態のまま死んじゃう。他の影響で能力を得るつてのは、そんなリスクがあるてえんだからなあ」

能力とは、いわゆる精神の具現化である。潜在下で強く望むことや、その人間の本質を、肉体や物質に特殊な影響を及ぼすことで、本来ならばありえない現象を引き起こさせる。

だから能力を使えば使うほど疲弊するし、このような強制的な発現方法では、精神の弱い人間は肉体ごと死んでしまうこともある。

トラックから降りて呟く三嶋は、腰から拳銃を引き抜きながら、隣にやってくるアキラに声をかけた。

「正面突破は厳しいぜ？ やっぱ、ちゃんと作戦を——」

正面玄関には警備員は配置されていない。だが、広いロビーに入る其処は、派手に侵入すれば格好の的である。

三嶋には能力が無い。だがその代わりに豊富な経験があるのだが——
だからこそ、不安だとか実力不足だとか言う理由ではなく、その行動が愚かであることが十分に理解できるのだ。

彼の、アキラの目的は委員長に会う事。その顔面を殴り飛ばしてやりたいそうなのだが、その為には確実に委員長の居る部屋に行かなければならない。

正面からの侵入はそれを不可能、または手こずらせる力を持っている。彼はここに来るまで幾度と無くアキラへと言い聞かせた言葉であつたが——。

「関係ねえよ、真っ直ぐ突き破る。それだけだ」

台詞半ばを遮って聞かせる返答は変わらない。最も、一度決めたことをそう簡単に変えてしまうような男ならば、三嶋もここまで長く親しく付き合うことも無かつただろう。

「ああそつかい」呆れたように、彼は息を吐いて「だったら勝手にしな」

三嶋の言葉を聴いているのかいないのか、アキラは真剣な眼差し

で、だがその口元だけは緩めていた。

「勝手にするさ。今までだってそうしてきたからな」

選択は愚かだが——目的とする結果に到るのは不可能ではない。この男と共ならば。

いつものように、三嶋はそうして彼と共に前へと進みながら、自
トリボルバー
動回転式拳銃の引き金に指をかけた。

「おい三嶋、一緒に来るか？」

そうして彼等は、そう距離も無かったガラス張りの玄関戸の前に立ち止まる。三嶋は高鳴る鼓動を深呼吸で静めようとしていると、不意にアキラはそう問うた。

まさか——置いて行くつもりだったのだろうか。そんな不安や疑心が脳裏に過ぎった彼は、

「当たり前だろ？　じゃなかったら、わざわざこんなリスク踏んでねえよ」

もし生きて帰れば名が売れて、仕事がなだれ込む。三嶋が暖める金持ち化計画の一つであるが、その代わりに、即座に警察では捕獲できないと判断されて、委員会に狙われる。

この場合は、利益とリスクを比べると圧倒的にリスクの方が勝っているのだが——そんな事も、アキラが居ればなんとかかなりそ
うな気もしてくる。

だからそんな意味も込めて、三嶋は元気良く答えると――「ああそうかい」なんて彼の言葉を真似るように返した後、アキラは三嶋の腕を肩に掛け、腕を腰に回した。

「んあ？　おい、俺あそんな趣味は――っ!？」

妙な雰囲気飲み込まれそうになる三嶋は、そう口走る事によってしっかりと自分の世界を確立する事が出来たのだが――次の瞬間、不意に消えうせた地面に、突然全身に降りかかる加重に、体中を翻る風圧に、彼は思考を手放した。

――彼等はいとも簡単に、高く、強く、その空へと跳び上がる。

地面を、持てる力全てを使って弾いて飛び上がったアキラは、思った以上に高く飛びあがる体に少しばかり驚く。だが、この程度ではまだまだだと、戒めるように唇を力強く噛んだ。

風を切る二人の身体はグングンと天空を目指すが――無情にも徐々に失速し、およそビルの八階部分で、ついには完全に停止する。

「お、おい」

腹の臓腑が嫌な冷たさを走らせる。体中の全てが縮み上がって、身体は先ほど以上に気持ちの悪い浮遊感を覚えていた。

「黙ってる。舌噛むから」

そうして彼等が、跳び立った地面へと吸い込まれるように落ちて

いく中——何も無いその身体は、その何も無い空中で不意に、弾かれた。

上空へ。目指す上階部へと。

衝撃が波状となって空中に輪を作る。彼等の動きを察知できない空気は壁となって、彼等の全身によって突き破られていった。

強い衝撃に、また身体が、視界が大きくブレる。風が肌を大きく揺さぶり、まともな呼吸も出来ない。凄まじい強風が、衝撃と共に全身を痛めつけていた。

——そんな気分の悪い浮遊感を覚えるのも早数時間か。そう感じる数十秒の間、その上昇を幾度か繰り返して、

「おい、アレか？」

遙か上空、地上に置いてきたトラックが手乗りの模型程に見えるほどの高さにまで飛び上がると、突然アキラがそう聞いた。

何のことだろうか、そう思って彼が向くビルへと目を向けると——そこには血のように紅いビジネススーツを着る女性が、窓の奥でこちらを見ていることに気がついた。

彼女は——新聞で一度、写真が掲載していたので見た覚えがある。それは確か、治安維持委員会委員長の就任式の事で……。

「ああ、あの人だ」

つまりは彼女が委員長。アキラがその顔をぶん殴りたいと激昂

していた人物も彼女である。

目標は見つかった。アキラはそんな風に口角を上げて、歯を剥き出しに笑うと――　また先ほどの様に、自身を能力で強く弾いた。今回は下から弾くのではなく、横から。それはまるで巨大なハンマーに殴り飛ばされたような外力と、速度を誇って――　勢いに全てを任せて突撃するアキラは、大きく振りかぶった拳を、迷うことなくその窓へと突き刺した。

ガラスは空気を切り裂く甲高い音をやかましく鳴らして、その中を彼等は飛び入った。

そこから床を幾度か転がり、勢いを殺して、アキラはすぐさま立ち上がり、彼女を睨む。

「テメエか、治安崩壊委員の委員長つてのは」

三嶋はガラスで身体に切り傷を作って、彼が啖呵を切るその間に、ようやく立ち上がることが出来ていた。

「――　横暴な男性ひとですね。建物へは玄関から入りなさいと、教わらなかったのですか？」

だが決して慌てることなく、落ち着いた様子で、口調で、彼女――
――　はなつき 華月委員長は静かに、事務机の引き出しから拳銃を抜いた。

そんな返答に、行動に、アキラは嫌らしい笑みながら語気を荒げた。

「んじゃあよ、人の質問にはしっかりと答えなさいと、アンタは教わらなかったのかよ!？」

彼等の台詞は、抵触するだけで決して交わるものではない。それでもしつかり交錯するのは、殺意と視線、それだけである。

「貴方達は、中央地区^{セントラル}への招待資格は無かったはずですが……?」

「なんでンな事がアンタに分かるんだよ」

拳と拳銃は、互いを共に突き刺すように向けられたまま。

三嶋はただソレを、呆然と聞き、見ているだけしか出来ずに居た。

「さあ、何故でしょうね」

「ダメエ……ッ!」

そんな惚けた言葉に、表情に——アキラは我慢の限界を突き破って飛び出した。

能力で地面を強く弾き飛ばし、凄まじい速度で勢い良く飛ぶ様に彼女へと襲い掛かるのだが——まるでソレを予測していたかのように、その姿は直ぐに視界の外へと消えていった。

殴り抜けて突撃の勢いを殺すはずだった目標が消えうせた今、彼は——自分の正面に能力を発動させ、自分を殴り飛ばす。

自身の能力で挟み撃ちされてダメージを受ける彼だが、下手を打って外に飛び出し、落ちるよりは遥かにましであった。

だが——だからといって、彼の怒りが収まる筈が無い。暴力で解散されると思ったストレスは、自分に向けても誰に向けても、彼の中で永久的に増幅していくだけであつた。

——薬物を、罪も無き貧民の弱みに付け込んで売り捌き資金を得る一方で、戦力に、実験体になり得る存在を回収する。

これはなんたる外道の極みだろうか。一体どんな鬼畜の所業だろうか。彼の怒りは、如実に頂点へと迫っていた。

「仮にも、治安維持を掲げている団体が……」

「はい。貴方達が面倒を起こさない限り、私達の仕事は捗はかどるのです
が」

斜め後ろ。壁際に立つ彼女は慣れた様に嫌味を吐くが、殺気立つアキラはソレに促されずとも行動を起こした。

再び、地面を弾いて——彼女へと突撃する。

だがしかし、再び彼女はその場から失せて、アキラは壁を殴り、其処を中心に亀裂を入れるだけなのだが——。

直後、乾いた破裂音が、その背後で響いた。

「豆鉄砲をッ！」

だがしかし、この明るい中で放たれた弾丸は、いくら背後から撃たれたと言っても弾くことは容易である。伊達に死線を潜り抜けて

いない彼は――いつもの様に、銃弾を発砲主へと撃ち返した……が。

「豆鉄砲を？」

直後、鈍い冷たさを伝える何かが、その後頭部に突きつけられた。疑問を呈する凜とした声の後、再び、聞きなれた銃声はやかましき耳元で掻き鳴って――咄嗟の判断で下げた頭は、銃弾が皮膚を抉るだけの被害に抑えていた。

「アキラあつ!？」

――それを、未だ入り口付近で見守る三嶋であつたが、彼には手を出せない世界であることは瞭然としていた。

常人を逸する、物理法則を無視した動きで、凄まじい速度で動き回るアキラに、ソレを軽々とあしらう華月。

華月に到つてはただ小走りし奇襲するだけなのにも関わらず、アキラを押している。そして上手い具合にアキラと重なるので銃撃する隙も無い。えんこ

彼はただ、自身の気持ちを肩代わり、自身の怒りをぶつけるアキラを応援することしか出来ずに居た。

「——よくも」

再び空気を揺るがした発砲は、アキラが能力を発動するよりも早く右の太腿を後ろから貫いた。

「……、貴方の行為は犯罪です、が——」

アキラは力なく、背を向けたまま、壁を見つめたまま、腰を僅かに落とす。それは攻撃の予備動作などではなく、太腿の痛みに堪えられなくなっただからである。

彼の能力の発動は、範囲が狭い故に高速である。それは正に、零距离で撃ち放たれた弾丸を、傷つきながらも跳ね返せるほど。

だというのに、彼女はその能力を発動させる数瞬前に銃弾を撃ちこんだ。いくら高速で展開出来るとは言え、背後のギリギリ範囲外の距離からでは、そのタイミングは少しばかりズレる。そして、戦闘での”少しばかり”は、かなりの大きさである。

そして撃ち抜かれた弾丸を反射しても、銃弾は既に次の行動を起こす華月に当たる事は無い。

運が良いと言うのか——はたまた、彼女が能力者だと言うのか。

後者だろう。間違いないと、アキラが確信すると——珍しく声を僅かに震わせた彼女は、言葉を続けた。

「貴方達の目的は、一体なんでしょうか？」

「ああ？ しらばつくれんなよ…… テメエ。 アンタが、指示したんだろうがよ」

「そんな事は聞いていません。 目的はなんでしょうか、と——」

「るせえッ！」

不測に——アキラの弾く範囲が極端に膨張して、華月はそれに巻き込まれるや否や、易く対面の壁へと吹き飛ばされ、その背を強く叩き付けた。

衝撃が音となって響き、胸を押さえて激しく咳き込む。 そんな彼女の手には、拳銃が失われていた。

「当事者は皆幸せで、傍観者は皆不幸せな、そんなクスリを配って居られる委員長さんよ……。 知ってるか？ 薬物売買ってのは、犯罪なんだぜ」

落とした自動拳銃を拾い上げ、彼は足音を鳴らしながら華月へと歩み寄る。

「おい待てよ。 委員長は十分痛めつけたし、十分だ。 殺したら洒落んなんねえって！」

引き金に指をかけて、痛いはずの足も引きずらないアキラを抑える三嶋だが、彼は肩を掴む手を引き剥がされて置いていかれた。

表情も、呼吸も、声色も変えなかったはずの彼女は、ただそれだけで、全てを乱し——アキラが目の前に立ち、その額に銃口を突きつけられてから、再び口を開いた。

「警備員がやってくるまで後一分もありませんが、貴方ならば私を殺した上で逃げられるでしょう——その前に、話を聞いてもらえますか？」

言い訳がましいかもしれない。また、彼の話すら聞いていなかった自分がそうすることはおこがましすぎるかもしれない。だが——恨みを、誤った目標に向けられては困るのだ。だから、自分の命を犠牲にしても構わないから、部下には迷惑を掛けてもらいたくない。

そんな強い思いが通じたのか——アキラは銃口を突きつけたままではあるが、行動を停止した。

優しいですね。そう一言かけてから、彼女は続ける。

「薬物に関しては、今初めて知る事になった……と言っても、恐らく貴方達は信じないでしょう。ですが、この——事件には、新聞社が関わっていた。多分、もうそちらのほうに片が付いていると思います……」

壁に背中を預け、力なく頭を垂れながら、大きく息を吸ってから、頭の中を整理した。

「私も正直、何がどのような事になっているかわかりませんが……、いえ。すみません、聞き苦しい話を。私が知らない話をして、ただの命乞いにしか聞こえませんか——どうぞ、引き金を……」

女だてらと馬鹿にされ、感情に左右されないよう努力してきた彼女だが——最後の最後で、感情が先行してしまった。

だから殺される時ばかりは、潔く散ろう。相手は賊だ。どんな期待を持つと無駄である。

彼女が覚悟する間に、その額に全神経を集中させ、背筋に恐ろしいほど冷たい恐怖を現実味溢れるほどに感じていると、両開きの扉の外から心配の声を荒げながら駆ける足音が聞こえた。

『何事だああああッ!!』

「おいアキラあつ!」

叫び声の中で三嶋が急かす。早く委員長を殺せとではなく、ここは退こうと。

だが怒りが、彼女の言葉によって蓋をされ、行き場をなくした憎悪が彼の頭の中で跳ね回り——引き金にかかる指に、力が籠った、その瞬間。

「動いたら殺すぞっ!」

——扉を突き破り、木片を辺りに飛び散らせながら叫ぶその声は、まだ生きている委員長を含めた全員の注目を引いた。

その者は身の丈程の大剣を手にし、姿は見えぬが——有り余る元気さと馬鹿力だけは、周囲に十分な理解をさせていた。

「だが貴様等は賊だろう。安心しろ、動かなくても殺す」

「アキラ!」

駄々っ子のように幾度も名を繰り返す三嶋に、仕方なく銃口を外して拳銃を捨てるアキラは、その手を取って――。

「俺は――その潔さからアンタの言葉に真実を見る」

駆け出しながら、華月にそれだけ叫ぶように言って――破った窓から、躊躇うことなく身を投げた。

大剣の女は、ソレを見るなり剣を背負い直して、華月に手を差し伸べた。

「今のは……？」

華月はその手を力強く握り立ち上がって、まだ明るい外を眺めながら、不確定なことが多すぎる今の出来事に頭を振った。

「わかりません。ですが、近日中に何かが起こると思います――
――、涼谷さん。今回は助かりましたが、あまり物を壊さないように」

辺りを見てからはつとする華月は、大剣の女――涼谷涼子に注意をしてから、また席に付き、パソコンを起動する。

様々な意思の交じり合いがあり、また――能力を深きにまで使用した故の疲労で、起こる頭痛に頭を抱え、

「委員を派遣させますので、早いところ西の二区画支部へ戻っては貰えないでしょうか……？」

「しかし今回の事件はあまりにも大きすぎますし、支部の仕事は知

り合いに任せているので大丈夫ですから」

また話の通じぬ、支部を抜け出してきた部下に、頭痛をより深刻なモノとさせられていた。

——セントラル中央地区第二区画。——五時五八分現在——

全てが終わる——彼等が知らぬところで、新たに何かが始まっている頃。

彼等は爆弾魔ボマーの能力を持つテロ犯と、事実捏造、誹謗中傷、薬物売買を行っていた新聞社社長を、簡易収容施設へと置き、課長室へとその連絡に訪れていた。

爆弾魔ボマーは、手の中に収まる程度の無機質を、様々な爆発物に変換する能力である。これを行ったお陰で、爆弾の型式も形も全て不明で、製造工場を突き止めることが出来ず、捜査は難航を極めていたのだ。

だが全ては終えた。いくらかわだかまりはあるもの——。
そう考えながら、課長から「後は報告書で良い」と言い渡されて解散するのだが、

「ナツメ、お前は待て」

一人だけその場に残されてしまった。

「なんでしょう」

改まったように背筋を伸ばして聞くのは、ラバースーツを早く脱いでしまいたいからである。

それを察したのか、長い前座を切り落として、課長は簡潔に告げた。

「先ほど、と言っても一時間以上前だが……、例のアキラが、委員長の所へ侵入した。目的は分からんが、今回の薬物売買に関連しているようだった、と委員長は言っている」

「奴が、関わっているのですか？」

委員長室へ突撃したという本題を差し置いて——アキラに関する情報だけでも怒りを禁じえないナツメは、そこだけに食いつくが、課長は素っ気無く首を振って否定する。

「いや、奴等もソレについて激昂している様子だったらしい。恐らく、我々以上に、何かを知っているのだろう」

「奴等……？」

「ああ。仲間が居たそうだ。歳は同じか近い様に見えた」と

仲間——あの堅そうなアキラがそんな場所まで連れる男だ。恐らく、相当信頼できる仲間なのだろう。

そんな人間が居たことに驚きではあるが、それよりも、アキラが薬物売買に対して怒っていることに驚いてしまう。

あの男が、他人に向けられる理不尽に対して怒るほどの”優しさ”があつただなんてことは予想外すぎるのだ。

ナツメはそう思いながら、また彼と戦うことがあるのだろうか、少しばかり期待する。

「そこで明日から一週間、特にお前にしか出来ないという仕事は無い。その間は、休みを……もとい、自由時間を与える」

休み、休日なんてものは、昨日か一昨日くらい前に、自分から捨てた。全てはアキラを、テロ組織を止める為であるが、結局は個人捜査なので、どう行動しようとも自由。結局、捜査しようと思おうと思いのままなので、休日には変わりはない。

「余暇を程ほどに楽しむが良い」

言い直した課長ではあるが、それを察したのか気遣うように休暇を告げた。

ナツメはそれにいくらかの恥を覚えながらも、深く頭を下げて、その場を去って行く。

——あまりにも長すぎたこの一日は、そこでようやく終えることとなる。託されたばかりの仕事は、数時間で恐ろしく大きい物と変わるが、一時間と掛からずに氷山の一角——実質今回の事件分——は叩き潰された。

ナツメはいつも通りに仕事をしたつもりだが、この東京ではまとも^{まち}に仕事をしたことが無い。故に、たったそれだけでも彼の有能ぶ

りは、三課全体に広まる事となり――。

仕事以外の悩みも、相応に増えていくことになるのだが、それはまた別の話である。

SKILL3 『すれ違う人々』

違法薬物の供給が失せたことにより依存患者は表に姿を現わした。

禁断症状を起こし暴れまわる者。次回の薬物売買の取引がほぼ取り消しになったことにより、自棄になって過剰摂取し命を落とす者。また症状の軽い者は、他者に高額でソレを売りつけるなどしていた。

その事態を深刻に見た政府は、ある程度の人員を動かして被害の出ている東西南北に精神科、心療内科を兼ねる依存症を専門に治療する病院を間に合わせて展開する。

後々、規模を大きく拡大させ民間に明け渡す予定であるのだが、現在の依存症患者の数が予想を反して多いため、その予定は未だに未定であった。

そうして大衆の知るところに躍り出た薬物の違法取引であったが——
——さして興味も無い彼等の記憶からは、そう時間も掛からずに消え去って行くのだらう。

その世界の天には神も無く、されど世は事も無し。

時間だけが平等に流れる其処では、無自覚に全てを霞ませていた。

——ノウステンティ北地区第五区画。—— 一四時三四分現在——

治安維持委員会支部の広いロビーでは、一人の支部長——おとし御影慶みかげけい——

——はうなだれ席に付いたまま動かない。

誰も居ない其処は酷く静かで、広い故に電気をつけなければ薄暗いソコである。だからただ座っているだけでも、彼の気分はどつと落ち込んでいた。

——部下の正義感溢れる行動から、本来無関係である西地区ウエストシティの貴族誘拐事件を引き受けたのだが……。

人買い、いわゆる奴隷商人に売られた——政府との関係が濃厚な彼女きこくの足取りはおるか、その商人すらも見つかからない有様である。

その貴族は、世界の荒廃から立ち上がる中で、出来上がったばかりの政府に限りない援助を尽くしてその地位を得た存在。唯一無二の、貴族たる貴族であった。

そして昨日、ナツメから連絡があり、その全ては政府の知る所となったと聞いた。

恐らく本部も動きだし、支部連中も現場を退くチャンスなのだろうが——。

「要らねえ事を知っちゃったなあ……」

彼らが得た情報は、

——事件に関わったものは皆、反政府組織の一員だという事。

——その組織が徐々に人員と力を付けてきていること。

——そして、未だ未熟であるその組織の本部の在処。

動かねばならぬだろう。

彼の心は、迷っていて、その考えを誰かに否定して貰いたい気持ちで溢れかえっているのにも関わらず、その根底にあるのは”殲滅”ただ一つ。

未熟といっても、少なからず武装は豊かで、能力者も知れている限りではA級が数名。それ以下が数十人居るとされている。

一方の北地区ノウスシテイ第五区画治安維持委員会支部は、部下十二名。うち戦闘員は五名で、能力者はB級プラスの上である彼、御影慶ただ一人。

最も、支部長になれる条件はB級以上の戦闘向き能力を所有している事が最低条件である。その他委員は、必要な技能のうりよくのみで選考募集するために、大抵支部には支部長以外の能力者が存在しない。

戦力的に見れば圧倒的に不利である。普通に、理智的に考えればすぐさま本部にその場所を報告し、自身は元の仕事へと戻るだけである。

だが——託されてしまった。

ナツメから。涼谷から。

ならば”自分”で解決しなければいけないだろう。自分で受けた仕事は、自分で片付けるのが彼の信条である故に、確信的にそう考えていた。

下らぬプライドだと、笑われるかもしれない。

事実、彼自身そう吐き捨てていたし、部下からもそう言われるのが良く想像できた。

最も——この行動が、出すぎた真似なのは重々承知している。

いくら頼まれたからと言っても、彼が受け渡された仕事は”貴族である上守社かみもりやしろを探す”事であり、その”貴族を誘拐し、売り払った組織を壊滅”する事ではない。

彼は——この行動が、委員会の面汚しになることは重々承知している。

御影が特攻を仕掛けたとしても、そのアジトに全員が揃っているとも限らないし、そもそも突撃してもその中の全員を瞬殺できる程の戦闘能力を持ち合わせていない。故に返り討ちをされて、死に、吊るし上げられるだろう。

委員会は、この程度だと見せしめるように。

考えただけで身震いする。彼は身体を小さく震わせてから、背もたれに体重を掛けて大きく息を吸い、心を落ち着かせた。

「プライドは……仕方ない、狗にでも喰わせておくか」

自分では無駄な上に足を引っ張りかねない。

相手は腐ってもテロ組織。国を取るか、個人の誇りを取るかで考

えれば、答えなど考える間も無く出てしまつ比較対象である。

そうして彼は、彼の机の上に鎮座する電話機へと手を伸ばす。無論、委員会へと連絡するためである。

一週間ほど前に高性能無線機が扱えるほどに電波状況が回復し、また有線も修復されたとの連絡が来たお陰で、どの支部も元通りに活動を再開している。

我々は関係なかったがな。そんな事を考えながら、電話に出た交換手に、委員長へ取り次ぐよう指示をした。それは、支部など言う下っ端には委員長へ直接繋がる電話番号を教えられていないからであつた。

——ウエストシテイ
西地区第一区画。一四時四〇分現在——

自分の勤める支部の長がそんな苦悩をしているとも知らぬ委員の一人、荒波水城^{あらなみすき}は、あてもない捜査に疲れて一休みしていた。

彼女こそが無自覚に正義感を人一倍垂れ流しにする人物で、自分の上司、御影慶のプライドを自ら捨てさせる判断に陥らせた当事者である。

だがやはり、当の本人は気付き難いもので、彼女は一寸先も見通せないこの事件に苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

「困つたものね……」

事は、電車内で老婆に因縁をつける若者を抑えたナツメと知り合ったことから始まる。

そして彼が理不尽に巻き込まれた事件を感知し、上守邸に突撃し、上守杜だと姿を偽っていた呉氏崎（いしざき）とそれに加担していた西篠（にしじの）を捕獲し、貴族の行方を捜している現在に至る。

手がかりは一切無く、掴めるのは——何も知らない彼女にとって無価値だと感じられる——反政府組織の情報だけ。

それについては落ち着いてきた中央部が処理してくれるだろうし、そもそも、その情報も確かかどうか怪しいものである。

そんな組織の情報が、ただで流れてくる事もそう思わせる一因であるし、その量が最も疑惑の念を滾らせた。

——その人員数に、事件の数々。加担している便利屋の情報、総合した大体の戦闘力等。

幾ら情報屋とは言え、知りすぎでは無いだろうか。もしくは身内か何かなのだろうか。

彼女の思案は尽きることが無い。

反政府を名乗るのだから、政府に狙われるのは当然である。そして政府と言うものは須らくして大火力を所持しているものだ。勿論、民間で募り集まったその組織が、ソレを返り討ちできる実力を持っているはずが無い。だから当然、身を隠し情報も漏れないよう厳重注意する。

筈なのだが……。

泳がされては居ないだろうか。そうに彼女は考える。真面目に思索し、水で喉を潤しながら、辺りを警戒する。

街の一区画、その半分を大規模の爆破させ、——現在は既に修復も終えた——駅も吹き飛ばした組織が、遂には直接、政府が営む組織をも吹き飛ばそうとしているのではないか。

委員会は警察よりも権力を持ち、またその昔あった自衛隊という軍隊の活動と、またその昔の——治安維持委員会の——名前だった公安の仕事をそのまま継ぐ組織である。

故に規模は大きく、能力者の量も質もあらゆる意味で天を衝く。

だからまずソレを先に無力化させれば、政府が他にどのような防衛組織を隠していようととも無力に近い。

そんな先駆けを、北第五区の支部で行おうとしているのではないかと——彼女は考えていた。

恐ろしいことだと身を震わせた。ありえない事だと首を振った。

だがどうにも不安が拭えない。それは、起こる確率がどれほど少なくとも、絶対に存在する恐ろしい出来事を想像してしまったからである。

またいつ世界が滅びる危機に見舞われるか分からない。いつか豪雨が降り注ぎ、乾ききった砂に吸収されずに洪水になるやもしれない。身近で言えば、いつか、また今すぐにでも、通り魔に殺される

かもしれない。

それは酷く極端な想像かもしれないが、そんな空想は、夜中、寝る前に考える死ほどの恐怖を、不安を彼女に与えていた。

だが、そのきっかけとなったナツメのことなどは、彼女の頭からとうに消えている。そもそも、”きっかけ”なんてモノは最初から存在しておらず、運命的に正義に導かれるままこうなつたと、彼女は考えていた。

彼女は、自身の正義と、ソレより遙かに強い意志によって作り出される正義と、伴う実力に無条件で妄信する。荒波がこの組織に入つたのもそれが理由である。

——そんな事も露知らず、同行していた同僚の男は、そんな震えている彼女の肩を軽く叩いて、優男のように声を掛けた。

「大丈夫かい？ 変な人にでも声をかけられた？」

荒波は自分の世界に没入していたために周りが見えておらず、そんな同僚の行為の所為で、彼の言葉通り”変な人に声を掛けられた”状態になってしまう。だから彼女は大きく肩を弾ませた直後、俊敏に男に向き直りながら手を振り払い、数歩下がりがら腰の拳銃に手を伸ばして——同僚の顔を見るなり、ふと我に返った。

それはやれやれと言う様に両手を挙げて、肩をすくめる。荒波は申し訳ないように謝罪をした後、そのままの距離を保って得た情報を伝えた。

「——つて所。本来の目的とは遠く離れた情報ばかりよ」

「そうか……。それじゃ、今日はもう戻ろう。他も皆、そうしてるみたいだし」

「そうね。何も出来ないから仕方が無いわ。私たちもそうしましよ
う」

どんな相手でも、不安の深淵に一人で佇むより、二人、あるいは複数で居たほうが安心する。最も、モノには限度があるが――それが仲間ならば、効能はより高まるというものだ。

荒波は合流した事によってある程度、不安と恐怖を払拭して、そのまま支部へと戻っていった。

空に高く上る日は、そんな事も知らぬ振りで燦々と鬱陶しいほど暑く鋭い陽光を降り注いでいた。

――あらゆる事件、思案が、情報が交錯する、様々な立場の数日間が、そうして幕を開けた。

1 — 強運的すれ違い —

——サウスシティ
南地区第二区画。一五時一五分現在——

とある寂れたアパートの一室。仮拠点ではあるものの、そこは反政府組織の溜まり場、もとい作戦本部であった。

皆が皆、そこで寝泊りしているわけではない。首謀者と策士、それと重要な役割に付く人間が主として集まり、相談し、その他大勢に結果を報告する。その結果を作り出すための、話し合いの場である。

故にその場には数人の男たちが、暑苦しくも締め切ったままの窓カーテンの中、薄暗い部屋で静かに会話を交わしていた。

「既に委員会には嗅ぎ付かれているらしいです。この場所は……。既に幾人か近くへ来ているみたいで。全て同じ組織とは、まだ判別つきませんが」

鼻から下を、ごわごわとした髭に包む巨大な体躯をした男が、その身体を丸くするように縮こまりながら、自身の役割をこなした結果を首謀者へと報告した。

鈍く低い声は、その薄暗く蒸し暑い部屋の中では酷く恐怖を促すようなものではあるが、涼しくなるのは心だけという現実の無情さが伺えた。

無論——金で雇われたと言えども、戦闘能力の高さからの評

価で、割合に難しい仕事を成し遂げているアキラと、彼を紹介した三嶋もその場に居合わせている。

皆が六畳半の真ん中に、なにやら怪しい宗教団体の会合の如く集まる中、彼等はそれが鬱陶しいように部屋の隅で、うちわを片手にだれていた。

「そうか……」

その部下たちの前に、片膝を立てて座る男。彼こそは首謀者であり、また組織一の実力者である。頭が切れ、また冷静な判断と、やはりその持て余す力をアキラとは違い上手に使いこなす様を評価され、強い信頼を置かれている人物であつた。

「あれほどの爆破でも一、二週間程度しか怯まないのか。厄介だな……、どう思う、西篠^{にししの}？」

引き締まる首を困つたように掻き耄りながら、集団の中の一人——貴族誘拐事件の関係者——に、彼は尋ねる。

別に答えに詰まつたから、というわけではない。ただ単に、久しぶりなので頭も鈍つていると思ひ聞いてみたのだ。故に、息を呑む素晴らしい意見が欲しいわけではない。だからといって、酷く俗じみた言葉が返つてきても困るのだが。

勿論、西篠もそこまで——第五隔離病棟^{じつけんじょう}に居た事で——落ちぶれたわけではないので、その事について察している。物凄く鋭く。そして当然、彼が既にある程度の考えが頭の中に居座っていることにも勘付いているので、当たり障りの無いことを、脳からひねり出す。

「このまま泳がせ、向こうが行動に出たところでこちらも動けばいいのではないでしょうか。少なくとも、相手が知っているのはこの場所だけでしょうから」

何も知らないのならまだしも、悪戯に少しだけ知ってから行動に出るほうが遥かに危険である。全くの無知ならば、あらゆる事に警戒し、使わぬ脳も全開にしながらまた慎重に行動する。だが後者の場合、少しだけ知っているという事を驕り、またそこからの勝手な判断や思考で、妙な自信を持ち、結果隙を見せてしまう。

現在の委員会、もしくは他の、この組織を狙う誰かは、その後者の状態である。故に、叩くのならば隙だらけで阿呆の様に突っ込んできたその瞬間だと、西篠は考えた。

その意見に、なるほどんうんと周囲の人間は頷き、なるほど秀才じゃないかと肩を叩く男があった。それを見守るリーダーは咳払いをして彼等を落ち着かせてから、軽く頷く。

「ああ、君らしい考えた。そして同時に私も同じ事を考えた。つまり諸君、これからは静かに生きようと私が述べるのだが、どうだね？」

この反政府組織は、語れば長いものである。それは十年程昔に遡るのだが、この説明はまた時が来たときになされるだろう。

——過激派を語るこの反政府組織の首謀者らしからぬ風貌、言動を持つ、穏やかな青年は、またそんな風に、活動を一時凍結するようにも聞こえる発言をしてみせる。言うまでも無く、彼はそんな意味で申したのではなく、単に、釣れるまで気長に待とうというものである。

最初はそんな言葉に驚いた諸君一同であるが、意味をなんとなく理解してくると、またそれも致し方ないことだろうと頷き始める。

まだ動かない委員会、または他組織は、隙を見せて突っ込む阿呆とは違う。酷く秀才で手だれた精鋭兵の如き素早さで、また得物を捕らえた蛇のような狡猾さで全てを伺うのだ。

下手に動けば、馬鹿者として釣れる脅威が、逆に阿呆として自分が釣られてしまう事になる。ついでに、この組織全ての情報を露呈して。

それだけは避けねばならない。たった——ソレだけのことで全てを失うにはあまりにも情けなさ過ぎるし、何よりも、それで終わっていい反政府組織ではないのだ。

彼等はソレを重々に承知している。故に、この組織はやや、少数精鋭気味であった。手駒を上手に集めなければ、雑魚や阿呆ばかり集まってしまう。数を増やすのは確かに、ある程度大事なのかもしれない。政府を相手にするのだから——だがしかし、阿呆ばかりでは困ってしまうのだ。

誰も、好き好んで赤子に壮大なる宇宙を語りたくは無いだろう。つまりは、そういうことである。

「了解してくれたのなら嬉しい事限りなし。それでは、これからの事だけど——」

素直な彼等に、そして暑さの所為で殆ど話が耳に入っていないアキラ達を眺めてから頷き、これからしつかりとした話に移ろうとす

ると、不意に——言葉を遮る激しい音が、建物が崩壊する錯覚を覚える衝撃が、すぐ近くで巻き起こった。

がたがたと物が崩れ落ち、そして床に衝突して、床が抜けてしまふほどの衝撃に、彼等は皆驚いて身を伏せた。

妙に近場で聞こえるソレは、恐らく隣の部屋で起こった惨事であろうが——その中で聞こえた小さな悲鳴は、常ならば聞こえぬ隣人の声であった。

いつもは部屋に居らず、訪ねても返事はおろか、生活音すらしなかったのだが——珍しく帰ってきたのだらう。

ともかく、まあなにはともあれ難儀なモノだと、一つ息を吐きながら、また息を吸って、大きく口を開いて先ほどの続きを声にしようにするとまた——。

『たすけてー』

隣から、籠って聞こえる男の情け無い声が、無自覚にその会合の腰を折っていた。

「……、どうしますか？」

苦笑しながら頬を掻き、汗ばむ額を袖で拭う一人の男は尋ねると、彼は困ったように溜息を吐いて、

「助けてあげようか」

仕方なく立ち上がった彼は、他の者を全員待機させた状態で、一

人悠々しく、その情け無い男の下へと歩いていった。

空いた玄関の扉から入る、本来ぬるく感じる風に、彼等は涼しい快感を覚えて、彼等もまた一旦の休憩として一つ息を吐いた。

——サウスシティ南地区第二区画。一五時。分現在——

時は巻き戻るべく遡り、同アパートの隣室。二階の、四つ並ぶ部屋の右奥、二〇五号室の中で動き出す。

——与えられた休日も半ばが過ぎる。彼は今日も今日とて自主的に仕事に明け暮れては、休みだからと常より早く帰宅していた。

それから、既に前日、前々日に綺麗に片付けた部屋の中を見渡して、やることのないなあと呟きながら窓を開放。ぬるくも、無いよりはマシの風を全身に浴びながら、彼は携帯する火器を高床式寝台ベッドの底部分、引き出し状に引き出せるソコへ貴重品と共に閉まって、寝転んだ。

マットレスが深く沈みこみ——無駄な保温性が、全身から汗を噴出させた。彼は、コレは参ると起き上がり、そのまま上着を脱ぎ捨てた。身体から引つ剥いだ服は、不自然なことに、ふわりと舞うことなく、鳥が撃ち落されるように床へと叩きつけられて鈍い音を鳴らした。

それは決して汗で濡れた服が重くなったという訳ではない。

ナッメ彼という男は、自身を鍛える時間を欠いているために、服に重り

をつけるなどという古風な修行方法で肉体を強化しようという目論見を企てているのだ。

ナツメは、休暇中故に私服の上着であるそれから重りを引き抜き、それからベッドへと放り投げる。腕にずっしりとした重みが投げる動作によって倍増されて、また解放された。

ただそれだけなのに妙に疲れてしまうのは、やはり常日頃からの疲労の蓄積の所為だろう。彼は、明日こそはゆつくりと休もうと考えながら、ラフなシャツ姿に着替えなおして、本棚の前に立った。

「今日の気分は世界の船窓から書籍版、かな」

彼が呟くそのタイトルは、サントシップ砂船の窓から見える景色の写真集である。ナツメが好き好んで集めるそれは、愛読する雑誌に毎月十ペー
パノラマジずつ掲載されており、書籍版にもなると掲載されていなかった写真も大幅追加されているというお徳版である。

最も——殆どの写真は、普通の人間が見ればどう違うのか、説明が欲しくなる砂漠の景色なのだが。

一般人には価値が見出せないものを所持し楽しむ自分に悦に浸るというわけではない。ナツメは純粹に、その壮大さや、荒廃した都市、外から見た街の光景などに心を動かされるのだ。

小さい頃の夢は冒険家だった。そう思い返しながら、本棚の一番上に収納されている、六法全書並みの厚さを誇る、定価五、二五〇円のソレに手を掛け、引っ張り出そうとすると——紙との摩擦が起こり、それは中々に抜け出せない。

こいつは困ったことだと、奥歯を食いしばりながら、指先ゆえに力の入らぬ手を、妙に高い故に、踏ん張りきれぬために力の入らぬ己を心中罵倒していると、本が――棚ごと、手前へと不意に襲い掛かってきた。

それはあれよあれよと言う間に頭頂部に鈍い衝撃を走らせ、

「あぁっ!？」

実際にはそんな事を口にする余裕も無く――金槌に打ち込まれる釘の如く、床へと叩きつけられる。そんな幻想を抱きながら、ナツメは仰向けになって本棚の下敷きと化した。

頭がぐらぐらする。愛書に埋もれて死ねるのなら本望だと一時期考えたこともあるが、実際こんな状況が突発的に起こってしまったらやはり命は惜しいものだ。蔵書など誰かにくれてやるから代わりに誰か助けてくれと、心の中で彼は叫んだ。

しかしやはり、それはそれで惜しいものがある。こんな簡単に見て分かる情けない状況でこんな複雑な心境に陥ると思っても見なかった。

全身に電撃の如く走る痛み在所為で能力の使用も困難な現在。彼を助けてくれるものはその場に居るはずが無い。

けいたいでんわ
高性能無線機で助けを呼ぼうにも――引き出しに仕舞い込んだきりであつた。

だから彼は迷わず叫ぶ。

「たすけてーっ！」

ナツメが不意に感じるのは、夜中ふと考える死の恐怖。だが、現在の状況はそんな恐ろしく孤獨的な状況よりも酷く情けない。言っ
てしまえば、その思考上での死は甘美なほどマシであると言えるよう
な

なぜならば、少なくとも死に方を選べるからだ。

その時不意に、世界が静かになった気がした。

ナツメだけを、人間を辞めて倒れる柵に埋もれる下敷きとなる人
生を選んだ彼だけを置き去りにして、皆が新たな世界へと旅立った
のかと、一瞬真剣に心配して――。

「大丈夫ですかー？」

玄関の外から聞こえる男の声に、ナツメはほっと胸を撫で下ろす。

「申し訳ない、鍵が開いてるので、入ってきて貰えないでしょうか」

なるべく怪しまれないような口を利き、それからドアが錆びた音
を立てて開くのを聞く。次いで、中に入る足音と同時に溜息が漏れ
るのも耳に届いて、ナツメは心の底から申し訳ない気分陥った。

「これは……、読書家なんですねえ」

やがてやってくる彼は言葉に詰まり、ややフォローになっ
ていない事を口にする。そして、そのまだ若いらしい男は一つ息を吐いて、
能動的にすぐさま屈み、柵の脇に手を掛ける。

「これは良い人。ありがたい」

「いいから、本は少しばかり諦めてください。せーので行きましよう」

「わかりました……。せーのっ」

大きく息を吸い、自身のタイミングに合わせて棚の柱部分を握って力強く押し返す。同時に男も、立ち上がるように棚を持ち上げると――バラバラと、飛来するようにページをはためかせながら、まだ落ちきっていない本はそうして棚から零れ落ちる。そうして漏れなく、ナツメを蹴っていく。

ページが折れ、跡がつく。中途半端に持ち上がるソレは、下段に重い辞書類を鎮座させた報いであろう。ナツメはそれを思い出した。半ば涙目になる情け無いナツメを見て、救助にやってきた男は短く息を吐き――また一息で、力強く棚を持ち上げて……。

「はい、ご苦労様」

本が散らばる中に倒れるナツメを見て、彼は紳士的に手を差し伸べた。足で本をどかさず、しっかりと手で選り分けたのは紳士的かつ常識人である証であり、またそれが好感度をグンと上げさせた。

ナツメは軽く頭を下げながら手を取り、立ち上がったから、また改めて頭を下げた。これは彼なりの丁寧な礼であるが、受ける側は些かしつこいと感じざるを得ない。

「私はこの隣に住んでいる『よるなかむつき夜半無月』です。最近越してきたので

すが、ご挨拶が遅れた様ですみません」

彼はついでとばかりに自己紹介をし、そして軽く握る手を振った。ナツメは彼の好青年ぶりに感動を禁じえず、顔をほころばせながら、同じように名を名乗る。

「いえ、こちらも長々と家を空けているので。俺は『なつめなつめ夏目鳴爪』……、変な名前でしょう？　こちらこそ、よろしく……？」

笑顔で名乗るが——不意に、彼の笑顔が失せた。何か、気に障る事でも口にしたのではと思ったが高々五〇文字にも満たない紹介で、ナツメがそんな事を鋭くやってのける事が出来るはずが無い。

心当たりがあるとしても名前ぐらいのものだが、この土地での、この都市での生活は、どう計算しても半年に満たない。二年以上治安維持委員会に属しているのにも関わらず、だ。

だからそれ故に知り合いも居らず——だからそれ故に、自分の名前にピンと来る人間なんぞは、委員会の人間か地元の間人くらいしか居ない。だから少なからず後者では無いと、ナツメは理解した。

——夏目鳴爪。名は聞かぬ、というより、有名では無いだけである。だが私は知っている。この名を、この顔を。だからといって、彼が私を知っているというわけではない。

私と彼は知り合い同士では無いからだ。

ならば、何故私が知っているという話になるのだが、それは至極簡単な話で——委員会の重要・危険人物リストに含めた覚えがあるからである。

選抜チームは勿論、委員長に、選抜から零れるが高い戦闘能力を有する能力者。だが、その条件の中で唯一一致せずとも、その名を脳に刻ませる存在があった。

それが彼、ナツメである。その存在は以前西篠を打ち負かしたことにより露見した。

その時の西篠は、今ほど強くは無かった。だが少なくとも、今のナツメ以上の実力は秘めていたし、事実その通りに彼に苦戦を強いていた。だが彼は生き残り、西篠を打ち負かしたのだ。

他の雑兵が居たのにも関わらず。怪我をし、疲弊していたのにも関わらず。

他の能力者とは違い——彼だけが、自己完結で終える能力だというのに。

——能力とは大抵、自分から他へ影響を及ぼす。例えば西篠セルフの自家発電ならば、どんな方法にしる得た電気を、放電する。例えばアキラの反発リペリオンならば、速度や大きさ形を知覚したもの全てを弾く。

電波にしる重力にしるなんにしる、全てはそうである。そしてある程度は重複している能力である。

だが——ナツメのソレだけは未観測の能力であり、また、観測対象に至らない弱小能力であった。

それなのに、事実彼はそう、胸を張って強いと誇れる程ではないのに――全てを打ち負かしてきた。

それは即ち、強さの証明である。だから改めて、能力判別テストに掛けてみるのだが、その結果はやはり、マイナスこの下という評価には変わりがない。

能力の強さとは即ち精神力の強さである。それほどの数の能力者を、それほどの強さの能力者を打ち負かしてきた彼ならば、それに応じて精神と共に能力も強くなるはずなのだが……。

――反政府組織の首謀者、リーダー夜半無月は、自身の中で最も不可解な生き物を見たように顔を硬直させ、また一瞬の内にあらゆる物事に思考をめぐらせて、また答えの出ないソレに、少しばかり苛立った。

だが、目の前のソレについてただ一つ理解しているのは、相手は酷く間抜けな――強敵であるという事。

――顔を、石膏で固めたように硬直させたかと思うと、いつの間にか緩やかな笑顔に戻っていた。

「いえ、そんな事は無いです。寧ろ平凡すぎるより、名前を覚え易くて良いのではないですか？」

そしてまた、気の利いたことを言ってくれる。こんなところは、旧友で重力使いの出水保孝とは大違いであった。

そんな事を新鮮に感じて、よければ仲良く、ついては友人になつてみたいなあ——残酷なことを、彼は事実を知らぬが故に考えていた。

目の前の彼こそが、夜半無月こそが追い求めていた反政府組織の首謀者であり、討つべき敵である事。彼はそれを知らぬし、また夜半も伝えようとは思わない。

「ええまあ」それぞれが手を離し——真逆のことを思惟しながら、彼等は器用に言葉を交わす。

「本の片付け、手伝いましょうか」

「いえ、お恥ずかしいし、面倒なものなので大丈夫ですよ」

「そうですか……。それでは私は戻りますが、用があつたら気兼ねなく声を掛けてくださいね」

「はい、わざわざ丁寧に。ありがとうございました」

振り返り背を向けた夜半の表情は、仲間にさえ見せない冷酷なモノに移り変わり——それを見送るナツメの顔は、誰にも見せない穏やかなモノとなる。

皮肉とは、こんな事を言うのだろうか——それは誰にも分からない。

夜半は戻ると直ぐに、ナツメが本の片づけを終えぬ内に、外へと興味を持たない内に解散するよう小声で命令を下し——そうし

て迅速に、一分と経たずに、アキラ達を含める数名は直ぐにその場を後にした。

蜘蛛の子を散らすように去ってくソレを、外付けの廊下で見下ろし見送りながら、夜半は様々なことに、改めて息を吐いた。

——そんな事も知らぬナツメは、本を棚へ整理していく中で、存在を忘れていた手紙を発見した。

それは、故郷で幼き頃から仲の良かった友人が、旅立ち際に渡してくれたものである。そんな、渴きを極めて封筒の中から手紙を取り出すと砂と化してしまいそんな儚さを持つ外観に、懐かしさすら漂う代物。

ナツメは足元に積み重ねた本をそのままに、慎重に手紙を、その中から取り出した。

手紙は——この環境では、故郷である北開発地区から来ることは絶対に無い。なぜならば、この東京から出る砂船は、ソコまで走らないからである。

その上月に一本という過疎具合から見て、手紙配達は酷く困難となる。砂嵐や、砂蟲サンドワームの状況から、また月に一本確かに出るというにとすら怪しいのだ。

だから、この手紙はその友人からの、最初で最後一枚となるであろうソレである。

ナツメは要らない考えを頭の中から排し、その拙い文面に目を落とす。

『拝啓、ナツメ様。お元気でしょうかと、旅立つばかりの貴方にこうして尋ねるのは、いつ読み返しても新鮮なお気持ちで読み始められるよう私なりに考えたからです。』

ちなみに私は元気です。元気な幼馴染の一方で、片方は酷く病弱という典型的な関係を築く事はありませんし、仮にそんな関係であれば貴方は旅立ちはしなかったでしょう。

それは置いとしまして、貴方と一ヶ月会わぬだけで永久にも感じる孤独を得た私は、恐らく貴方が帰ってくる頃には精神的にお婆さんになっていたりかもしれません。現実とは常に非常なモノなので、決して、誰かを助けて、そのお礼に城まで招待されている間に時間が経過して……なんてわざとらしい辻褄あわせは存在しません。

ともあれ、私は少しばかり寂しいです。本当ならば、貴方と共にビッグ・シティ大都市東京へ赴き、出水さんと貴方と、三人で楽しく過ごしたかったのですが、私には貴方のような特殊能力がありません。そればかりが悔やまれることです。

ところで、そちらではご友人は出来たでしょうか。好意を寄せる異性は現れたでしょうか。大都市よりも科学的には進んでいるこの街には、私にとって好ましい殿方はまだ居りませんのでご安心を。手紙としては短いようですが、長くてもなんだか女々しいのでこれで終わりとさせていただきます。どうか体調を崩さぬようお氣をつけて。

かしこ』

その手紙は、マナーがある程度出来ているのに——名前が書き忘れているようで、署名は何処を探しても存在しなかった。

ナツメは彼女の事を頭の隅に思い浮かべて、どうせコレも彼女の

考えだろうと思った。

名前を書かないのはわざとで、自分の名前を忘れないで欲しい、あるいは、書かずとも誰か分かる仲だろうとの事を表しているのだろ。小癪な技術である。

「ったく。……しかし、故郷か……」

思い浮かべれば、まだ二年と少ししか経過していないのだ。そう考えれば短くも感じるが——冗談とも知れぬ、『一ヶ月あわぬだけで永久に感じる』という一節に、それでは二年もすれば干からびてミイラになってしまうのではと、心中で突っ込みを入れてやった。

床に座り込んで、またソレを薄く焦げたような色の封筒に入れなおすと、開け放した窓から温い風が入り込んで、カーテンが妖しく踊る。

ナツメはソレを眺めながら、今日は早めに寝ようと、適当に考えた。

2 — 時間的すれ違い —

——中央地区第二区画。——
セントラル一六時四〇分現在——

そこは治安維持委員会、一般・特殊能力戦闘課本部ビル。日が傾いて、太陽の位置が遠くなり可視光線が空を青から赤へと変色させていく時間帯。

『——はい、届いているのならば良いのです。それでは、よろしく頼みましたよ』

地上二三階建ての二階部分である。そこは——武力制圧課、いわゆる第三課の——課長の作業室である。広いソコは、出入り口から真っ直ぐ大きく歩いても正面の壁にたどり着くまで数十歩程必要で、さらに入って右手側は全面ガラスというオシャレな雰囲気。

そこで、課長の実務机の上にあるパソコンの半透明のディスプレイの中には、一人の女性が映っていた。

紅いビジネススーツが良く似合うその美人は、治安維持委員会の委員長で——彼女はそれだけ言うと、画面をブラックアウトさせて消え去った。

残るのは——そのディスプレイに映る、禿げ上がった頭が特徴的な中年男である第三課の課長と、

「よろしく頼まりましたよ、課長」

その机の前に立つ、時代錯誤であるとしか言いようの無い大剣を背負った、女性一人である。

彼女は第三課の作業服を着ているので委員なものには間違いないし、課長が本部のデータにアクセスして確認したプロフィールとあい違いない存在なのだが……。

「何故お前がここに居るのだ」

彼女は中央地区勤めではなく、西地区の支部勤めの支部長であるはずだ。故に、彼女がこの場に居ること自体、大きな間違いであるし、何かの手違いだと信じたい。

うんざりして尋ねる課長ではあるが、彼女の事情は既に理解の範疇にあった。

貴族事件に巻き込まれた後、知り合いの支部長に全権を委ねて謹慎を受け、ナツメと共にココを目指したらしいとの事。だが途中で、反政府組織と思わしき連中に襲われて、離れ離れになったこと。支部へ派遣される前に付きまとわれていた、同期の友人、現在では選抜チームの一人である男に連れられるまま委員会本部に行ったらどうすれば良いか分からなくなったこと。

そして——彼女が受け渡された謹慎も、あと一週間と少しで終えてしまうこと。

全ては理解しているのだ。

だが、新聞社での麻薬栽培や売買、その背後関係の捜査や、個人の爆破テロなどの大きな事件が起こってから、まだ数週間しか経つ

ていない。忙しい時期であるのに、また今度は、至極どうでも良い——酷く面倒な——事が廻ってきた。

これはもう、うんざりだとか大変だとか気苦労が堪えないだとか、そんな言葉で収まる気がしない。

警察はテキパキと動いて手伝ってくれるが、委員会で事件を解決へと導かせるのは実質三課だけ。故に目まぐるしい日々が続いていた。

ナツメはまた——与えた三日間の休暇中であり、それが終えてこの場に顔を出すのは、二日後のことである。

「行く当ても無いので」

「簡潔な回答感謝する。そして委員会への献身的な態度や真面目な姿勢は評価に値するが——電車なら大分前に修復したから帰れるぞ。私の指示だ。戻っても誰も文句は言わん」

「しかしおめおめ舞い戻っては私が無能扱いをされてしまう。ただでさえ——適性武器が、大剣こんなものなのだから」

適正武器とは、そのままの意味で、個人が使うに易い武器の事。人には誰しも得て不得手があるものだが——能力者にとっての得ては、極端なモノである。

例えば同じ条件下に、狙撃の技術を持つ委員と、能力者を置いたとする。勿論、適性武器の説明をするにあたるので、その能力は狙撃に得となるものである。

そうすると——委員はまず、距離や風向き、その風速やらなにやらを確認した後、狙撃準備に移るが、能力者の場合、例えば視力強化の能力ならばスコープを使わず、そして弾丸に特殊効果を付加する能力ならば、その準備を行わず、定位置に着いた瞬間に射撃する。

勿論それは命中するのだ。これは極端な例であるが、彼等にとつての適性武器とは、能力と併用する事によって強大な結果を生み出す。つまりソレはある種の兵器と化す。

目の前の彼女、涼谷涼子すずたにりょうこの場合——炎に熱されてもそう簡単には劣化せず溶け出さない鉋物を使用した大剣であるために、『焰エッジ』と併用することが簡単になる。

そもそもの彼女が、接近戦が得意だということもあり、時代遅れではあるが剣類という形で適性武器になっているのだ。勿論、それは彼女だけというわけではない。

だがしかし、普通はソレを携行することは無い。ただでさえ手の内を明かすようなものであるからだ。銃のような、女子供でも容易に扱え、だがしかし訓練を積んだ者ならば、段違いの技術や攻撃力を見せるのならばまだしも、剣の様なモノならばすぐに警戒されて、そもそもその攻撃範囲に近づかれもせず、技術やら何やらを語る前に終わるだろう。

だが彼女がソレを意固地に携帯し、またそれ以外の武器を持たぬ理由は「常に持っていないと鈍りそうだし、他のものを持つと、ソチのほうに気が行くから」という簡単な理由である。

「難儀な奴だ……」

「だったら中央に戻してくれても良いじゃないですか。支部での仲間も皆売り飛ばされたみたいなので、丁度良いんじゃないですか？」

涼谷が西の支部勤めになって約二年。然程問題が起こらなかったのは、彼女の管轄がお金持ちの多い住宅地区の付近だったからであろう。だが、唯一大きな事件が起こったとすれば、やはりそれは、貴族誘拐事件である。

最も、その事件が公になり、また解決へと導かれたのはナツメのお陰ではあるのだが……。無意識の内に巻き込まれたという所が、また彼の評価すべき点であろう。

「……うむ。現行として西二区の仕事を受けているのは——東五区か。明日、いや、明後日には人員を派遣するとして……」

そうして彼は、冗談半分に告げられる台詞に対して真剣に考え込みキーボードを鳴らし、直後、ブラックアウトした半透明ディスプレイに、眩い人工灯が灯った。

涼谷が立つ位置でも、透けているために起動は分かるのだが、半透明の所為で何の操作をしているのかまでは判別がつかない。

だが少なくとも、涼谷の心の中には”もしかしたら”という淡いであろう期待はありありと強くなっている——そのディスプレイに映話ソフト、いわゆるテレビ電話が起動するのを見て、その期待は半ば確信へと移り変わった。

「——出たか。助かったぞ御影……」

御影、というのは東地区第五区画で、委員会支部の長たるを務める男の姓である。現在は、その地区と、本来涼谷が勤めるべき西地区第二区画支部の仕事を、支部全体で引き受けるという激務^{ハードワーク}を勤める尊敬すべき男である。

彼はつい二時間ほど前、さらに大きな――生死に関わるかもしれない――仕事を運命的に手に入れたのだが、手に余ると判断して委員長に投げ渡すという、意識的に、目には見えぬ死のルートを変更したばかりであった。

だから彼の顔は、今にも消えてなくなりそうなほど暗く、また精根尽き果てたように声も掠れているようである。髪がすべて無いのは、少なくともその影響では無いだろう。支部委員はその場に居合わせるようであるが、兎に角、一人で居るのかと錯覚するくらいに静かであった。

『ああ課長。委員長からの話は伝わっていますか？』

「うむ。ソレについては機敏に行動に移させてもらった。お前がそう気に病むことではない。――それとは別に、良い報告をお前に伝えるために電話を掛けたのだ」

満ち足りたような顔の課長に対して、御影はそんな言葉を理解できていないのか表情を曇らせ、または嫌な予感を感じたのか、当惑の念を抱いたような顔をして、薄っぺらいディスプレイの向こう側で言葉に詰まっていた。

課長は、これほどまでに疲弊しているのかと、少しばかり人としての良心を痛ませたので、次いで言葉を口にする。その、良い報告

を。

「お前の仕事はもう終わりだ」

—— 気持ちが行先して、言葉が上手く出なかった。

ともすれば辞職しろと言われていたような台詞に気づき慌てて訂正しようとする—— 彼は既に、驚いたように眼を剥きながら絶望の淵へ飛び込んだ後だった。

「待て御影。その、恐ろしく面倒で尾も掴めぬどころか影も姿も見えない仕事は終わりだ、という意味だ。お前は自分の地区の仕事に戻れるという事だ。落ち込むんじゃないぞ落ち着け」

『……、ああ。なるほど。課長こそ落ち着いてください。慌てた姿は似合いませんよ』

「え、あ、ああ。……、兎も角、言った通りだ。休暇は与えられずすまないが、北の五区画ならそう問題も無いだろう—— それでは、またな」

『はい。失礼します』

それから間もなく、映話ソフトは強制的に消されて、元の——
—— 様々な情報が文字として、あるいはグラフ、写真として載せられている画面へと戻る。

課長はほつと息を吐き、柄にも無く額に浮かび上がった汗を拭いた。それからまたディスプレイを消して—— 陽光が完全に紅く染まり、部屋の中が見方を変えれば凄惨な状況と見て取れる風に、

夕日が室内を染め上げる中で課長は再び、涼谷を向いた。

「それでは——丁度良い事に一週間後、能力レベル判別テストがある。中途半端な時期だが、四月になる前には仕事を全て整理しておくのが私の信条なんだな。結果が出れば、四人一組のグループに入る。勿論、選抜に入っても、だ」

「四月って……、今は何月でしたっけ」

無表情のまま涼谷は聞く。彼女は常にそうであるが、彼女とは仲が良い、あるいは長年の連れともなれば、少しばかり嬉しいのだと僅かな筋肉の膨長で伺う事が出来る。誰からも、無表情に見えていても。

無論、課長は名簿を見ずとも、自分の持つ課員の顔と名前を一致させることが出来る男である。彼女がいかに感情を、言葉以外で表に出さずともそれくらいは判断できる。

——因みに、能力レベル判別テストとは、その名の通り能力のレベルを判別する試験である。

筆記試験と実技試験、人格検査からなる物で、その結果は一年間を共にする四人一組のグループ振り分けの判断材料となる。

グループは基本的に凹凸同士で組ませて平均を取る——といふものではなく、能力レベルが近い者同士でくっつけることが多い。また、人格検査で集団行動について不適合な結果が出たものは、能力のレベルに応じて個人活動を認めるか否かを判断する。

仮に、能力レベルが第三課に所属する為に必要な、最低ラインを

下回る場合——通常、能力が弱化することは殆ど無いが——、他の技術試験を受け、適性する一課か二課に移される。最先端の情報技術か、科学技術を専門に活動する課である。もし適性しなければ、他を望まない限り、警察へと所属を余儀なくされるのだ。

ナツメは、AからEまでの五段階評価うちCランクという——
—ギリギリのラインのレベルであり、またその中を上中下で三段階評価したうち、^{マイナス}下という、所属する能力者の中で最も弱いという評価がされていた。

彼が委員会に所属している二年間、今までで二度試験を受ける機会があったが、その能力の成長性は極めて低く、殆ど無に等しかった。

……最も——。課長はふと考えて、首を振る。

彼に限って『覚醒』やら無意識による本能の解放等によって能力が抜群に強化されることは無いだろう。彼は自在に扱える最低ラインの能力を駆使することが一番似合っていて、それ故に評価されるのだ。勿論、他意はなく、悪い意味ではない。

「今は二月の九日だ。期待の新人が来るまで二ヶ月を切ったんだ。少しは見本になるよう善処してくれ」

「ああ、だから太陽光線が差す様に強いんですね。夜も八月辺りよりもっと寒いし」

涼谷は何処吹く風と言ったように話をそらす。面倒すぎるのか、課長はそれに反応を見せずに言葉を打ち返した。

「高緯度地域なぞは鼻水も凍りつく程だ。砂漠で生まれたのだから、その位で嘆くな」

彼女が委員会で働くようになって早七年。能力開発機構、いわゆる学園を卒業して直ぐのことなのでその歴史は存外に長いのだが――能力だけが成長する彼女は、課長には手の負えないほど図々しくなっていた。

それは、たまに敬語を忘れるほど。

課長は少し、面倒な人間だと息を吐いて、あっちへ行けと手を払う。

「住居施設に空きがある。受付で話せば適当に案内してくれるだろう。住処すみかが見つかるまでの当面は、そこで暮らしておけ」

委員会に所属するものの大半は、アパートやマンション、あるいは自宅住まいであるが、三割程度は、その関連ビルの住居施設に住んでいる。その中には例外があり――選抜チームの人間だけは重要な問題が無い限り半ば強制的にその施設に移り住む事になっている。

部屋の構造は似たり寄ったりだが、中は広く、必要最低限の家具、電気製品は揃っていて、勿論トイレバス付き。食事は、ビル内に食堂が存在するから問題は無い。

勿論、その費用は全て給料から天引きされるのだが、それでも社員寮ということで値段は控えめだ。

このビル内には、五階から十二階までがそれで、選抜チームが占

掘るのは十二階部分。

涼谷は、短く「わかりました」とだけ返事をして、珍しく足早に、その場を後にした。エリック・ジーンとは違う、筋肉によって引き締まった身体を鈍く揺らしながら、ズカズカと、揺れることの無い短い癖っ毛を見せて彼女は、その扉の向こうに姿を消した。

外はすっかり夜の帳とばりが落とされてしまっていて——あと少しで終業だと、課長は自分を励ました。

——ノウスシテイ北地区第一区。一七時二一分現在——

彼はナツメの依頼に対する報告書を書いていた。

薄暗い室内は——電球を取り替える事によって明るさを増す。その電球は、今話題となっている省電力だというのに長時間灯していても劣化せず、長い間使えるという代物である。

ナツメの前払い金によって購入したのだが、別段、彼は金に困っているという事は無い。寧ろ、彼はこの地域では有り余る方に属している。

それは彼が、火器類取扱店と情報屋を兼業しているからであり——
——そのどちらも、それぞれの仕事として十分なくらい繁盛しているからである。

名は知らずとも、その店の存在は多く知られている。そんな立派な噂の店。

彼の書く報告は、仕事を途中で断念したというお知らせであった。無論、前払い金は使い込んだが、ある程度の情報を掴んだ為に返す予定は無い。

ナツメから依頼されたのは詰まるところ——違法薬物売買の裏側。

——全ては、確信的犯罪によって様々な小物品を扱う店が爆破テロを受けて、薬物売買の事実が委員会に伝わったことに始まる。

そうして彼は、ナツメの依頼を受けて調べたのだが、それは酷く驚くべき事実——とは言いがたい。なにせ彼は、事実を掴んでいないからだ。もし情報を得ていたとしたら、成功したという報告書に書き直すべく励むしかない。

それはあくまで推測でしかないが、その憶測は限りなく事実に近いもので——新聞社が、その破綻しかけている新聞に誰も知らぬ記事を載せて売り上げを伸ばそうという画策の結果、薬物を栽培し、その事実を政府に擦り付けようとした事。

無論、それは嘘であるから裁かれるが、その頃には新聞は売り切れ御免の状態である。

だがしかし、そこまでが——委員会の迅速な行動によって防がれた、薬物売買の全てだと思わしき事件の表側。

彼が掴んだのは勿論その程度の事ではなく、その裏。何処にも生息せず、また作り出すには広大な空間と肥沃した土地、莫大なる実験器具、材料が必要となる違法薬物の草——を作り出す組織団

体。

それは、新聞社が摘発されて動きを大幅制限されたが、その元々持ち合わせる強大な権力のお陰で今すぐにでも、第二の薬物売買を行おうとしている。

その目的などもない、もとい考えに到るのだが、それは彼等の仕事だろうと店主は書くのを止める。

これまでが推測で、彼が事実として手に入れたものは、”その組織は中央地区に存在する”という事だけである。彼はソコから書き出し、それ以降は全て暗号で書き綴る。

下手に中身を見られたら困るからであり――。

ソレをカウンターで書いていると、不意に、扉がノックも無しに蹴破られた。

激しい音が鳴る。扉が壁に叩きつけられて、店主の緊張は最高潮に昇った。心臓が締め付けられ、同時に股間部分が縮み上がる。神経に、冷たい何かが走り全身に痛みが降り注いだ。

外は暗いが、明るい電球はソレを影無く映し出す。そいつは男で――寒さを防ぐためか、身を隠すためか。黒い革のジャケットに黒いマフラーを着る、長髪長身で、痩せ気味の男であった。

「邪魔するぜ」

男はブーツで床を鳴らし、問答無用でカウンターにやってきた。店主は何気ない素振り――まるで書いていた帳簿でもどかさように

——カウンターの下へとソレを潜り込ませて、次いで、ベルトに挟む拳銃に手をかけた。

「悪いな。今日は休みだつて表に貼っ付けて置いたんだが——
今の若者は、文字も読めねえのか」

この世界では、仕事をするにあたって文字を読むということは最低限の常識である。というか、そうしなければ仕事が出来ない。故にそれは、人が息をするのと同じくらい”当たり前”な事であり——
だから、どんな孤児でも赤子の頃から捨て子で一人で生き抜いた人間でも、大抵は字が読める。

だからその台詞は、貧困に病める人間を馬鹿にしたものではなく——
十分に、相手が挑発として受け止められるのだ。

「良いんだそれで。俺あ店に用事は無い」

だが——店主が拳銃に手をかけたことは、どんな防衛手段よりも意味の無いことであつた。

それは、男が、店主が反応するよりも早く銃を抜き、その額に突きつけたからである。

そのまま筒と表現して正しいような黒い銃身バレルが額から伸びていた。電動ドリルを黒く塗りつぶして雰囲気を出しただけのようなフレームがその奥に存在していた。全体が、そもそも金槌のような形のそれは——
サブマシンガン短機関銃である。

小型である故に、一部ではマシンピストルとも呼ばれている代物であつた。

その筒のようなバレルは、サブレッサー減音機が装着されている為であり、その為に、彼がそもそも自身を殺しに来たのだとよくわかった。

イングラムM一。と呼ばれるそれは一秒で三十発近くを対象に連射し、撃ち込める驚異的な速度を有しており——だが、単発射撃の拳銃とは違い、一度避けてしまえば安心だろう。

一度引き金を絞れば一瞬で弾倉は空になり、また避けた対象を一秒以内に追って弾を当てる事も、サブレッサー付きと言っても反動を考えれば不可能だろう。

だが問題は——この銃口を、如何にして額から外すか、という事である。

「アンタにしか興味がねエんだよ」

「残念、俺は同姓愛者じゃないんだ」

「知ってるぜ。アンタは十年前の戦場を生き抜いた勇士だつて。それがまだ四十も後半だつーのに、もう隠居しやがって」

「なあにが言いてえんだ、お前」

——ただの、自惚れた男だと思っていた。組織に、ある程度の実力を見込まれて自分を消しに来た野郎だと思っていたが。まさかあの紛争を知り、また俺を勇士だとのたまる男だとは。

店主は脳内で何か、今まで押すことなく錆び付いていたスイッチに何かが触れるのを感じた。

「ただ”ネズミ”を消して来いって言われたただけなんだが——
俺あアンタみたいな男に出会えて光栄だっつー話だよ。けどまあ
……」

トリガーガードに掛けられていた指が、トリガーに触れて音が鳴る。かちやりと言う金属音が、彼の背筋に冷水と思わしき冷たさを覚えさせ、もとい、”蘇らせた”。

「結局、今が老害^{ヨウガイ}じゃあ、意味がないんだけどさ」

虚しそうに、面倒そうに——夢を潰された少年のような目で店主を見て、そうして躊躇い無く、その指に力が籠った瞬間。

店主の瞳が、ブラウンから完全なる黒へと移り変わった。ただそれだけ故に男がソレに気づくことも無く、そうして——乾いた音が脳に響き、銃口では火花が……散らなかった。

銃弾は銃口^{マスル}からはじき出されず——結果、フルオートのために引き金を絞っているのに、それ以上の発砲音は響かずに、男は銃口を突きつけたまま固まった。

「おいおい、紛争を知り、俺を知ってるなら何故侮る？ 何故俺を知っていないがら——ソコまで、無防備なんだ？」

渋く低い声はしわがれることなく、先ほどとは全く違う、威厳を孕む声となる。その言葉は否応無しに男の腹に沈み込み、床を鳴らして後退する店主に、何も出来ず、銃口を突き付けたままの格好、姿勢で硬直した。

「俺はお前に触れずして殺せるぞ。そこまで”お勉強”してこなかったのかなあ？ はあん？」

男は動けなかった。それこそ正に指一本として。それは恐怖からくる脱力などではない。

何かしらの力——恐らく彼の特殊能力が発動したのだ。発砲も、その力で不可にされたのだ。

彼は今更に——恐怖を感じた。自分の知らぬ、持ち合わせぬ力によって全てを不可能にさせる彼に。この状況に。この場に居合わせる自分に。これから起こり得る全ての可能性に。

相手の力を伺うために自分を捨て駒にした——組織に。

声を搾り出すも声帯が動かず、男は驚くことも、心臓を高鳴らせることも自由に出来ない。今恐れを感じているものこそが、この肉体自体だと言うのに。

「お前はどこの組織から遣わされた？」

そう聞かれて不意に——口元と、喉の奥だけが自由の中に放り出された。だから男は精一杯、そう、誰もがやかましく、そのまま情報を聞き出すことなく殺してしまいそうな程嫌になる叫び声を、本能的に発した。それはまるで、アクセルを踏みっぱなしで吹かしていたように。

「うあああ——ッ！」

直後——握ったまま、離すことの出来ない銃が暴発した。

爆音があたりに響き渡り大気が震え視界がブレる。彼の手元で凄まじい衝撃が手を髑る。炎が手を焦がし——吹き飛ばされた部品が、その開いた瞳に飛び込んだ。

また、叫ぼうと喉に力を込めるのに——また他力が働いて動かぬそれは、無情にもその部品が瞳に肉薄し、また突き刺さる苦しみを押し殺すべくしか道はない。

筋肉は動かず、瞳を小さな部品が貫通していくのを嫌でも感じざるを得ず——。

「ああ、ダメだなお前さん。若造^{ニジ}すぎる、年齢と年季——それと知能を付けてこい。そうすれば力は嫌でも付いてくるし、そうすれば俺に勝てる。かもしれねーな」

いや、そりやねーか。僅かに上げていた頬すらも——微かに見せていた笑顔さえも消して、引き抜いた銃を男に向けた。

「暗殺はこつそりやれ。暗殺に短機関銃^{そいつ}は不向きだ——これまでの先輩からのお勉強代は、高くつくぜ」

回転式拳銃は、撃鉄^{ハンマー}を起こすことにより弾倉^{シリンダー}より弾を薬室に運び、

「だが割引して俺は手を使ってやるが——お代は命です」

口元が嫌らしく引きつつて——引き金が、十分な力を持って絞られると同時に弾倉は回転し、さらに撃鉄が叩きつけられ弾丸を撃ち出す。

乾いた発砲音が、コレまでに無いくらい済んだ空気に響き渡り――

――これまでにないくらい、男の心臓に冷たい恐怖を与えていた。

簡単な構造は、動作は、彼の持つ回転式拳銃故であり――弾
き出された弾丸は、亜音速で飛来するソレは、相手に『発砲された』
と言う事実だけを残して頭を貫き、一瞬にして絶命させる。

だと言うのに――血は一切漏れ出ることはなく、弾丸は脳内
に留まったまま。

指が幾本か無く、ボロ雑巾のような手でガラクタを持ち延ばす腕
は崩れず――男は立ったまま死を得ていた。

「ったく、能力を――自在念力を使うのも楽じゃあない。老害
つつーのも、あながち間違っちゃいないな」

どこからともなく、風もないのに飛んできた黒塗りのゴミ袋は思
い通りに男を頭から飲み込んだ。

次いで縄が蛇のように男を縛り上げ、取っ手を作り上げた所で――
彼は静かに仰け反って、優しく軋む床に寝た。

「この生活も、嫌いじゃあ無かったんだけどな……」

顎髭を撫でながら、もう片方の手をカウンターに起き――そ
れを支点に、軽々彼は向こうに飛び出る。

中年だというのに衰えを知らないその肉体は、死んだ青年の身体
を、まるで空箱を扱うように持ち上げて、次いで肩に担いだ。

血が漏れぬように能力は発動を継続しているも、彼は疲れを知らぬように意気揚揚と外へ出た。

「巻き込まれたらナツメにでも助けてもらうかな」

呟くが、そんな気は更々無く、またそれほど実力が落ちた実感はない。だから冗談っぽく、一人で笑って彼は男を捨てに行った。

夜の空気は、自分の心中とは真反対に澄んでいて———そんな嫌気に吐き気を催した。

3 — すれ違い —

—— セントラル 中央地区第三区画、中央広場、六時二八分現在 ——

ナツメは静かに目を開けた。意識は瞬く間に覚醒し、同時に極端なまでの寒さを覚えた。そよ風は直接肌に突き刺さり、冬の冷気が身に染みる。気温は恐らく一桁台であろうと思わせるその寒さは、公園のベンチに横たわっているが故に感じるソレだった。

妙に首が痛む。肩が凝り、俄かに頭痛に襲われた。吐息が風に流れて視界を白く染める。景色は薄れて、再び鮮明に移り変わるその刹那——動く影を、彼は捉えていた。

彼は、凍りついたように動かない関節を少しずつ曲げながら、半身を起こしてベンチに座りなおした。全身が麻痺し、感覚が失せている。だが寒さだけは感じ、そして細かく震え続けるところを見ると、命の存続には割りと余裕があるらしい。

「残念ですが、君が待っている人間は来れなくなりましたね」

見知らぬソレは、黒い外套に身を包んで接近する。足音は無音に近く、気配も稀薄だった。まるで亡霊かそれに準ずる何かのような妙な不気味さを外套という形で纏っているかのようだった。だからナツメは警戒し、慎重に、久しぶりにその空間を震わせた言葉に対して、沈黙を返した。

—— ナツメがここに居る理由^{わけ}は、とある一人の女性に呼び出されたからだ。女性に、と言ってもそんなめでたい話でも、浮いた話というわけでもない。”再会”というのが目的なのだ。”彼女”とは、

一度別れてから一週間ほど会っていない。一応、再会を願って別れたわけだから、落ち着いた今、嫌でも会わなければならぬ。

そう考えていた最中に、一通の手紙が届いた。先日、否、今日明け方の、仕事終わりのことだった。帰宅すると、玄関扉のポストに突き刺さるソレがあった。開けて読んでみると、今日の早朝何時からいどこそこへ、という意味の文章がつらつら綴られていて、最後に差出人の名前が書かれていた。ナツメはそれを確認して、素直にこの場所へとやってきたのだが……。

「というか、そもそも貴方を此処に呼び出したのは私ですし」

声は高く、少女らしさがそこにあつた。軽い口調で、どこことなく友人と相對するように紡がれる言葉はナツメに向けられて——恐らく——彼女は、やがてベンチに座るナツメの前で立ち止まった。

「——って普通、警戒して来ないと思つてたんですが、まさか本当に来るなんて、ね……？」

頭にはフードを被り、顔は影がかかつて判別付かない。だが長い髪が外套の中を流れているのは見えて、彼女は恐らく彼女という二人称で大丈夫なのだろうと、ナツメは適当に判断した。

だから、という訳でもないが、ナツメは両肘を膝に置き、それやらやや前屈姿勢で手を組み、その上に顎を置いて視線を落とした。ようやく寒さに慣れてきたのもあつてか震えは止まり、それから上着の中の拳銃の位置を頭の中で確認した。

ナツメのロングコートはめくれて尻の後ろに溜まり、足元は風が通ると一層冷える。中には風を通さぬ素材のジャケットを着込み、

その上に肩に掛けるタイプのホルスターを装備していた。そして其処に刺さるのは、愛銃。だが今は、それを使わぬことを祈るばかりであった。

「貴方は夏目^{なつめ}さんで、良いんですね？」

予期していた返答が無い事に慌てたのか、焦ったのか、手を胸の前で忙しなく動かしてそう聞いた。外套が揺れて、フードが翻り、口元が露になる。すらっと形の良い顎に、不安げに歪んでいる薄い唇がそこにはあつて、ナツメはそれから漸く頷いた。

「普通、そちらから名乗るものなんじゃあないですか？ まあ俺はアンタに興味が無いから――」

ふう、と短く息を吐く。白煙が口から漏れて、体温が若干、失われた。だが取り立てて寒くなったという程ではなく、だがそれでも睡魔に侵される頭は如実に覚めていった。ナツメはそれから暫く振りに、と立ち上がる。体の節々が軋み悲鳴を上げる。彼はそのまま両腕を空へと伸ばし、全身をほぐして、それから脱力した。

「どうでもいいんだが、ね」

「でも私は貴方に用事と、そうね、たった今興味を持ちました。だから付き合ってもらわなくちゃなりません」

半眼で、いかにも興味なさげな表情で見るナツメに、彼女はそう言つて、鼻筋に掛かるフードの裾を掴み、そして勢い良く頭の後ろへと引き剥がした。そしてようやく、彼女のその凜々しくもどこか幼さが残る、割と、否、しっかりと美形寄りの顔が日の下にさらされた。

そこで気がついた。今頭上に置くこの空には、いつの間にか太陽が顔を出していた事に。

大きな瞳は見開かれ、長い睫がどことなく育ちの良さを想像させた。彼女はそんな眼でナツメを見据えると、此処からが本題だと、先ほどまで彼が座っていたベンチに促した。彼女はナツメが仕方無しに腰を落とすと直ぐに横に並び、それから寒そうに膝の上で両手を組んで、

「最近になって反政府組織テロの活動が活発になっています。それはある日、ある事件を境にして——そう、貴方が反政府組織の呉氏崎こしざきと西篠にししを捕らえてから……」

彼女は結局名乗らぬまま、そう言って視線を控えめにナツメへと送る。が、彼はそんな事には気付かずに、彼女の言葉に対しての思惟に耽ひたっていた。

——この女がそれを口にすると言う事は、少なくとも政府かソレに準ずる組織の人間。あるいは、反政府組織の人間に違いは無いだろう。前者と願いたいところだが、後者の線が濃厚である。個人的に接触するにしても、政府の人間ならば委員会本部、支部にて待つていれば良い事。それをしないと言う事は……。

しかし殺気は見えない。仇討ちやお礼参りならば、近くに件の兩名が潜んでいそうなモノだが、能力を軽く発動させて耳を澄ませて周囲を窺うも、少なくとも公園内には自身と彼女以外には誰かが居る様子は無かった。

「ああ、そう。自己紹介が遅れました。私は刃金美咲はがねみさきと申します。

恐らく勘違いしているようですが、それでも立派な政府の人間なんですよ」

外套を羽織っているからであろうか。彼女はあるのか無いのか判別が付き難い胸を反らして誇らしげに、自身が、委員会ではなく軍の人間で、一つ年下の後輩で……などと、要らぬ事を告げてきた。そして手渡される証明書を確認してから、ナツメは漸く、その薄っぺらい半眼をしっかりと醒めた様な眼に直した。

その中で、不意に刃金の表情が固まる。硬直などと言ったものではなく、まるで静止画になったかのような、不自然なモノだった。

——違和感がナツメの中を駆け抜ける。

「軍だから能力者でもないし——」

言葉が紡がれ耳に届く。だが傍らの少女はぴたりと唇を閉じたままであり、それから僅か数瞬の間が開いてから、たった今聞こえた台詞と同じ風に唇が動いた。

妙な感覚が、背筋を凍らせる。肌がざわめく。首筋がむず痒くなつた。

そして、それを最後に声は途絶える。風が消え、寒さが失せ、色が褪せ、世界の全てが崩落した。全てが一瞬の内に、何が起こったのか、何が起こっているのかすら理解できぬままに、開く眼が見るのは、ただ暗黒一色のみであつた。まるで空から墨汁が流され全てを黒く染めたように、何も残さなかつた。

なるほど——これは、

「^{ハニートラップ}魅惑なる夢現」……そう、気付いただろう。これは幻想だ。貴様に送る、私からの、な」

闇の中で声が染み渡って肌に伝わり脳に刻まれる。声はまだ若い男の声で、言葉の節々に、余裕と驕りとが孕まれていた。まるで、まんまと罠に嵌ったナツメをあざ笑っているかのようにもあつた。

「気付かなかったか？ 妙な感覚。例えば、あるはずの音が無い、あるはずの気配が無い、なんて事が」

——そういえば。彼は言われて思い出す。刃金美咲を名乗った架空の人物は、不意に現れ、そして足音も気配も感じさせずに肉薄した。だから、少なからずとも妙だとは感じていた。

だが、その妙なモノはそれ以降の、本当は反政府組織の人間なのでは？ という疑念に囚われて忘却の彼方へと失念する。故に、今のこの現状を導いてしまった——と言い訳したいところだが、恐らく幻想に包まれたのは、それよりも随分と前の話だろう。彼女の存在に疑問を抱いている時点で、幻覚^{ゆめ}の中の登場人物に意識を向けているその時点で、手遅れだ、と彼は考えた。

「貴様を公園へ招いた。これは現実だ。そして来た。ベンチに座り、数分と経たずに眠りに付いた。そして目覚め、吐息を漏らした。それは真実^{ほんとう}だ。だが、貴様が見た人物、その景色は嘘だ。虚構だ。貴様が無意識に作り出した理想なのかもしれないし、悪夢なのかもしれない。貴様がナニを見るかまで、私が手伝ってやる事は出来ないからわからないが」

言葉は、声は、どこからともなく聞こえてくる。闇の中、ただ残

された彼の意識に、語りかけられていた。

「私が何処の人間なのか、理解できるだろう？　だが、なぜ自分程度の能力者をこんなまどろっこしい手段を用いて手を下そうとするのか、分からぬだろう。ならば教えてやろう」

パチン、と。指を鳴らす音が、空間を白く塗り替える。然しそれでもナツメは元の世界に戻されず、その代わりとして、目の前に一人の男の出現を許していた。

また気配は無く、まるでそこには何も存在していないのかと思われた。ただ視覚的にそれを認識するだけであり、声も先と同じように、頭に直接響いていた。

「貴様の組織、治安維持委員会には強者がいる。それこそ、私程度ではとても敵わぬほどのがな。だが、だが、おまえ貴様。強ければ相応に注意するし警戒もする。対策も立てるから、逃げる事くらいは可能となる」

だが。彼は再びそれを口にした。ナツメはただそれを聞くだけで何もせず、否、何もしようとせずに、言葉を受け入れ続けた。

「だが弱い貴様は違う。貴様の能力は委員会に属する事が出来るギリギリのレベルだというのに、遥かに強い西篠に、正々堂々と打ち勝った。奇跡などではなく、確かな実力で。だから恐ろしい。底がどれほど深いか理解できているはずなのに、嵌ってしまう。油断を払拭しても、それは回避不能に思えた。貴様は弱い、だから強いんだ。だから恐ろしく、だから！」

「成る程、と理解してやるが——そんな御託が並べられる暇がある

なら、さつさと殺せばいいだろう？　少なくともついさつきまで、その機会が^{チャンス}あったつーのによ」

久しぶりに、久方振りに、声を出した。空間を震わせた。が、恐らくソレもナツメの幻想なのだろう。ただ頭の中で考えた事が、声に出したという風に、勝手に脳内で演出された。それだけのことなのだ。

それを裏付けるように、目の前の男は言葉を受けて硬直するといふよりは、次に何を言おうか迷っているかのように動かないだけだった。だからナツメはそれ以上は無駄だと考え、あるかもわからぬ自身の肉体をそのままにして、意識を無にした。

最早それらを受け入れるだけ無駄であり、そしてこの場から抜け出す事を理解したナツメは静かに――考えるのを、やめた。

その刹那の事であった。

額のど真ん中に、激痛が走る。何かが凄まじい勢いで衝突したかのように首が後ろへ押され、顔は空を仰ぐ。身体はベンチの背もたれに押し付けられて――気がつくと、世界は鮮明に、その瞳に映っていた。いつのまにか元の世界が彼を受け入れ、そして再び寒さを覚えた。

その直後に、脳が震盪^{しんとう}して意識が揺らぐ。世界が揺れる。ぶれる。ぼやけ、その輪郭が曖昧に見えた。だが同時に、周囲のざわめきが聞こえた。二、三人がうるたえるような声ではなく、十数人が何事だと驚くようなものだった。

それで理解する。幻覚を見せられている間に囲まれたのだと。そ

して反政府組織は寄せ集めの戦闘集団ではなく、割合に精鋭部隊だという事を思い出した。ならば、この十数人はそれなりに腕が立つのだろう。

「幻覚というのは、対象者がおよそ深い睡眠から目覚めるに十分な衝撃を与える事で、無効化できる。そう今のうちに、な。そして言葉は聞こえども見れなかった現実^{せかい}を視覚的に認識できるようになった今、貴様はどのような感想を漏らす？」

顔を元の位置に戻して、眼前から広がる広大な景色を見渡した。とはいうが、その公園は広いが広大というには余りにも狭すぎる場所であるし、どちらにしろ、人だかりが景色にかぶさり、狭さを顕著にしていた。

目の前には黒いコートに身を包み、顔面に大火傷でも負っているのか、包帯で眼や鼻、口以外を開けて包み隠している男。そしてその背後に、分厚い、濃い緑色のジャケットを揃えて制服のように着込む十数名の男女がアーチを形作るように並ぶ。彼らはそれぞれ手元に重火器を備えており、”準備”は万端であるらしい。

逃げ場は塞がれ、立ち上がるのがやっとであろうと思われた。

ならばどうする？ ナツメは気怠げに考えた。

抵抗すれば、逃げようとすれば恐らく痛いだろう。

「大人しくしていれば痛くはしない」

彼はそう言うが、痛いと感じる暇も無く意識を奪われるだけだ。なら大人しく従うか？ 彼は自身に問う。しかし、

「愚問だな」

と、直ぐに吐き捨てた。次いで彼は瞬間的に懐へと手をつ込むと、素早くホルスターからリボルバーを掴み、その抜き様に撃鉄を起こす。そしてその銃口は迷わず自身のコメカミに突きつけられて――ド派手な破裂音が、周囲に炸裂した。

が。そのシリンダーには装弾数限界まで弾丸が装填されていたはずである。それを確認したのが家を出る直前だったし、それ以降は使用する以前に触れてすら居ない。だから、弾が無いはずが無い。今思惑通りに、頭蓋骨を砕き貫通し、脳みそを掻き乱して僅か一瞬よりも遥かに短い時間の中で自身を絶命たらしめる筈だった。

そう、”筈”だったのだ。

「組織の足枷となるのなら迷わず死を選ぶ、か。狗の鏡だな」

「アンタの弾丸は此処。^{マグナム} ついでにスピードローダーも、此処ね」

男の後ろから、一歩大またで一人の女性が現れた。片手には銃床^{ストック}を折りたたむ、黒塗りの短機関銃^{サブマシンガン}。一般にスコピオンと呼ばれる、小型のサブマシンガンであった。一分間におよそ七五〇発の弾丸を撃ちこめるソレを至近距離で突きつけながら――もう片方の手に、弾丸が詰まったスピードローダーと、指の間に挟まれた六発の弾丸があった。

恐らく彼女の能力は瞬間移動か、空間転移だろう。これで完全に逃げる手段は消えうせた。瞬く間に、その可能性が消失していくのが手に取るように理解できて、思わず寒気がした。胸の奥から熱さ

が——蘇る。

——ナツメの髪が逆立った。

寒さが失せる。だがそれは、再び幻覚が身を包むが故、では無く。

意識が冴える。力が湧きあがり、肉が踊る。それから立ち上がると、同時に、十数挺分のレーザーサイトが、ナツメの全身に集中した。

「殺してみろよ。出来るのなら」

芝居はここまで。仕立て上げはもう終わりだ。後は存分に思い通りにするだけ。恐らく殺しはしないし、此方も殺せない。だから逃げても戦うもなんでも御座れ、という所だろう。

つまり、向こうは、目の前の武装兵連中^{ゲリラ}は既に準備を万端にしているが、此方は”今”ようやく準備を終わらしたのだ。だから後は自由時間。その判断の全てはナツメが基準で、誰が咎めるも無く。死のうが生きようが全ては自己責任であるが、ナツメは今死ぬる自信は無かった。

というか、向こう側——反政府組織がそう簡単にこの場で始末してくれる筈が無いだろう。それを裏付けるように、彼らは幻覚を見せられている最中ナツメには手出しすらしなかったし、彼が能力を発動させても、威嚇とばかりにレーザーポインタで全身を鰐るだけである。つまりは、”まだ”この命は重要なのだ。

しかし——ナツメの言葉に反応するように、そのポインタはそろそろと群れを成して動き移動し、そしてそれぞれが大体半分に分か

れて、左右の太腿に集中した。ナツメは頬を嫌らしげに吊り上げた、不敵な笑みを浮かべたまま、その顔を徐々に暗くしていった。ストレスによって血の巡りが瞬く間に悪くなったかのようなだった。

「誰も貴様を殺しに来た等と、ひと言も言っていないはずだが……何を勘違いしていやがる？」

男は言いながら、右手を軽く上げる。それが少しでも下がれば、背後の連中は迷わず引き金を絞るだろう。銃口は火花を撒き散らし、点でも線でも捉えられぬ速さで弾丸を吐き出すだろう。鉛弾は容易に柔らかな肌を引き裂き肉に突き刺さり、骨を砕く。筋組織は修復不能なまでに掻き乱され、二度と歩けぬ体となる。

彼の行動は、いつでもそうする事が出来るぞという脅迫の意味を持っていたし、単純に仲間への合図とも相成っていた。

「まあ殺さないなら俺も助かるが」

「ああ、安心しろ。死ぬ一歩手前で、この私が命を賭けて貴様を守ってやる」

本心が欠片も存在しない会話の最中、ナツメの肉体は既に行動の予備動作へと入り込んだ。

否、予備動作へと移ったその瞬間、行動は半ば同時だと思われるほど素早く行われた。

ナツメが一瞬にして男へと肉薄する。

それはおよそ、男が想像に難くない行動だった筈なのに――彼は

想像を絶するその速度に、思わず驚き筋肉を萎縮させ、回避も攻撃も、その全てを一瞬遅れさせた。

故に、風を切り穿たれる弾丸の如き鋭い拳を、男は甘んじて受ける。貫かれたと勘違いするほどの激痛によって、彼が全ての感覚を奪われる。筈だった。

そう。この公園内においては、確かな未来は存在しない。それが例えば数センチ前方の顔面を殴り抜けようとする行動でも、絶対当たる、なんて事はない。それは、ナツメが独りきりだからであり、相手には無数の仲間がいるからである。

数が増えれば可能性が、選択の分岐が増える。分岐は鼠算で増殖し——たった一つきりしかないナツメの選択を、容易に遮断することも可能なのだ。

そして今も、

「ぐうつ」

広がる選択肢の一つが、幻術使いの身を守っていた。

下から振りあがる拳は——その瞬間、”入れ替わった”女性の腹部を穿ち突き刺さる。彼女は眼を剥き口を大きく開いて、呻き、後、嗚咽を漏らす。ナツメは、やはり空間転移を使う能力者だったのか、と理解してから、折りたたまれようとする肉体に付属する右手から、奪われていた弾丸とスピードローダーを取り返した。

空間転移は、使用者のレベルが高ければ欲しいものだけを手元に、そして好きな場所に移動させる事が出来る。が、未熟であれば、な

いし中途半端であるのならば、身近の空間を代償として交換しなければならぬのだ。だから、弾丸を奪った時も、手のひらの虚空に入れ替えた。

そして今、人間一人分を入れ替える分の虚空は、周囲に人が密集しているが故に、見つからず。その為に彼女は自身と入れ替えたのだ。そうするしかなかった。彼女は人を犠牲にするくらいなら、上司を見捨てるくらいならこの身を捨てると考えたのだろう。

「随分な忠誠心だ」

彼はそれだけ吐き捨てて、俯き半ば中腰となる彼女の顔を包み隠す長めの髪を掴み、顔を上げさせる。身体はソレと伴って背筋を伸ばし、彼は彼女を反転させて、背に回りこんだ。腕は首を軽く締め、そして手に握ったままの拳銃は弾丸を再装填され、彼女の後頭部に突きつけられた。

「卑怯者！」

と言うのが、ナツメの行動を見守らざるを得ない反政府組織連中の感想、感情だった。

——特殊能力とは、使用者の集中力、精神安定によってその効果が左右される。故に、この状況はナツメに力を貸してくれるのだ。敵にとっては緊張が、ナツメは取り戻した余裕が心を満たす。だが囲まれているには違いないこの現状では、まだ逃げる算段を立てられるものではなかった。

「この世の悪意を掻き集めて具現化したような奴だ」

「委員会がこれほどまでとは……」

それぞれがそれぞれなりに持った感想を口から漏らす。その台詞がナツメの芯に触れ怒りを促し、拳銃の引き金を引くきっかけになるかもしれないと、欠片も考えられていないようだった。が、どちらにせよ、ナツメはそのつもりは無いのだが……。

甘い香りが鼻を掠める。整髪量らしきその匂いは、眼前数センチにある女性の髪から漂っているらしかった。彼女は痛みに堪え、そして後頭部に触れる冷たく、そして無情なまでに硬い感触に、恐怖を催し小刻みに震えていた。

彼女がその気になれば、彼女の中で半ば確定している不可避の死から容易に脱する事が出来る筈なのに、彼女の頭は混乱に、痛みに、恐怖に、怒りに満ち満ちていて、それどころではないらしい。

このままならば、彼女を人質にとって逃げ出せる事も可能であろうが——それも、時間の問題である。

ナツメは見たのだ。その浮かれている最中に。自身の立場を半ば忘れかけた、その瞬間に。

——ここは中央区画の公園。公園を出れば、否、出なくともその場から背の高いビルが頭を突き出しているのが見える。その一つのビル屋上部で、太陽光が何かを反射した。それを、見た。

「……っ」

声が漏れる。半ば反射的に、言葉に成る。

慌てて、彼女に掛ける腕の力を緩め、拘束から自力で逃げ出せる程度まで余裕を与えた。これで彼女が逃げれば被害は自分だけに留まるだろう。恐らく、今から数秒もしない内に――。

乾いた銃声によつて、大気が振動する。

瞬間、彼女を捕らえていた右腕、その上腕部に血花が咲いた。

衝撃が肉を掻き分け、筋肉を引き裂いた。体勢が崩れ、痛みが脳に染み入った。意識が一瞬空白に染まり、呼吸は数秒停止する。後に、怒涛の鉄砲水が如く来る激痛は、ナツメから逃れようと走り出した女性からワンテンポ遅れて、彼を背後のベンチに追いやった。

爆発音のような音を掻き鳴らしながら、ベンチの板がへし折れ砕け、受け止めきれぬ勢いを持つ青年と共にその身を崩壊させた。続けて、その金属で出来る骨組みが鋭さを以って、大地を目指して倒れるナツメの右肩を貫いた。

反政府組織連中が、それからようやく、狙撃兵の配置を思い出す。ついで間抜けなまでに気付けなかった幻術使いの射撃合図を見て理解し、それぞれが慌てて銃を構え、空気を劈く一斉掃射が開始された――。

——セントラル
中央地区第二区画。二二時四〇分現在――

隣の区画で騒動の、晩。治安維持委員会、第三課本部はいつに無く忙しく、いつに無く慌しく、いつに無く落ち着きが無かった。それは出かける寸前になって家の鍵を紛失した際の心情に似ていた。

「まだ見つからないのか！」

課長の怒声が室内に響き渡る。報告に戻った数人の委員は直立不動で、その表情をしかめ俯いたままだった。

——ナツメが罾を罾で返そうと提案した。自身を呼び出したのが、恐らく反政府組織の連中だと憶測を語ったから、課長もソレに乗り、ナツメの衣服に発信装置を縫込み、そして無数の待ち伏せ起用して彼らのアジトを見つけ出そうと考え、実行した。

だが。だというのに——それは半ば途中まで成功していたのに、ナツメを見失った。

一斉掃射がナツメを襲った。そこまでは報告に来たその全員が目撃していて、そしてその全員が、彼の死を覚悟した。土煙が立ち、彼の姿が包まれるも、数秒もせぬ内に血の煙がそれを塗り替えるだろうと思っていた。

が、その予想を遥かに凌駕する自体が彼らの眼に飛び込んだ。それは、ナツメがそこから無傷で立ち上がり、瞬く間に武装兵を虐殺していく光景であり——それが幻覚だと理解し正氣に戻った頃には既に、その公園には彼らが居た後など欠片も存在していなかった。

だから今怒られていた。

だから今後悔の最中に居た。

「私が居ながら……」

エリック・ジェーンはどんな障害物が行方を阻もうとも全てを見透かす『透視』の眼を持っていた。

「言い訳も浮かばねえ」

出水保孝は^{いすみやすたか}”重力を操作”し全ての逃げ場を潰して足止めできる力を持っていた。

残る瞬間移動能力者も、^{テレポーター}心音感知能力者も、何よりも敵の能力に冒されたことに衝撃を受け、声を出す事すらままならなかった。

「……しかし、ナツメの事だ。情報を漏らすくらいなら寝返りも、自殺も厭わないだろう。だから、あまり期待はしないほうが良いが……、自己完結の能力は希少だ。そして能力の程度^{レベル}も関係なしとするあの戦闘能力は、向こうにとっても貴重だ。少なくとも死は決定されていない」

「だが、どうするつもりだ？　今まで折角この都市^{まち}の外の任務で存在を隠し続けてたのに、イキナリばれて、しかも捕まるなんてよオ」

出水は歯を食いしばりながら課長に問うた。彼はソレに対して首を振り、

「そもそも反政府組織^{せいせいしゅうし}が何を目的としているかすら判然としていないのだ。だから我等もそう簡単に動けない。少なくとも、救出しろとは、私は命令できん」

「悔しいですが、それが正しいですわ。気付かれぬと、確固たる自信を持てる距離に居たのにも関わらず……」二キロ以上離れていたのにも関わらず”ですわ。私たちはあの、包帯男の能力に嵌っている

た」

「精鋭の俺たちを遥かに凌駕する精鋭か。マジにどうするんだ」

どうにもならぬわ。課長はそれだけ口にして、浮かせた腰を椅子に落とし、溜息をついた。

空間内の全員が意気消沈とする。まるでそれを現わすかのように、窓の外の闇は更に深さを増していた。

SKILL 4 『逆境』

——某所——

「起きろ」

声と共に冷水が肉体に染みこんだ。瞬間、音は全てが掻き消され、異常なほどの冷氣が彼を——『夏目鳴爪なつめなづめ』を襲い込む。一瞬にして回復しかけた生命力を極限までに追い込んで、目がようやく開けられようとすると刹那、耳が音を認識し始めるその瞬間、濡れた髪は強引に掴まれ、垂れる顔は引き上げられた。

冷たい水が傷に染みる。蚯蚓みみず腫れなんて言葉が生易しく感じるその深い傷跡は、同じ箇所にも何度も確に鞭を振るわれた故に出来た裂傷であった。その傷跡は、引き締まり薄く筋肉を浮き上がらせる彼の肉体に、典型的な拷問、あるいはお仕置きを想像おもわせた。

男は醜惡な吐息をナツメに吐きかけながら、彼の意識を覚醒いざなに誘う。が、その行動よりも早く、ナツメの頭は起きていた。しかし彼はそれを知ってか知らずか、それとも単なる八つ当たりか暴力行為が趣味なのか、力いっぱいその拳で頬を殴り抜けた。

肉を叩く音が響く。コンクリートの壁に囲まれたが故にどこまでも響き渡るような錯覚を得たのかと思ったが、どうやら自分の頭が一瞬の音を何度も反芻させているのだと、彼は気が付いた。もう痛みなど感じる余裕は無く、ただの衝撃が身体を揺らすだけだった。

早く意識を失いたい。そう願う一方で、

「はっ、なんだア、その目は？」

彼の無意識は敵意を持って牙を剥いた。目が鋭く、決して希望を捨てず失望を持たぬ眼光を光らせ、顔は表情を変えぬ。何の恨みも無い、ある一定の良識を持つ人間が見れば不気味に思っだろう。だが「タガ」が外れた尋問員にとっては、単に齒向かう一奴隷にしか見えない。

故に拳は、再度その赤く染まり、本来の二倍近くまで腫れ上がる頬を叩いていた。ソレが故に大きく開かれるべき目はうつすらとしか世界を認識する事が出来ず、耳も極端な高音か、大きな声しか聞き取る事が出来ずに居た。

——何日経過したのか分からない。その術は無い。だが興味も無い。

自分が何故生かされているのか理解できなかった。

「だから言ってるだろう。俺は長い事、砂漠——この都市まちの外の任務に就いてたから、二年、いや三年か……それくらい委員会に所属していても、この都市に滞在したのも大体半年に満たない。だから友達も、親しい間柄の人間すらも少ないし」

無論、自分に与えられる委員会内の情報は、限り無く少なかった。

だからといって、それを吐露する謂われも無いのだが——どちらにせよ、彼らが求めるであろう情報が無いことくらいの判別がついた。彼らもそのくらい、容易に想像できるはずだ。だというのに、この肉体、精神を痛めつける一方で、殺しはしない。ギリギリの所で生かし続けるのだ。

故に、首まで浸かるは生き地獄。反射的に、本能的に表面を偽ることは出来ても、彼自身が実際に見ているのは深い暗闇でしかなかった。

この場所が何処なのか分からない。何が目的なのか分からない。なぜ自分なのか分からない。なぜ、これほどの力があって、一度委員会本部への襲撃が成功しているのに、こんな事をしているのか分からなかった。

敵が、敵は反政府組織であるに違いない。が――俺は一体、ソレに対して何を知っている？

ナツメは”未知”の恐怖に包まれていた。何も知らぬが故に怖くて、何も出来ない。仮に此処から逃げ出すことが出来たとしても、もし此処が、砂漠のど真ん中だったら？ 敵地の中心だったら？ 今のこの生き地獄が、本当はまだ幸せな、本当に幸福な幻想に近い状況に思える現状だとしたら？

背筋が凍る。

頬がまた衝撃を受けて、身体が揺れる。視界がぶれる。脳が震盪し、意識がいきそうになった。

「んな事アどーでもいいんだよ。ツーか聞いてねえし。お前に対する尋問はまだこれから。コイツはただの朝のご挨拶ツて奴よ。」オハヨウ、ナツメくん」？」

壁から伸びる鎖に四肢が繋がれる。伸びるといっても、たるむ事が出来るほどの余裕を持つわけではないために、半ば壁に貼り付け

られるような形で——彼は感覚の鈍い腹部で拳を飲み込んだ。衝撃が内臓を貫き、壁に流れて消える。ナツメは喉許まで溢れる胃液の反流を抑え呑み下し、溺死を防ぐ。

それから大きく口を空けて、その空間の濁った空気を貪る中で——気がつくと男はそこから失せ、彼が見るのは閉じかかった扉だけだった。

「……はア、なんで俺が……」

こんな目に。そう口にしようとして、異常なまでに重くなる瞼に阻まれた。口を動かす元気が出ない。今起きたばかりだというのに、また眠くなってきてしまったのだ。まるでだらしない、学生の休日のように——。

ナツメの意識は、そこで途絶えた。

——中央地区^{セントラル}地区第二区画。一。時五五分現在——

「しまった。国内外交は全て奴に任せていたから、何をすれば良いか分からん」

その上、砂漠^{そと}から戻ってきた後、その報告を聞きそびれて——二週間、内一週間は行方不明となっている。

そろそろ、近辺の辛うじて生き残っている街への配給なのだが——人口把握も、技術提供の程度も曖昧だし、そもそも街の誰が代表者なのかすら知らない。最も、向こう側に住み込みで居る政府の人間が居るから、ただ砂漠を渡れる人材が向かうだけなのだが——。

今この状況で、それが可能となる人間を準備するとなると、割合に難しい事となっていた。

「……はあ。自分の目的の為に部下を使うのは構いませんが、あまり此方に支障をきたすような事は……」

電話の向こうで、失望を含む溜息が聞こえた。申し訳ないという気持ちを孕みながら彼は電話越しに深々と頭を下げる。それから相手の言葉を受けて、電話を切った。ブチリとなんだか無情な音がして、彼——治安維持委員会、第三課課長はうな垂れる。

結局、自身が行う手筈は全て電話相手——彼が所属する委員会を統べる長たる存在、華月委員長はなつきがすることとなった。彼女なら適正な判断の元、的確で素早い指示を遅れるだろう。

「私のような老いばれとは違ってな」

自虐的に独りごちる一方で、その瞳には未だ若さを忘れぬ力があつた。圧倒的な威圧を持てるその眼力は、彼が課長に上り詰めるために得た経験だけでは到底説明できぬ強さであるが——。

瞬きをする。目を閉じ、そして一瞬後に開ける。すると、目の前には黒い影——誰かが居た。不躰にも、扉を開けずに瞬間移動で来たであろうソレは、気怠そうに一方の足に体重をかけて、喉を震わせた。

「禿高はたか、只今参上しました」

「来るのが一日遅い」

力なく言葉を漏らす課長には既に先ほどの眼力は失われていて、疲れきった様に椅子に身体を預けた。背もたれは僅かに下がり、その視線は天井を向く。禿高を名乗る男はズボンの尻ポケットに突っ込んだ薄っぺらい、一枚だけの資料を取り出して、前説も置かず唐突に告げ始める。

「反政府組織の調査に向かわせた、高田、鈴木、美鈴……あー、その六名の消息が途絶えた、と報告したかったんですがね。昨日は。その直後に手がかりを得て探したところ、発見いたしました」

厚いナイロン製のジャケットのファスナーが開き、彼はその内ポケットから茶封筒を取り出した。が、その瞬間、手元からそれは一瞬にして消失し——ぼとりと音を立てて、課長の資料で散らばる机の上に落ちた。そしてご丁寧に中身である写真はそれぞれ分散し、わざわざ手を使う必要なく、視線を落とすだけで、課長は中身を確認できた。

ぱつと見では全体的に赤すぎて何が描写されているのか分からない。しかし、その中で一枚だけあった、並ぶ墓標の写真を見て、それがすべて原形無き肉塊で死体なのだと理解できた。それはあまりにも無残で、残酷で、冷酷な写真であった。

だがそれには確かな意味があった。ただ殺すだけでは、これほどまでに無駄な解体作業は行わないだろう。最も、これを行った相手が普通ならば。だから課長は考えた。恐らくこれは脅しなのだと。この六体分の死体は、不用意に近づいたり探ったりすればこうしてやるぞ、と言う脅迫なのだ。

——ならば、大して近づいていないのにも関わらず、さらに向こ

うから襲われたナツメは一体……？

彼はその存在を可能な限りここに置かなかったし、襲われる危険性を抑えるために情報も与えなかった。それもこれも、彼の、課長のたった一つの思惑、良く言えば作戦のためなのだが——自分以外の誰かがそれを知るはずが無い。故に、彼が攫われる原因が、要因が、一週間経過した現在でも見出せなかった。

無論、ナツメの居場所も、発見できていないのである。

「ご苦労。……そうだな、次の任務まで待機を命ずる、といった所だ」

「了解、と言いたいところですが、ねえ……課長。届かない場所に手、届かせてみたいとは思いませんか？」

妖しく男の声が響く。課長は眉間に皺を寄せて彼を睨み、

「誰だ、貴様……？」

机の引き出しにしまいこんだ、護身用の拳銃、もとい引き出しに、その取っ手に手を伸ばす——しかし。そうした瞬間、気がつくと、禿高は既に机のすぐ手前にまで迫っていた。

「ヤですね、俺ですよ。ただ単に、仕事外手当てに色を付けてくれるだけでいいんです。最も、命は張れませんがね」

彼はいつもの調子で言葉を口に、そして出すぎた態度で抱かれたであろう妙な疑念を振り払うように、両手を頭の後ろで組んで、微笑んだ。課長はソレを見て短い嘆息の後、任務ではなく、自身の私

用を、彼に伝えた。

ぼとりと、腐った柿が木の枝から落ちるように、腕はその下腕の半ばから滑り落ちた。筋繊維は既に腐りその繋がりを希薄にしてい
て、血は血の悪臭ではなく、汚水の如き醜悪な臭いを振り撒いた。
ぼとりと、ぐちゃりと音がするのは、中途半端に血液を残していた
からだ。

そしてそれが、その音がきつかけで目を覚ます。途端に感じたの
は部屋に充満し始める悪臭と——脳味噌に直接針を突き刺されたか
のような、鋭い痛み。鼻に付く腐った生鮮品を長らく放置したかの
ような臭いが吐き気を促す。鋭い痛みは彼の肉体、そして精神、思
考の全てを停止させた。

長引くその痛みの原因が分からずに、混乱する。そしてその余韻
をたっぷりに、その激痛は徐々に程度を引いて行った。最も、その
精神力で何とか耐えられる程度であるのだが。

「ッ———！」

押し殺した叫びが、かび臭い部屋の中に響き渡る。人造石で四方
を固めた、独房のような部屋である。気温は朝になろうと夜になろ
うと変わらず低く、吐く息は白く染まる。そして壁に鎖で繋がれた
彼は、途端に、爆音の如き音を立てて開かれた扉に、心臓を掬われ
た気分になった。

「っるせえんだよ、クソツタレが。今何時だと思ってたんだ？ ……
臭えな、また糞でも漏らしたかと思ったが——壊死した腕が腐って
落ちてンな」

頭が割れるように痛い。男の声がまるで、耳元で超音波を放たれているかのようなだった。細胞が壊死して痛みも触れた感覚も失われたはずだったこの右腕は、喪失した瞬間に痛みだけを伝える。故に、鎖流れている感覚も、その締め付けられる窮屈感も、彼には無かった。

間もなく彼の意識は途切れて、短い悲鳴を後に、鎖に支え、もとい吊るされる。首はギリギリ締め切らない程度に緩む長さを持っていて、崩れた腕の断面は鎖に縛られ止血の効果を及ぼされた。

扉を突き破る勢いで入ってきた男は短い嘆息を落として、可哀想に、とおよそ彼の外見に似つかわしくない台詞を吐き捨てた。それから、背に気配を感じて——その主をその目で確認せぬままに、口を開いた。

「もって一日、二日ってトコだろうな。いや、飲まず喰わず垂れ流しで拘束状態、これで二週間って……コイツ、下っ端だろ？ 上位連中はバケモンだよ」

「いえ、この男——ナツメだからここまで保ったのですよ。完全に自分の中で終わる、自己完結の特殊能力……そしてこの戦闘力や生命力を見るに、一年や二年で鍛えられたものではない」

生まれ持ったその才能と絶え間ない努力の賜物だろうと、好青年の様相を呈する男は、ただそう口にした。優男風である彼は短い黒髪を掻き揚げ全てを後ろへ流し、オールバックに決めている。そして尋問員よりやや背の低く、背後でその男が立つと、その頭は彼の肩あたりで終えていた。

尋問員の方は筋骨逞しく、シャツ姿になればその筋肉が隆々と浮

き出ているであろう程肉体は武骨であつた。髭を蓄える彼はその顎を撫でて吐息を漏らし、背後でゆっくりと扉が閉まる音を聞きながら、言葉を続けた。

「伏兵？」

アレが？ 男は背後の扉を親指で指して聞いた。冗談でも言うような軽さで。

彼らの足音は長く冷たい通路に響き渡る。その後頭部が前へずれるのを見て、

「伏兵が目立ちすぎるかよ」

「確かに。しかし少なくとも、有象無象の一部には見えましたがよね？ この私が目をつけなければ、そのまま流してしまいそうなほどか弱い彼を」

確かに彼の言うとおり、特筆して目をつけるべき男ではなかった。それなりの實力を持つ『西篠』がやられた時だって半ば相打ちに近かったし、『アキラ』と対峙したときも殆ど紙一重だったらしい。だからわざわざこちらから動くほどではなかった、と、聞いた限りの情報を思い出して、彼は頷いた。

その程度の強さの人間なら治安維持委員会に腐るほど居るだろう。ただ今までソレが無かつたのは、出くわさなかつたり、その所属している組織として、そして個人としても動きづらかつたからだろう。そう考えれば、砂漠から久しぶりに帰ってきて世間もろくに知らないような彼は、十分に動きやすかつたのかもしれない。そしてタイミングが良かったのも、その要因だろう。

そして、まるで促されたように、彼の脳裏に予感が過ぎった。

もしかして呼び戻されたのか？　しかし一体誰が。そしてどうやってその状況を見極めて？

いや、それ以前に――砂漠を歩いて過疎地域から戻ってきた事実を見たのだから、警戒すべきだったのではないだろうか。背後にはまるで千里眼をもつかのような組織が居る事を前提に考えて。だがどちらにせよ、先手は打てた。

しかし……。

「ナツメつつつたけか。奴ほど……なんつーかな、不安つつウか、見てて嫌な気分になる人間は始めてだ」

「死して尚仁王立ちで硬直しそうですもんね……」

ナツメのもつ不屈の眼力には、さすがの彼でも弱気を吐かざるを得なかった。最も、それは弱気と言うよりは半ば口に近い言葉なのだが――。

やがて一分もせず通路の終着点へと到着する。目の前には数段の扉があり、そして天井と同化する、床と平行に存在する蓋のような扉があつて、彼はソレへと手を伸ばした。

――大都市東京より北北東に三八キロ地点　一四時。。分現在――

——ピリリ、ピリリ——

籠った電子音が静かに大地を敷き詰める砂を揺らす。男はその振動を手のひらで感じて、片手に携帯無線機を持ちつつ、顔を上げて周囲を見渡した。眼前に広がるのは何一つ変わらぬベージュ一色の乾いた景色。風は熱風となり、地面の砂は太陽光を反射して限りなく近くまで下げられる顔を焼く。故に酷く熱く、その顎からは汗が滴り落ちた。

日差しは一日の中で一番強く鋭く激しくなる時刻である。まさか、朝から出かけた筈なのにこんな時刻になるとは思わなかった彼は、その為にこの僅か十数分で、街に戻るまで残っている計算で節約した水を、予定の倍近く消費していた。そしてまた、彼は慣れぬ喉の渇きに耐え切れずに、腰に下げる革製の水袋に手を伸ばした。

その瞬間、彼の手元に稲妻の如き衝撃が走る。凄まじい激痛に、強く弾かれた手はそのまま水袋に触れる事無く屠られて、痛い口にする暇も無く、怒声は頭から被された。

「この状況下での水分の過剰摂取は肉体^{からだ}によろしくないのですわ。喉が潤う程度が丁度良い。汗として流しては摂取した意味がない」

日よけとして被る外套から、透き通るような長い金髪が零れて風に流れる。声は周囲に良く響く高さを持って、そして同時に、近くに居るもう一人に同意の首肯を促した。

「つーか何であたしまで……。この能力、砂漠^{そと}じゃ負担掛かるんだけど……ん？」

暑苦しそうに剥ぎ取るフードによって露になった頭には、太陽の

光に輝く青黒い癖つ毛が短く跳ねている。彼女は踏みにじった大地の中に何か硬いものを感じて、そしてさらに、その足の下から妙な電子音を聞いて、眉を顰めた。

男は声を上げる。

「おい、そいつだ。目標発見」

彼女は額に浮かぶ汗を手の甲で拭いながら、直射日光を避けるための外套をばたばたと仰ぎつつ屈み、そして厚底ブーツに踏まれた手のひら大の機械へと手を伸ばす。砂に埋もれ、だがそう深くない位置に、それはあった。だから簡単にそれを拾い上げ、積もる砂を振り払いながら顔の前に持ち上げた。それは、予想していた携帯無線機と同様の物体であった。そして持つてくるように、探查して回収してくるように言われたモノと同一の機械であった。

「シリアル確認^ととけよ」

手の甲をゴムの弾丸で葬られた男は赤く染まるその部分を生暖かい吐息でふーふーと冷やしながら彼女——涼谷涼子^{すずたにりょうこ}に命令する。実質この三人内のリーダーである彼にはその権利があつて、ソレ相應の風貌と信頼を持ち合わせていたために、彼女はなんの不平不満も漏らさずに、バッテリーパックを外して、本体に貼られてあるシールから、シリアルナンバーを露出させた。

「二。七……ビンゴって奴だね」

「第一目標は完了ですわね」

エリック・ジェーンはその碧眼を鋭く光らせながら口にする。涼

谷はその言葉を聴きながら、残り少ないバッテリーを元に戻して、携帯無線機を背負うバッグの中にしまいこんだ。それらをざっと見渡しながら、男——出水保孝は深い溜息をついた。いずみやすたか

そう、第一目標は完了した——。

まだ日は高い。近くの集落に待たせてある砂船まで、歩いて向かい、順調に進んでも日が暮れるにはまだ余裕の有る時間帯に戻るだろう。最悪の状況を考えると——多分、誰一人として戻る事は出来ない。

そして課せられたもう一つの任務には、その最悪の状況に自分から首を突っ込む羽目になる。任務を放棄する事は簡単だ。この重い瞼を閉じる次くらいに容易である。ただ諦めるだけで良いのだ。そして最初からその任務を断りたかった心情は、その決断をする際背中から押してくれる。頼もしい事この上ないわけだ。

が……。

「第二目標は……サンドワーム砂蟲の生態調査ですわね」

「実際のトコ、ただ単に倒して实力を見せてみるって所だろうね」

今回に限り部下と成り下がる彼女等二人は、やたらめつたらに乗り気であった。そんな彼女たちを尻目にリーダーである出水が、痛いのは嫌だから、死ぬのは怖いからなんて至極真つ当な理由を、まるで子どもが愚図るかのような口調で渋んで有耶無耶に任務を放棄することは出来ない。そうした途端に、威厳も権威も、簡単に吹き飛んでしまっだろう。

ちよつとした風によつて風景が直ぐに変わる、この砂漠のように。

しかし何もやらずに甘んじ流され死ぬくらいならば、出来る事を最後まで粘り尽くそうと考えるのが出水保孝である。ナツメが居れば、そんな心情を配慮して適切な部分で逃げを選択してくれるだろう——などと考えながら、彼は口を開けた。

「いくら任務だといつてもこれは『つい』に過ぎねえ。だから出来ることはやつて、危なくなったら逃げるのが先決だ。誰に拾われるよりも早く携帯無線は回収できたんだ」

時間も無エ水も無エ、体力はそこそこだがコンビネーションが致命的。そもそも砂蟲の情報が皆無なのだから、立ち向かう時点で選択を誤っている。だが任務だから戦うのが俺たちの性だ。^{サガ}イケる所迄行こう。

教本通りの台詞は彼なりの言葉に変換されて紡がれた。実力が任務に適していない、あるいは相手が未知数の場合に通常考えられる作戦、というよりも常識であるそれは、彼女等をなだめる為に発された。しかし人が人の為に作った教本通り^{テキスト}に行かないのが現実と言うものである。

「今まで砂蟲が討伐された記録が”無い”のは遭遇した者が居ない、ないし、遭遇してもその場に倒せる程度の実力者が居なかっただけだろう?」

「課せられる事自体、この時代じゃ無駄すぎるという考えがあるために、稀有ですものね」

つまりは、自分たちはその『正体不明の化けモノ』を倒せる実力

者であると彼女等は口にした。自分たちを、その力、能力を驕っていると思えぬ発言だった。

——現実是非情だ。

絶対、最強なんて力は存在しない。故に、相手の事を良く知っていても油断すべきではない。筈なのに、彼女等はそれも忘れて『選ばれた』ことに、その実力を『認められた』と勘違いして浮かれていた。それはおよそ彼女等らしくないことではあったが——そこはまあ”仕方が無い”で片付けられるだろう。

移動要塞とも言われる頑健な作りで対外戦用に大砲を備える砂船をたった一撃で仕留めるような化け物の討伐に選ばれたのである。それはこの力を認められたと見るしか無いだろう。

そして話によると、彼女等は知らないようだ——アキラと呼ばれる、反政府組織の人間がたった一人でミミズ型の巨大砂蟲を討伐したらしい。これを脅威と取るか、自身を落ち着かせる要因と捉えるかは自由であるが、少なくとも出水は脅威として感じていた。その、アキラと自称する男の存在を。

しかし彼は知らなかった。この史上で、砂蟲と呼ばれる巨大害虫を日課の如く蹴散らしていたその男の存在を。そしてなぜ、砂船が安全に砂漠^{そと}を行き来できて、砂蟲の出現が珍しいのか。なぜ——ナツメが常に砂漠^{そと}への、あるいは開発地区、発展途上地域へばかり派遣されていたのかを。

砂船を利用せず、この場所に携帯無線機を落としたところを見るに、少なくとも最低限の荷物で四〇帰路近くを徒歩で砂漠を横断したナツメの事を考えれば容易に分かる筈であるが——悲しいかな、

彼はその任務を、紙上では黒く塗りつぶされ『休暇中』と直されていた。故に、それを知る術は無かった。

「どちらにせよ少し引き返すべきだと思っただが」

「ああ、それは賛成」

「懸命な判断ですわ」

危機管理能力、先を見通す力はまだ残っているらしい。彼はそれを確認できただけでも安心できた。

そうしてポケットから方位磁石取り出し、手のひらの上で『S』の字を指すのを待つ間。

地面がゴゴゴゴと深い階層から鈍く重く低く鳴る地響きを、身体で感じて――。

世界は轟音を響き渡らせ、彼らの視界を黒く染める。

目の前に、巨大な砂蟲^{なにか}が出現した瞬間^{とき}のことである。

2 — 対砂蟲 —

「くっそー、いい加減しんどいなア」

広大な砂漠に弱音が一つ零れ落ちた。

しかしそれも半ばから轟音が飲み込み掻き消した。轟音の原因は、巨大な”みみず”がその身を力強く砂の大地に叩きつけた事である。凄まじい地響きが彼の身体を襲う。視界がブレて、仲間二人の姿がいくつか重なって見えた。

硝煙の臭いが鼻につき、砂煙が視界を淡く薄れさせる。出水保孝いずみやすたかは嘆息した。

サスペンダーで肩から吊り下げるチェストリグのポケットから小銃マガジンの弾倉を取り出し、入れ替える。小銃から振って落とされた空の弾倉が大地に落ちると同時に、彼は走り出した。

目の前には巨大に聳える、楼が如きミミズ。大昔、まだ大地がこれほどまで枯れる以前、未確認生命体で『モンゴリアン・デス・ワーム』なつめなつめと言うのが居たと夏目鳴爪が熱意逞しく弁を振るっていたのを思い出す。彼が見せた想像図は今日の前にしている、恐らく半身も見せていないであろうミミズの体躯に酷似していて、思わず溜息が出た。

もし——この大地が砂漠になった原因の影響で、冗談めかしくその存在を語られていたモンゴリアン・デス・ワームが実際に生まれってしまったのだとしたら。この今日の前にしている砂蟲サントワームがそうなのだとしたら——このミミズは人を容易に殺傷する毒を吐く。あまつ

さえ、電撃を操るらしい。

そして雨季の短い間に姿を現わすらしいが、雨季はなにしても偶然、数キロ南に進めば水を蓄える村がある。

「ダメですわっ！ 私の弾が弾かれる！」

リロードの為に後退し、そして入れ替わるようにすれ違うエリック・ジーンは報告を悲鳴混じりに口にする。出水はただ「お疲れ」とだけ返して、脇に抱えた小銃を構えなおした。

しかしデス・ワームは砂の中に隠れていて、得物が近づいたらその強烈な毒を吐き一撃で仕留めるらしい。さらに、今対峙するこの三人は中々に素早く、砂蟲自体の攻撃は一度も当たってはいいない。だというのに、この砂蟲はその得意とするらしい電撃で動きを止めようとする素振りはない。静電気の放電すら確認できていない。

ならば偽者だ。

出水保孝はそれを確認、確信してから、トリガーに指をかけた。

砂蟲の生え際で時代遅れ気味の大剣を力いっぱい振るう涼谷涼子は、その鋭い斬撃が甲殻に接触する瞬間、甲高い音と共に火花を散らし、大剣を弾かれていた。そして恐らくその刃が深く食い込んだ瞬間に効果を見せるであろう爆焰が、タイミングをずらして空中で瞬いた。

その度に砂蟲は苛付いたように身を震わせる。その行動は砂を吹き飛ばし、砂塵を起こす。そしてその間に砂蟲は瞬間的にその身を砂の中に隠して――。

「出水、出現ポイントッ！」

涼谷が叫ぶ。

出水は言われるより遙か以前に能力を酷使して、直径数百メートル内に、人間に対して負担にならぬ程度の重力を足す。加重は大地に手のひらを当てるような仕草と同様の効果をもたらし——故に、地中十数メートルに潜り込む砂蟲がこの砂漠中を泳ぐのを、どこをどの程度の速度で移動しているのかを、認識することが出来た。

そして今感じ取ったのは——自分の足元で、その胎動が終えたことだった。

「ここだッ！　そして……」

出水が強く、踏ん張りの悪い砂の大地で腰を落とす。僅かに上がる砂煙が、その中に確かな砂の粒を浮かび上げらせ——それはただ浮き上がる勢いに任せて上昇し始めるだけで、落ちる事を忘れたかのようにだった。

出水は続けて言葉を叫ぶ。それを精神的スイッチにしているかのように、それが能力の発動をきっかけにするように、出水の声は高らかに響く。

リジエクシヨン・フィールド
「反重力区域……だッ！」

得意気な笑みを顔に浮かべ、その瞬間——出水の足元は半球状に盛り上がる。その巨大さは詰めれば五人は容易に立てるであろう広さを持ち、その球体は瞬間的に楕円形になった。出水の視界は数瞬

の内に高くなつて——上昇は、止まる事を知らぬように、地中から飛び上がる砂蟲は延々と砂の中から吐き出され続けた。

出水を中心とする直径数百メートルは、重力操作が容易に利く。しかしそれは単なる円形だけに留まらず、円柱や立方形でも、その領域は任意で展開できる。故に、この砂蟲が地中で自力で自身の身体を支え勢いを止めるか、全長が出水の能力が届かぬほど長くなければ、無防備に重力の失せた空間に打ち上げられるのだ。

そしてこの調子で行けば恐らく思惑通りになるであろう事を、出水は確信し——エリック・ジェーンは対物狙撃銃を組み立て、弾を装填し終え、匍匐^{ほふく}態勢で銃を構え、そのスコープで様子を窺いながら、額から流れる汗を感じた。

涼谷涼子は空へと舞い上がる砂蟲を見ながら、背筋を凍らせ——何も知らぬは、ただその頂上にて勝利を確信した出水保孝だけとなつた。

「敵が未知であることを忘れないで欲しいな」

仲間の危険はその個人だけに留まらず、グループ全体に支障をもたらす。砂蟲と対峙する前までそれを考え危惧していたのは出水保孝の方であつたが、それを知つてか知らずか、涼谷は呆れ半ばに呟いた。

彼女が見上げるのは、先ほどまで寸胴だつたその、どこからか、そしてどこまでが腹か分からぬ部分から、によきりと言わんばかりに内側から鋭い二本のはさみを持つ腕が、外側の甲殻をひっぱり、まるで全身タイツを着込むかのように包まれて出で生やされた、その体軀だつた。

そんな現象が立て続けに起こり、今では出水から一メートル下から約一メートル毎に、その長くて細い、鋭いはさみを持つ腕が右脇、左脇とセツトで羅列するその姿はさながら、ミミズからムカデへと進化したようだった。

これで恐らく対人戦闘能力は、格段に上がってしまった。

これが元々持つ砂蟲の生態なのか、状況に応じて任意に進化した姿なのかは現状では判別付かない。だが状況が悪化した事は明らかだった。

瞬間的な攻撃力だけならば弾丸を超える大剣の、その強大な一撃を弾く甲殻を持つ砂蟲は、今までの受動態勢から能動態勢へと変動したのだ。今までの行動が全て防御のためだったのだと、嫌でも思いつ知らされたのだ。これからの行動は完全なる未知で、これまでの行動が全て無駄になったのだ。

「悪い冗談、ですわね……」

弱音の一つくらい零したところで何が変わるわけでもない。だがそれを呟いたことによって、エリック・ジェーンはこの目の前で起こったことが現実だと、頭の隅にまで刻み込まれた。嫌な感覚だと、心中呟いて、引き金に指をかけた。トリガーはまるでトリガーガードに接合しているのかと思ってしまいうくらい重く、ジェーンはそこから、この銃がどれほどの破壊力を持つか、その反動がどれほど自身の身体を蝕むか、軽く想像した。

それから意を決してインカムから出水に、自身の位置から直線で砂蟲の頭部へ、無重力の領域を作り出せと指示をだそうとしたが――

—インカムなど最初からつけていないことを思い出した。雑音を入れぬよう、イヤホンを耳に押し付けようとしたその指先が、虚しく軟骨を押した。

——そういえば、砂漠戦は今回が初めてだな、と。そう考えた、瞬間。

スコープの先の出水はようやくその異変に気付いたのか、慌てふためき、小銃の銃口を砂蟲の額に押し付けたまま硬直していた。なぜそれに気付けたのか。彼女は疑問を抱きながらその砂蟲の足元へと視線を移し——無数の細かい足が、その足元の砂に張り付いているのを見て、気分を害す。

おぞましいほどの数の細やかな足がまるで小さな虫の群れに見えて、鳥肌が立った。首筋が痒くなり、首元まで絞める対衝撃スーツのファスナー越しに、力強く肌を掻き走る。歯を噛み締め、彼女は思わず足元に向けて狙撃しそうになった。

恐らく、その砂中の身体の表面にも同じように無数の触手が如き腕、ないし足がコケのように生えて、砂に対する抵抗を強め摩擦を生じさせているのだろう。そして勢いを殺し、今現在完全に停止した。それを成功した。そして今分かった。

この砂蟲には知能があるのだ、と。そしてこの砂蟲は進化しているのだ。この闘いの中で。僅かなる時の中で。自分に、この状況に見合った変化を即座に反映させているのだ。

どうすればいい？ 彼女は自問する。その引き金にかけた指から、力が抜けるのを感じた。

本来ならば一撃で、進化する暇も無く殺すのが一番なのだ。というか、それしか退治する手段が無いと考えるのが妥当。であるのに、今は時間を与えずに、不利な状況へと導かれてしまった。

相手の生態を、弱点を考えるなんて暇も無く、ただ攻めるだけ攻めて、その分だけ弾かれ逃げられ、今に至る。外傷はないにしろ消耗は激しく、故に事態は最悪だった。

倒せるのか？ 疑問は解消されることなく、ただ募る。彼女は戦闘開始前まで浮かれていた自分を殴り飛ばしたくなった。

「――足が生えた？ つまり進化って訳か。この戦闘中に成長しているのだと？ 恐るべき速さで、人間など最初から眼中に無かったように。まるで小ばかにするように」

いや、進化したと考えるならば、ミミズは間違いだ。言うなれば芋虫だと言うところだが――出水はそこで、言葉を飲み込んだ。

「だから、だったら、なんだってんだッ！」

砂蟲の額に突きつける小銃の銃口から、おそらくあるであろう脳髄まで、レーザーサイトよろしく超重力の領域を管のように展開させて突き刺した。もはや零距离であるが為に空気抵抗の心配も無く、どの程度の加重に弾丸が堪えられるかなんて考える必要も無い。

セーフティを外し、そのまま三点バーストから全弾解放に切り替える。出水はその最中で大きく息を吸い込んで――地上十数メートルの、足場が酷く不安定な其処で、銃口をその鉄が如き硬い外皮に捻じ込むようにして、引き金を全力で絞った。

刹那、一度、手元を思いきり蹴飛ばされたかのような衝撃が走り、銃を押さえ込む全身が大きくブレた。反動で押し返される銃底が腹部を殴打する。が、そんな態勢が功を奏したのか、それ以降体は体重によって固定され、銃はその支点となった。

その銃口の前からは岩を砕いているような手ごたえがあつて、激しい砂埃が彼を覆う。だがその中で、その空気中で、僅かな湿り気を感じた――瞬間。

視界の端に、黒い影が走るのを垣間見た。

「んっ」

思わず声上がる。驚きに肩が弾む。油断した所為で、銃底が腹に食い込んで痛みが増した。が、次の瞬間、そんなものでは比較にならぬくらいの激痛が、襲い掛かる。

「んで――」

黒い影が走る。だがそれは肉薄する事無く、また一瞬にして姿を消した。だから見間違ひなのだと考えた。水分が圧倒的に足りぬ頭が見せた幻想なのだと、そう思ってしまった。

しかしその右腕に焼けるような熱さを覚えて彼は、先の幻影は実際に存在していて、知覚する暇も与えずに攻撃を終了したのだと、再認識する。そしてそれを理解したその刹那、バランスの崩れた身体は銃撃の衝撃に踏ん張りきれずに、宙に舞い上がった。

気がつくと引き金を絞っていた右手はその身からは失せていて、小銃を掴んだまま彼のやや右斜め頭上を飛び上がっていた。確かな

液体となる血を周囲に撒き散らしながら、そしてそれが先ほど感じた”空気中の湿り気”なのだ覚えながら、切り裂かれ失せた右腕の付け根を、その空中で虚しく掴んだ。

火傷をしてしまいそうなほど熱い液体が手のひらを覆う。粘り気のある、錆びた鉄を思わせる、だがどこことなく甘さを含む香りが鼻についた。

出水保孝はそんな右腕損失に気を取られ、空高くに放り出された瞬間、先ほどまで酷使していたその能力を解除して――砂蟲とともに、広大で、酷く枯れ果てている砂の大地へと、飛び込んだ。

「――頭部損傷、ダメージはデカイが……こちらの損傷も大きすぎる」

涼谷涼子は仕方無しに引つ張り出した、携帯式の対戦車榴弾発射筒を肩に担いで呟いた。

紅く染まる出水保孝は宙を彷徨う。誰かが受け止めなければ、本来柔らかい筈の砂上が一時の衝撃によって岩のように硬化し、そんな大地に叩きつけられ、恐らく絶命する。しかし、受け止める方もこの高さならば無事ではすまないだろう。

もし立場が逆であれば、出水はその重力操作の能力で容易に助け出したであろうが……。

しかし、彼が半ば不可避の一撃を得るまでに与えた損傷は、頭部の一部を吹き飛ばすほどのものであった。出水自身はそのダメージの所為で確認できていなかったであろうが、超重力によって弾き出された弾丸が純粹にその外皮を削り、そしてぶつかり合った衝撃を

利用して砕けた鉛玉が、さらに内部での破壊をもたらしたのだ。

そして”痛み”に堪え切れなかった砂蟲が、障害を排除するために攻撃をした。

その攻撃は圧倒的な速度を持っていた。遠目に、「ああ攻撃するな」と直感的に認識しなければ攻撃自体に気付けぬ速さで、そして数秒の間何が起こったのかもわからぬその鋭さで、全てを終わらせる。

脅威的だった。

そして普通ならば、ここで退くべきであった。

最優先目標は既に終了しているし、食料も水も最初の接触で全て砂の荒波に飲み込まれてしまった上に、弾も、現状の砂蟲と退治するには不十分すぎる。さらに砂蟲に対応できる威力を持たぬものが大半だ。付け加えて三人の戦力のうち、リーダーが真つ先に戦闘不能になった。残るは無力に近い接近タイプと、距離を詰められたら為すすべも無い遠距離狙撃タイプである。

勝てるわけが無い。そもそも、こんな人智を凌駕する化け物に勝てるものなど、最初からいなかったのではないか？

「ありえない、クソツタレ……ッ！」

愚痴が零れて、始めて自分が全てを諦めてしまったことを理解した。

こんなのは自分らしくない。否、こんな圧倒的に負けることなん

て今まで無かったのだから、新しい自分の一面とでも言うべきか。

涼谷涼子はそう考えながら、肩に担ぐRPG-7を柔らかな砂の上に落として捨てた。

エリック・ジェーンは彼女から一キロ離れた地点で対物狙撃銃から手を離し、空ろな眼でそれらを見守っていた。

空中に投げ出される出水保孝の意識の半分は既に失われていた。

そんな三人が、それぞれの心情の中で唯一共通して持つ感情は――
――絶望だった。

気がつくと西の空は、早くも紅く染まり始めていた。

――苦戦を強いられる出水一行より北方向に二キロ地点――

「ガキの遣いがようやく終わったと思ったら」

男の声は、西日によって黒く染まる影に咳かれた。手に握る水袋を口に運び、喉を鳴らして渴きを潤している最中に、傍らのもう一人が後を継いだ。

「随分な出迎えたなア」

彼は双眼鏡を手にして遠くの影を、その戦況を確認して、気だるそうに肩を抱く。その口から漏れるのは、諦観故の説得だった。

「なあアキラア、こいつに手を貸すには余りにも離れすぎちゃいる

し、付近には手負いに士気の失せた木偶だ。それに——あの形態は危ねえ。お前は大丈夫かも知れねえが……」

「高々二、三キロだろ？　どの道、もう日暮れだ」

アキラと呼ばれた——反発リベリオンの能力を持つ青年は、背負う荷物をその場に落とし、西日を半身に受けながら、傍らの友人を一瞥した。友人である彼が見たその表情は、憤怒に不快感を混ぜたような、恐らく一番機嫌が悪いであろう顔だった。その為に、嫌な予感が氷のように背筋を撫でた。

だから、ちょっと待て頭を冷やせ——そう告げようとした。しかしそれよりも早く、アキラは砂を巻き上げて、その場から姿を消していた。

——絶望を甘受した者が立ち尽くす、その砂上——

腕を喪失なくした。だからこそ勝てなくなった——なんて彼は嘯うそいた。

最初から勝てる見込みなど無かった。そしてそれを心の奥底で、頭の芯の部分で確信していたのだ。だというのに、逃げるタイミン
グを失い、逃走経路も、その資格も可能性も同時に手放した。やはりそれほどの量は両の手が無ければ抱え切れなかった代物だったのだろう。

個人には重すぎた。そしてこの連中同士でも持ちにく過ぎた。だからこの絶望に蹴落とされてしまったのだ——そう考えた。そう思考する頭が生える肉体は、ただ真っ直ぐに大地へと向かっていた。故にその命が、そう間もなく終えることを、彼は理解していた。

そして死を意識し、心の奥底から絶望を迎え入れる。この仲間^{メンバー}では、自分をこの状況から助けだせる訳がない。だから、無理に救出に、延命の手段に出てくれるよりは、自身の安全と延命に力を尽くしてくれる方が心情的に楽であるし、至極合理的に思えた。が――。

「死にたくは、ねエんだよな」

精神が騒ぎ乱れて落ち着かぬ。故に、全てを諦め世界の果てを見据える目を持つとも、彼は能力を発動させることが出来なかった。

なのに――彼の肉体から、一瞬、重力が失せた。そして直後、何かに抱えられるような、締め付けられるような感覚を腹部に覚え、強い気配を、誰かの体温を、出水は感じた。

「誰だつてそうだ。こんな所で、死にたかねーよなア」

――高く飛びあがり、脇に抱えるように出水保孝を救出したアキラは暗闇に落ち込む彼にそんな台詞を返して、高く聳える砂蟲へと向かった。凄まじい勢いで風を切り、風は熱風となつて肉体を蝕むが、それを熱いと、不快だと感じるより早く、その身体は異常な硬さを持つ外皮へ肉薄した。

そんな彼らへ、まるで索敵に掛かる異物を排除するように、無数の脚が鋭いハサミを携えて飛来。だがアキラは迷わず能力を展開。瞬間――彼を中心とする半径一メートル内の空間が俄かに歪む。彼は不敵な笑みを零した。

その形成された空間に何も知らずに、また何かを知るという概念を持たずに突き刺そうと引き裂こうと、自身に迫る異常を排除すべ

く現れ近寄るその十数、否、数十の触手が如き脚は、刹那にして、その全てがそれぞれ小さな塊と化した。

その先端部分^{ハサミ}が空間に突き刺さるが、強力な反発力を持つソレに侵入できるはずもなく、だがそれでも痛みを感じぬそれは力任せの介入を試みて――まず始めに外皮がひしゃげた。そして気体が何かに擦れる様な音が四方から響き、空間に満たされ、その間にも如実に伸びる足はその長さを減らして……。

「せーのっ！」

アキラが意気込むように力むと、その場に留まる超反発の効果を持つ空間は解き放たれて、周囲に衝撃波が吹き荒れる。脚は脆くなつたその根元からもげて吹き飛び、胴部分の百近い脚は一瞬にして失われた。

――それを見て、彼の相棒である三島^{みしま}は誇らしげに笑って、全てを見守った。荷物を背負いなおし、そして少し遠くでただ佇む一人の少女を、さらに遠方で大きな銃を抱えるように寝そべって出来事を見守る少女を視界に収めて、それらに接近を試みる。

だが彼女等はそれに気付く様子は無く、呆気なく疲弊し消耗されていく砂蟲を、ただただ見上げる事しか出来ていなかった。

「――おいマジかこりゃあ……はっ、すっかり醒めちゃった。どうやら俺あよ、まだ」

「喋るな、ただ俺にしがみ付け。舌を噛んで死にたかねーだろ？」

出水は頷き、その瞳に炎を灯す。そして次いで集中し、乱れる心

を治めて右腕に、その切断面に意識を集中させて、能力を発動させる。血管一本一本の切れ端をくつつけるように閉じて、その血の流れを止める。これでこれ以上の出血は防がれたが、今の彼に行える応急処置はこれだけであるために、まだ死の危機が去ったわけではなかった。

これ以上は、アキラの活躍がネックとなるのだが――。

「あと一分、我慢しな」

アキラは出水に囁いた。

次の瞬間、破裂音にも似た衝撃音がつんざいた。同時に砂蟲の身体は大きく仰け反って、アキラはその腹に着地する。そして間髪おかず、その直線ではない道を頭部目指して駆け上がる。激しく揺れる出水はただその腕にしがみ付き、アキラは高潮する力を拳に燦らせた。

その身が弾丸の如き速さで走り、風を斬る。凄まじい勢いと、速度と、そして強く踏みしめる足がその場に踏み留したためた。

何が起こったか理解できず、また考える力もため砂蟲はただ身体を起こそうとするだけであるが――その身が斜塔程度の角度に引き上げられた時には既に、アキラは大きく開く口元までたどり着いていた。

その口から流れる空気はただ土の臭いだけを運び――。

「なっ」

出水が何かを口にする遙か前に、彼は空中に振り上げられて、そ

の中で一度強い反発を受け、天高く舞い上がる。そして彼が空の一番高い場所にたどり着く頃、アキラはその砂蟲の口の中に入り込んでいた。

「おまえ砂蟲は死んじまえ」

アキラは口の中もぐりこみ奥に飲み込まれぬよう両手を何かを抱擁するように広げ、その手のひらで内壁を掴んでいた。その指先は内壁を抉るように鋭く突き刺さり、そして手のひらの、小さな領域を僅かに歪ませていた。そしてその領域は徐々に肥大化、膨長し――やがて手を、腕を、やがてその口腔内に満ち、溢れ始めて、

「まったく、実力も無え癖に手え出すんじゃねーつつんだよな……ッ！」

大きく開く口の先が、まるで放熱してその向こう側の景色に陽炎を作るように空間を、まるで膜を貼ったように不鮮明に変えていた。そしてその口の端に亀裂が細く深く走ると――途端にソレは、人間で言う喉下まで一瞬にして伸びだした。

そしてそのまま勢い良く縦一直線に裂け割れるかと思われたが――甲殻が如き外皮は、幾ら内から強大な力を溢れさせようと、無数の腕とは違いそう容易に破壊出来るものではなかった。故に避けたのは、その皮の薄い口元だけだったのだが……。

「無理か。ま、元々弱点だけ狙えばいいんだしな」

その一つの眩きの直後、展開された空間の、超反発を持つ歪みは一瞬にして――彼の右腕に、そして流れるように拳一点に集中した。手馴れたようにその領域の移動は至極緩やかであり、そして片手で

身体を固定するように内壁を掴んで、そして空いた右拳が、大きく振りかぶられて、一撃。

巨大な破裂音が砂蟲を中心とする砂上に響き渡る。共に、砂蟲の背の一部分、人間で言う延髄に近い場所が内側から強く押されるように、盛り上がり、激しく突き出した。衝撃が内壁から外皮の外へと貫きはじける。そしてその身は大きく揺れて――アキラはその最中で、もう一度内側から外へ向けて、弱点であろうその部分を殴り抜けた。

再び轟音がかすかに大地を揺らして――後、なんの前兆も見せず、痛がる素振りも絶命した風もなく、砂蟲の直立したその肉体は、静かに傾き始める。そして激しい衝撃を大地に浸透させて倒れるも、その姿は巻き上がる砂塵に隠れてしまう。

が、その砂蟲の命は絶えたのだと、その場にいる誰もが理解した。

――その後数分と待たず西日は消えうせ、砂漠に夜のとりきが落とされた。

夜は日中以上に砂漠での生存確率が低い。故に、絶望的な状況からさらに決して逃れられぬ場面へ移行する前に砂蟲を倒せたのは、不幸中の幸いという言葉が一番似合う展開だった。

――そんな彼らが、街に戻って再び絶望に近い衝撃を受けるのだが、それはまた後日の話となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1547j/>

運命に振り回される人間の鎮魂歌

2011年10月5日22時17分発行